

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Living Reality of the People's Army in Mongolia from the 1960s to the 1980s : a clue to modernity in Mongolia

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 娜仁格日勒 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00003897 |

1960～1980年代におけるモンゴル人民軍の生活実態

—20世紀のモンゴル社会を解読する1つの手がかり—

娜仁格日勒*

The Living Reality of the People's Army in Mongolia from the 1960s to the 1980s:
a clue to modernity in Mongolia

Narangerel

モンゴル人はどのような近代化を経験してきたのだろうか。辛亥革命をきっかけにモンゴルは独立を宣言し、艱難辛苦を伴いながらも今日まで存続してきた。20世紀のモンゴルにとって最大の課題は、中国・ソ連両大国の狭間でいかに自治国家として生き残るかということであった。モンゴルの地理的位置は、とりわけ、第二次世界大戦後の冷戦と、1960年代から顕著になる中ソ対立という、いわば「二重の冷戦」とも言える時期に、近代国家建設に非常に大きな影響を及ぼした。

中国とソ連の軍事対立を受けて、モンゴルは、ソ連にとって対中国の戦略的要衝となった。第二次世界大戦後、大幅な軍縮を行ったモンゴルでは、ソ連からの援助の下で1964年から軍拡を本格的に開始したが、軍隊の急増に伴い、様々な問題が生じた。基層部隊内部で発生した問題の詳細は従来の公式文献には現れるはずもない。本稿ではこの「二重の冷戦」期におけるモンゴルの軍隊生活を経験した退役軍人を取材し、彼らの証言に基づき、基層部隊の兵士の生活実態を描き、当時のモンゴル軍隊の実像に迫りたい。国際関係が一般兵士にどのような影響を与えていたかが具体的に把握されることによって、これまで等閑視されていた近代化過程が一層明らかになるだろう。

What have the Mongolian people experienced in the process of modernization? Taking the opportunity of revolution in China in 1911, Mongolia declared her independence and the independent situation has been maintained with many trials and tribulations. The most critical problem of Mongolia in

*日本学術振興会外国人招へい研究者（長期）、内蒙古大学教授

Key Words : Cold War, Sino-Soviet confrontation, People's Army in Mongolia, geopolitics, violence

キーワード : 冷戦, 中国・ソ連対立, モンゴル人民軍, 地政学, 暴力

the 20th century was how to survive between China and Russia. The Mongolian way of modern nation building was deeply influenced by its geopolitical situation, especially in the period of the “Double Cold War”, that is, the Cold War after the Second World War and the Sino-Soviet confrontation after 1960.

When relations between China and Soviet Russia broke down and subsequently led to military confrontation, Mongolia became a much more important region for Soviet Russia. Consequently Mongolia, which had reduced military spending after the Second World War, began to expand it again, supported by Russia in 1964. Because of the rapid expansion of armaments, many problems arose in the armed forces. But those problems were not reported in detail by official documents at that time. So the author interviewed retired soldiers who had served in the military during the period of the “Double Cold War”. According to their narratives, the author describes life in the basic army units and also makes clear the reality of the army in Mongolia. Through the acquirement of knowledge about the influence of international relations on ordinary soldiers, we can come to understand a neglected aspect of modernization.

| | |
|-------------------------------------|-----------------------------------|
| 1 はじめに | 5.1 元軍官僚等 |
| 2 問題の所在と先行研究 | 5.2 兵士への調査 |
| 3 1960～1980年代におけるモンゴルの軍 拡とその社会背景 | 5.3 体験者証言のまとめ |
| 3.1 モンゴル国軍の近代史の概況 | 5.4 調査中の関連する出来事 |
| 3.2 中国・ソ連対立とモンゴル軍拡 | 5.4.1 退役軍人の刺青 |
| 4 モンゴル軍とソ連軍の連携 | 5.4.2 ウランバートルからズゥーンバ ヤンまで |
| 4.1 モンゴル軍隊建設に対するソ連の援 助 | 5.4.3 ナライヒーン・ゴルドク |
| 4.2 両国の兵士誓詞の比較 | 5.4.4 民主化後の兵役につく状況 |
| 4.2.1 ソ連（ロシア連邦）の兵士誓詞 | 6 軍拡もたらした社会的影響 |
| 4.2.2 モンゴル兵士の誓詞 | 6.1 社会への貢献—教育・専門技術人 材の養成・演芸・建築 |
| 4.2.3 モンゴル・ソ連兵士誓詞の比較 | 6.2 マイナスの影響 |
| 5 軍隊生活の実態—当事者の証言 | 7 おわりに |

1 はじめに

モンゴルの現在をとらえ、将来を考えるにあたって、その独特な地理的位置を無視することはできない。世界の数多くの民族のなかで、その運命が、地理的位置によってこれほど左右されることもまれであろうと思われるほどである。

辛亥革命を機に清朝からの独立を宣言して以来、モンゴルはソ連・ロシアによる後援を受けて実質的な独立を果たしたが、戦後、東アジア国際秩序の基調となった1945年のヤルタ協定に基づき、1946年に中国政府が正式に独立を承認したことにより法的にも独立を達成することになる。このように、中国とソ連の両大国にはさまれながら、モンゴルはソ連にとって地政学的、戦略的重要性を持ち、中国との直接の対峙を避けるための便利な緩衝地帯であった。ロシア民族と漢民族の近代における出会いの歴史は、極めて摩擦の多いものであった。そのような両民族は、現代に至って共に革命国家を形成し、一致と団結をみる時期もあったが、競争と対立のほうははるかに多い。モンゴルはこうした複雑に絡まれた国際環境のなかで、20世紀にはソ連の衛星国家とも言われるほど、政治、経済の体制や政策から文明のあり方まですべての面でソ連の影響を強く受けてきたのである。

モンゴルを取り巻く冷戦とは、アメリカ・ソ連を中心とする東西ブロックの対立と、1960年代から始まる中国とソ連の対立を軸とした東アジアの冷戦と、いわば「二重の冷戦」であった。中国・ソ連のイデオロギー論争から始まった対立が中国の核開発などをめぐってさらに激化し、1960年を境に両者の破局は決定的となり、同じ社会主義国家同士が武装対峙に至った。これを受け、とくに1950年代後半のモンゴルに対する中ソ抗争のなかで、1961年、モンゴル・中国関係の対立が公然化し、モンゴルはソ連に一層近い立場をとりつづけ、モンゴル・ソ連の連携が強化され、とりわけソ連がモンゴルへ大量の軍事援助を提供し、モンゴルで軍拡が急速に進められた(Ts. バトバヤル 2002: 74-80)。そのため、モンゴルの人口全体に占める兵士の比例がたいへん高くなり、軍隊の地域社会に与える影響も非常に大きかった。

一方、歴史上、遊牧民のモンゴルは牧畜を生業としながら、戦争を1つの重要な生産手段としていた。農業地域の物資と労働力を略奪し、これによって遊牧社会における生産活動の不足を補う。また、遊牧社会内部から見ると、明確な境界線のない牧地の争奪や集団間の対立をおさめるには軍事力がとりわけ重要であった。遊牧社会は高速自在な移動と集団展開能力をもつ騎射戦士群とを擁する者として、遊牧軍事権力を

中心とする政治構造を創り出した。そこでは、「権力と物流、交流とダイナミズム、発明と科学は、軍事ぬきでは語れない」（杉山 1997: 84）という考えがあった。戦争と軍隊はモンゴルにとって独特な意味を持つものであった。

中ソ両大国には含まれるという国際環境からみても、遊牧民というエスニック的な側面からみても、モンゴルにとって軍隊は非常に重要であるにもかかわらず、文化人類学的にはこれまでほとんど考慮されてこなかった。軍隊の文化人類学的研究が少ないことはモンゴルに限らず、世界での状況もあまり変わらない。実用的意義が強い社会学的研究¹⁾と比べると、文化人類学的研究が意外と少ない。その理由としては次のいくつかが挙げられている。人類学による異文化の報告の価値が在外の軍隊にとっては限られていること、軍隊が重宝するのは外国についての政治学や外交関係の研究であること、調査が上司に認可されないかぎり研究対象である軍人や基地にアクセスすることは困難なこと、自国の軍隊調査はインタビューに応じてくれた人のプライバシーの問題、などがある（田中雅一 2004a: 2）。数少ない研究のなかでも、とくに本論文の主旨である軍隊と周辺地域社会との関わりを取り扱った研究について触れておきたい。田中雅一研究は米軍の人種政策とチャプレンを取り上げ、軍隊とアメリカ一般社会との関係を考察し、さらに、在日米軍のトランスナショナルな性格を検討することによって、軍隊研究は文化人類学の新たな可能性を示唆していることを指摘した（田中雅一 2004a; 2004b²⁾）。また、沖縄における米軍基地化に伴って表れた生活文化の変容の動的プロセスと社会構造の変化を扱った研究は、伝統が揺るがされるなかで存続してきた強制移転村の実態を考察した（山内 2006）。これらの研究はいずれも軍隊と地域社会との関係についての論考である。軍隊は特殊な社会集団であると同時に、「国民」から構成される。軍隊と一般社会が歴史的にどのような影響を相互に与えてきたのかを追求する必要がある。20世紀のモンゴルを考えるうえでも欠かすことのできないこの問題は、公的な文献資料より当事者の証言に基づいたアプローチのほうがより実態に近づけるであろう。というのも、軍隊は特別な社会団体であるが故に、その真相が明らかにされるには、一般の公的な政府側の報道や記事のみではまことに足りず、経験者の記憶を引き起こし、現地調査で得られる口述資料が貢献できる領域であると考えられるからである。

本論文では、1960～1980年代に焦点を当て、アプローチを行う。それはまさにこの「二重の冷戦」期に置かれているモンゴルの状態をもっとも明白に浮き彫りにしているからである。聞き取り調査は後に述べるようにひとりを除いて、すべて1960～1980年代当時の現役軍人を対象とした。また、モンゴル近代国軍の歴史的連続性を

考えて、革命期の1920年代からの大筋も提示する。本論文を通して分かるように、様々な要素が入り組んだ国際情勢のなかのモンゴルにとっては、「二重の冷戦」は国家としてのモンゴルを困難な立場に陥らせ、そのことが抑圧的な社会環境をもたらしたとも考えられる。後述の聞き取り調査とインターネットの記事にもあるように、リンチ、暴力、軍官僚の無責任、軍紀違反および兵士間の不正常な人間関係などは今日も少なからず見られている。これには時代の原因も考えられるが、歴史の遺産が現在まで継続させられていることは疑いない。したがって、20世紀に限らず、今後のモンゴルにとっても最大の課題は依然として中国とソ連・ロシア両大国の狭間に生きつづけることであり、それゆえに、20世紀にたどった道のりをかえりみることはこれからのモンゴルにも必要であろう。

2 問題の所在と先行研究

モンゴル人は12世紀の急激な寒冷化と人口増加のなかで大興安嶺の狩猟生活から西の草原へ進出し、遊牧を主とするようになって以降、同時に戦闘もまた1つの重要な生産手段としていた(白石2006: 94-112)。遊牧経済における再生産活動の安定化は、多くの余剰生産物の維持によって初めて可能となる。しかし、牧草地の拡大には一定の限界があり³⁾、技術革新による生産力の向上も一朝一夕に果たされるものではない。とすれば、多くの余剰生産物を獲得するもっとも迅速で有効な方法は戦闘を通しての掠奪である。野蛮・暴虐・破壊・非文明といった負のイメージをおしつけられたモンゴル軍の基本的な作戦方針は実際、無血開城であった。目的はオアシス諸都市を接収し、その経済的繁栄を、そのまま手に入れることにあった(白石2006: 104)。遊牧民は血縁集団の一員であり、また同時に共同的事業——とりわけ牧草地と家畜を防衛、確保する軍事共同機構——のメンバーでもある。遊牧民社会においては、血縁的な関係が軍事的な結合の基礎となり、有能な軍事的指導者の傘下でこそ彼らの安寧が保証される。このように、モンゴル人の遊牧活動は本来、軍事でもあり、遊牧社会はそれ自体が一種の軍事集団組織であった(杉山1997: 25-32)。

13世紀は「モンゴル時代」とも言われ、「ポストモンゴル時代」とはモンゴルが世界帝国から民族の分断へと徐々に変遷していった時代である。とくに17世紀以降、ユーラシアにおけるロシア帝国と清帝国という2つの大帝は、その狭間に位置するモンゴル世界に対して強力に働くようになった(杉山2008: 30-39)。しかし、ロシアと清朝に引き裂かれたモンゴル人地域は分断化、細分化されつつあったにもかかわらず

ず、モンゴル人の社会的組織が破壊されず、エスニックの特徴も保たれてきたといえよう。一方、周辺の国際情勢がモンゴル社会に大きな影響を及ぼすなかで、もっとも実質的に深刻な変化が訪れたのは、19世紀半ば以降大量の漢人移民のモンゴル地域への流れ込みによるものである。こうした歴史の流れのなかで、20世紀初頭、清帝国の崩壊を受けて、漢人移民の多かった内モンゴル地域は実現できなかったものの、外モンゴルは独立を宣言した。これを展開点とした近代モンゴル民族運動及び新興国の建設は、モンゴルの20世紀における最大の課題であった。この課題を解決する一つの重要な内実として、モンゴルは1つの独立国として軍隊の建設を進めたが、この軍隊建設の過程も20世紀における独立国たるモンゴル国家の建設と同様に、ソ連の影響を大きく受けることになる。

近代モンゴル軍建設においては、軍隊の武器装備等はもちろんのことであるが、兵士の素質や軍隊自身の気風も変容しつつあったことは明白である。とくに、軍隊の拡大が行われた1960～1980年代は、モンゴル軍隊の規模のみならず、質にもさまざまな著しい変化がもたらされた。社会主義近代化の過程で、モンゴル人民共和国は昔のように社会全体が軍事集団組織ではなくなったが、1960年代からの軍拡に伴い、軍隊は当時の最大で最も重要な社会集団となった。というのは、憲法の規定により、すべての成人男子が兵役に服す義務を負っているため、成人男子は現役兵士或いは退役軍人であり、ほぼ全員が軍隊の経験を持っているからである。本稿の目的は、上記の時期におけるこの最大の社会集団である軍隊の生活実態の解明を通して、世界で2番目に誕生した社会主義国家であるモンゴル人民共和国が経験した近代化をもう1つの視点から探ることにある。

モンゴルの社会主義的近代化について、早くも1970年代から行なわれた中見立夫の研究による新たな事実の発掘とその評価にかかわる視角は、モンゴル史研究の新たな時代の到来を予兆したといえよう⁴⁾。とくに1980年代以来、近代モンゴル認識におけるパラダイム転換の進展は、1つの時代潮流のはじまりであり、二木博史のモンゴル人民党に関する一連の論文はモンゴル国における「歴史の見直し」を先取りした研究であり、モンゴルの歴史研究に与えた影響も大きいと考えられる⁵⁾。また、モンゴルのバレストロイカにいち早く注目し、モンゴル・ソ連関係の再考などの問題を取り上げる研究が現れた(田中克彦1990;1992)。さらに、内モンゴル人とブリヤート人が外モンゴル独立に果たした役割を検討し、モンゴル民族解放運動を新史料新視角から捉えようとする試みも注目に値する(萩原1997a;1997b)。これらの研究のなかでは、モンゴルの近代社会史像再構成の試みが、「民衆からの」新たな歴史分析の蓄

積の結果として出されている点も読みとれるであろう。

一方、モンゴル国内では、民主化以降、モンゴルの歴史を「見直す」努力をしているものの、近い過去についての全面的に本質に触れた「見直し」は少ない。今、いかなる方法で近い過去についての社会歴史認識と社会史像を再検討すべきかという課題に直面していると言えよう。

本稿で取り扱う問題を例に挙げると、上述したように、軍隊は1960～1980年代におけるモンゴルの最大の社会集団であったと言われ、モンゴル人民軍の生活は社会主義時代におけるモンゴル国民生活を知る上で重要な手がかりとなる。しかし、後述のモンゴル国防庁科学院から刊行された『モンゴル軍事簡史』（МУБХЭШХ 1996）を含め、これまでの相関研究は1930年代の「粛清」が軍隊にもたらした損失については言及しているが、長く続いたツェデンバル政権（1953～1984年）の国防政策の偏りを歴史から抜き取り、外敵による緊張状態のみを強調したものが多く、一般の兵士たちがどのような生活をしてきたのかといった、人類学の立場で基層部隊を内部からみた研究はまとめられていない。当該時期の軍事や軍事史に係わる研究や概説書のなかから代表的なものをいくつか挙げてみよう。B. ダシツェレン、A. セミノフ編の『“モンゴル人民”号飛行中隊』（Дашцэрэн, Б. and Семенов, А. “Монгол ард” эскадриль. 1975）はモンゴル人民軍飛行中隊の発展史およびソ連軍との友誼を謳歌したものである。D. シャグダルほかの『辺境軍の50年』（Шагдар, Д. and П. Дагвадорж. Хилийн цэргийн 50 жил. 1983）はモンゴル人民革命党指導下の辺境軍の大きな発展を概観した。E. サイナー等監修の『モンゴル人民共和国の防衛軍』（Сайнаа, Э. and Туяа, О. БНМАУ-ын зэвсэгт хүчин. 1981）、そしてモンゴル人民共和国国防庁軍事史研究所編の『モンゴル軍の伝統と発展』（БНМАУБХЦТХ, Монголын цэргийн уламжлал хөгжил. 1991）などは1980年代までの近代モンゴル軍隊がソ連の援助を受けて成し遂げた発展の歴史の大筋をまとめたものである。民主化の波に押されて、1990年代後半からの研究には、ほんの少しだけではあるが、これまでと異なる視点で捉えようとする傾向が見られる。『モンゴル軍事簡史』（МУБХЭШХ 1996）は軍事文書館の資料を一部利用して、モンゴル軍隊の輝かしい歴史の歩みをたどりながら、兵士の栄養不足や体力低下、衛生条件の不良、兵士間の関係や将兵関係に異常が生じていたことなどに一言触れている（МУБХЭШХ 1996: 475）。Sh. パラマドルジの『20世紀のモンゴル軍隊』（Паламдорж, Ш. Хорьдугаар зууны Монгол цэрэг. 2001）は軍事法律の制定、軍隊官僚制度の構築と官僚の育成、武器装備の整備、軍事戦術の変化、軍隊の野外訓練や教育およびモンゴル軍の対外関係といった内容をまとめており、とくにチョイバルサン時

代の「粛清」が軍隊に蒙らせた損失、ソ連のモンゴル人民革命軍建設への援助およびモンゴル・ソ連の政府関係などを見直す必要があるというような問題提起をしたことにより、過去の研究から一歩踏み出したものであると評価できる。L. バトジャブ著『軍事法学の基本問題』（Багжав, Л. Цэргийн эрх зүйн үндсэн асуудал. 2003）のような、軍隊や軍事について法学の視点から研究する試みも現れている。しかし、ほとんどの研究は兵士の人数や軍隊の規模、そして士官階級などを統計的に示し、社会主義祖国を守る「不敗の」人民軍の功績、ソ連の援助およびソ連軍との友誼を讃美するものであり、あるいはモンゴル人民革命党史の枠を脱しえなかった概説書的な「歴史研究」であると言えよう。とりわけ、これらの著書の編著者や監修者の多くが上級軍官であるため、自らの経験した過去の軍生活にプライドを持ち、真の意味での「見直し」ができないことは理解に難くない。したがって、軍隊の基礎である「底辺」に焦点を当て、「語り直し」の視点からモンゴル人民軍の生活実態についての研究は、まったくの空白状態にある。

このような学問的状况のなかで、モンゴル学研究に秀でた日本においては、その複眼的な見方に基づく新たな方法で、モンゴルの近い過去を理解しようとする姿勢が現れつつある。つまり、モンゴルの20世紀を「歴史学と人類学の結合」という学際的方法でとらえる観点＝「語り直し」の研究がはじまっている。それには、まず『モンゴルの二十世紀——社会主義を生きた人びと証言』（小長谷 2004）と『モンゴル国における20世紀（2）——社会主義を闘った人びとの証言』（小長谷 2007）などが挙げられる。これらの研究は、実態的な社会変化に現れたモンゴルの「近代化」及びそれを率いる政治家たちの「闘争」を通してモンゴル近現代史の再構成を試みたものであり、20世紀のモンゴル社会を讀解する1つの重要な視点であると同時に、これからのモンゴル研究の新たな道を示したといえよう。「語り直し」は「民衆からの社会像」を描くには重要な方法であり、モンゴル学研究には有意義な経験を提示している。

しかし、歴史の見直しが行われている今日でも、モンゴル人民革命党にかかわる近い過去については、なお保留となっている部分がある。また、政治エリートや知識人の「死」については活発に議論されているのとは対照的に、無名の人々の「死」については多くの史実が知られていない。本稿の課題はまさに、基層軍隊生活を体験した当事者の語りによって、これらの地位も名もない一般人の受難についての歴史記録をつくるのが、たとえわずかでも大きな意義を有すると考えるところにある。

3 1960～1980年代におけるモンゴルの軍拡とその社会背景

本章では主としてモンゴル国で出版された、前述のモンゴル軍隊・軍事史関係の資料に基づき、モンゴル軍拡の概況を整理しておく。

3.1 モンゴル国軍の近代史の概況

近代モンゴル国軍発展の歴史はおおむね伝統的な騎兵、機械化騎兵、機械化部隊と専門技術を有する機械化部隊という歩みを経てきた。それは次のような3段階に分けられる。

第1段階：1921年から1950年代中期まで。つまり、人民義勇軍の誕生からモンゴル人民革命軍が確立され、最初の発展に入った段階である。この時期のモンゴル人民革命軍の基本構成は伝統的な騎兵であるが、同時に、空軍、大砲、装甲戦車、通信、化学、建築、自動車や物資補給などの組織化がはじまった。

1921年の春、人民義勇軍が成立し、同夏、これを常備軍として組織する決定が出された。また同年の秋、D. スフバートルの提案と指導によって、人材育成のために軍官学校が創設された。この学校は創設当初、上級士官の育成のみであったが、1923年から全軍総合学校として拡大され、下級士官も育成するようになった。これは1956年に閉鎖されるが、1964年に再開され、1968年から軍事総合学院となる。

1924年に制定された憲法第1章第3項第5条に、革命政権を守るため、人民革命軍を建設することが明記された。このときから、モンゴル人民革命軍と称するようになる。1926年から、モンゴル人民革命軍の中級以上の軍官はソ連の士官学校で3年間勉強するようになった。このようにして1920年代末頃から1930年代の末まで、人民革命軍の軍官が国内外の軍学校で教育を受け、なかには専門技術を有する人材も多く現れた。しかし、1930年代後半の「粛清」によって、上級軍官の大多数が迫害を受けた。

第2次世界大戦が勃発すると軍隊の増強が急がれ、人員を急速に増やし、ハルハ川戦争（ノモンハン事件）や終戦時の1945年の時点では約8万人であった（ラティモア1966: 185; 田中克彦2009: 206）。戦後の1945～1956年の間、国際情勢や経済復興のため、数回にわたって軍縮を行い、1956年には兵士が4,000人強まで減少した（МУВХЭШИХ1996: 387）。つまり、1945～1956年の間には軍隊の95%が削減されたのである。この軍縮には、ソ連の対外政策が大きな影響を与えたことも見逃してはい

けない。

1955年、モンゴル人民革命軍はモンゴル人民共和国人民軍と改称された。

第2段階：1950年代中期から1990年代初期の民主化まで。この時期には、モンゴル人民革命軍が伝統的な騎兵団から全面的な機械化近代部隊として建設された。すなわち、伝統的な騎兵から30余年間を経て、近代部隊への改革が一定の成果を収めたのである。1971年から、モンゴル人民アルミー（略称MAA）と称するようになった。本稿は主として、この第2段階を取り扱うものであり、またこの時期が近代モンゴル国軍建設のもっとも重要な段階でもあるが故に、当該段階を当時の国際情勢とりわけ中国・ソ連対立と関連付けながら、ソ連の援助を中心に、つぎの3.2で述べることにしたい。

第3段階：1990年代初期の民主化以降、新国際・新社会秩序におけるモンゴル国軍隊の時期、軍隊は大幅な改革を行ったが、モンゴル国のほかの領域と同様に、不安定な様相を呈している。

上述の各段階で義務兵の服役期間は多少異なっている。1920年代初期は3年間であったのが後に2年間となり、1935年から再び3年間となった。第2次世界大戦の影響で、1940年代初めには4～5年間であり、終戦後の1950年からまた3年間となる。これが1985年から再び2年間と変わり、同時に大学教育を受けた人は1年間の兵役を負うこととなった。1992年の新兵役法では義務服役期間を1年間と規定している。

3.2 中国・ソ連対立とモンゴル軍拡

近代モンゴル国軍発展の第2段階はモンゴル人民革命党の軍隊政策とその結果によって、さらに3つの時期に区分することができる。

1) 1956～1964年。モンゴル人民革命軍を全面的に機械化近代部隊に改革する最初の時期である。

2) 1964～1979年。軍拡が本格的にはじまり、機械化近代部隊を組織し、当時の比較的新しい武器、戦争技術を保有するようになった。

3) 1979～1990年。モンゴル人民アルミー発展の最盛期である。専門技術を身につけた機械化近代部隊が組織され、当時の戦争に対応する能力を備えた。

モンゴルの軍拡が行われたのは主として、上記の第2と第3の時期である。1960年代に入ってから、中国・ソ連のイデオロギー論争からはじまった両者の対立をもう1つの軸として、冷戦時代が変化しはじめる。すなわち、1956年の「スターリン批判」

をめぐる意見の不一致からはじまった中国・ソ連の対立は、中国の核開発などをめぐってさらに激化し、1960年を境に両者の破局は決定的となった。これを受け、1961年、モンゴル・中国関係の対立も表面化し、モンゴルはソ連に傾倒することになり、中国のモンゴルに対しての援助が中止され、国民の生活に大きな支障をもたらした。すれ違いが深まるにともない、同じ社会主義国家同士がいまや、不幸な軍事的対立関係に入り、国境でトラブルが絶え間なく発生するようになった。

中国・ソ連および中国・モンゴルの対立が深まるに連れ、モンゴル・ソ連の連携がさらに強化され、両者の間に一連の協定・条約が結ばれた。1963年に、ソ連援助の下でモンゴル南部国境の防衛を強化する議定書が、1965年には、モンゴル・ソ連経済文化協力協定がそれぞれ結ばれた。1966年1月、ソ連・モンゴル友好協力相互援助条約が締結され、両国は各面で協力・提携すること、双方の安全、独立を守るため軍事を含むすべての手段・方法を講じることで合致した。さらに、同年3月、ソ連軍のモンゴル駐留に関する協定が両国のあいだに結ばれ、翌1967年、モンゴル側の代表J.ルハグバスレンが協定に調印した。これを基に、ソ連がモンゴルへ大量の軍を送った。いわゆるソ連軍の第3回モンゴル進駐である（Цэдэвсүрэн 1981: 3）。かくして、モンゴルは以前にも増して中国に対するソ連防衛の前線となり、軍拡が本格化し、ソ連支持のもとで20余年間にわたり、軍拡を国策として兵力大増強を目指した。

1964年8月の決定により、戦後モンゴル最初の機械化歩兵専門旅団の建設がはじまり、同時に空軍（飛行隊）の建設も急いだ。軍隊の全面的な再建が行われ、前にも触れたように、同年、軍官養成の主要な機構である全軍総合学校が再開され、1968年、これが軍事総合学院となった。同1968年、人民軍事務部が昇格して国防庁となった（МУБХЭШХ 1996: 424-427）。

1970年代は中国・ソ連関係のもっとも緊張していた時期であり、両国が相互敵視しながら軍備・軍拡をしていたことが両国指導層の話に現れることも多くあった。ソ連のザハロフ元帥が対日勝利24周年記念論文のなかに、「関東軍粉砕の歴史的事実は、次のことをはっきりと納得できるように立証している。すなわち極東ソ連の国境およびモンゴル共和国の神聖と不可侵性を侵害する勝手な行動は、それがいずれの国から生ずるものであっても、不可避免的にみじめな失敗へと運命づけられているということである。わが祖国の極東国境を防衛するソビエト軍各部隊の戦力と戦闘即応体制がその鉄の証左である」（小山内 1973: 213）と言う。極東ソ連国境およびモンゴルに接している国は、中国以外にはない。

ソ連の軍備軍拡について、1971年、西欧筋の見るところでは、中国・ソ連国境に

配置されているソ連陸軍兵力は44個師団（うち2個師団はモンゴル）としている。兵員数で言えば、およそ130万を超えている。当時ソ連の総兵力は340万人といわれるが、その3分の1が対中国配置となっている（小山内1973:235）。

対立が深まるにつれ、中国・ソ連双方の相互非難はときには非常に露骨的であった。

1972年10月1日付、『人民日報』『紅旗』『解放軍報』の共同社説は、「ソ連の裏切者集団は、古株の帝国主義国よりも大きな欺瞞性をもっているのです、この危険性もより大きい」と同じ文句を用い、ソ連を非難している。

1981年8月21日付中国の『外事参考』（機密）第17期（内蒙古自治区人民政府外事弁公室）には次のような対ソ連非難が含まれている。

- ・ソ連の侵略拡張行動は、その社会帝国主義、覇権主義の真面目を充分暴露し、世界の多くの国と人民に看破されるようになっている。……戦争の危険は主にソ連の侵略拡張から発生しており、70年代以来ソ連は世界人民の主要な敵となっている（2-3頁）。
- ・ソ連は戦争の最も危険な震源地である（4頁）。
- ・ソ連は「社会主義」、「民族解放運動援助」、「第3世界天然盟友」の名目下に、侵略・略奪行為を行い、大きな欺瞞性を持っている。
- ・私たちは自ら進んでソ連を攻撃しない。私たちは平和な環境のなかで（社会主義—筆者）建設をする。しかし、もしもだれかが私たちを侵略するならば、私たちも恐れることはない。わが国は国土が広く、人口が多く、強い忍耐力を持ち、……最後の勝利は私たちに属す（19頁）。

というように非常に強烈な表現を用いている。

モンゴルと中国の関係を見るには、少し前へ遡る必要がある。1920年代まで、モンゴル人に対する中国商人（旅蒙商）の搾取は、歴史記憶としていつまでもモンゴル人の意識の根底に刻み込まれているのであろう。さらに、モンゴル人の心のなかには、常に中国人の統治支配と中国の膨大な人口に同化されるおそれが存在した（Ts.バトバヤル2002:24-25）。このような歴史的な絡みもあり、もとよりモンゴル人は中国人に対して好感を抱いていない。そのうえ、中国・ソ連対立を受けて生じたモンゴル・中国対立は当然ながら国民の感情にも影響をもたらし、一般のモンゴル人のロシア人と中国人に対する感情には、大きな差が見られる。1950年代はモンゴルと中国の関係が良好に推移した時期であり、中国政府はモンゴルに多額な資金援助、工場やインフラ建設の支援を提供した。1956年から1959年にかけて、中国労働者たちはモンゴルで多くの大規模なプロジェクトを建設し、彼らの数は家族も含めておよそ

17,000人にのぼり、ウランバートルに自分たちの学校や病院をもつほどであった(Ts. バトバヤル 2002: 70-72)。このように友好を保っていた時期に、援助のためにたくさんのロシア人と中国人がモンゴルに来ていたが、彼らに対して次のような異なる評価がある。「ロシア人……は大体3年の契約でここにきますが、その間に知っていることはみんな教えてください。そして彼らが帰るときには、われわれの手で仕事がやれるようになっていきます。中国人が援助にくると、大編隊でやってきて、仕事を全部自分たちでやって、帰ってしまうと、それっきりです」(ラティモア 1966: 281)⁶⁾。これは歴史的に持っている中国に対する感情を発露しているものでもあろうが、このように、政治家層にとどまらず、国民が中国に対する反感を抱いていたことから、当時のモンゴル・中国対立関係の一端が窺える。

中国・ソ連対立にともなうモンゴル周辺地域の国際関係が緊迫した時代には、モンゴルは全国民に有害武器防衛知識を普及する国民国防教育に取り組んだ。その普及率は1979年の時点では、91.2%に達した(Паламдорж, Ш 2001: 265)。これはいうまでもなく中国との戦争を予想したことに基づいている。

このような中国・ソ連、モンゴル・中国対立のなか、モンゴルはソ連との友好同盟相互援助関係をさらに強化し、モンゴルがソ連対中国戦略・軍事防衛システムの重要な一部となった。ソ連の援助を受け、軍拡はどんどんエスカレートしていくものであった。実際、1956年から軍隊の再建計画ははじまるが、1950年代末頃まで、軍隊の拡大は基本的に実施されなかった。その理由は何よりもまず国の経済、財政にあった。1960年代に入り、武器、技術、人材養成などを含んだソ連の全面援助の下で、軍拡が本格的にスタートを切ることとなった。

1964年9月に締結されたソ連のモンゴルに対する軍事援助協定によると、1966～1970年の間、毎年70万ルーブルに相当する軍用物資を無償で提供することとなっている。後に、援助の規模がさらに増し、1960～1980年代末にかけて、教導員の派遣、武器、軍事技術、軍事専用標識物の建設やその他の軍用物資を無償で提供する条約・協定を多く結んだ。軍備の結果、1985年の武器装備は1960年と比べると、その総合火力が9倍増加した(Намсрай 1985)。1980年代には、モンゴル常備軍1,000人当たりの戦車数は世界の基準より2～2.8倍高く、東北アジアでは第6位であった(БХЭШХ 2000: 75)。

そして、この軍拡の過程で兵力の数は、1960年の1万人足らずから、1970年代初期の3万人、1975年の4万余人と増えて行った。1979年、中国・ベトナム戦争の影響を受け、モンゴル・ソ連の間に軍事条約が秘密裏に結ばれ、モンゴルの軍隊を10

万人まで拡大する計画を立てた（北京軍区政治部聯絡部 1994: 11）。実際 10 万人に達したかどうかについては現在、統計的なデータが入手できていないため不明であるが、前にも触れたように、第 2 次世界大戦期にはモンゴル軍が 8 万人に達していたことに鑑みれば、軍拡が大規模に行われた時代においては 10 万人規模になっていたことも十分に考えられる。さらに、1980 年代のモンゴル軍隊の人数については、調査のなかにも言及しているように、最大 10 万人に達したと退役軍人が証言している。実際、これは、国民の間に反軍感情が広がるなかで、ソ連の政治・軍事介入によって進められた軍拡計画の継続であった。軍拡すればするほどソ連への依頼が強まり、まさにそれがソ連の支持で堅持されていくツェデンバル政権にとっては好ましい秩序となっていたかもしれない。

武器の提供とともに、これらの武器を操作する技術と人材の育成も必要になってくる。さらに、軍拡にともない、軍隊の各種の管理に携わる人材もより多く求められる。すなわち、軍隊の急速な新建設にともない、さまざまな専門技術を有する人材の育成を短期間で完成させることが一層急務となった。ソ連留学はこの問題を解決する 1 つの重要なルートであった。たとえば、1961～1965 年の間、463 人がソ連の軍事科学院に留学した（Паламдорж, Ш 2001: 49）が、1980 年になるとソ連留学人数は 727 人となり、1983 年には 1,031 人であった（МУБХЭШХ 1996: 439）。

軍拡の規模と速度を示すもう 1 つの指標は軍官の数であり、1985 年、オフィツェル（Ofitsuer, 中下級軍官の総称）の需要人数は 1960 年に比べると 7 倍に増加した（Паламдорж, Ш 2001: 112）。

また、モンゴル駐留ソ連軍の人数については、1987～1992 年の間に撤退したソ連軍の人数を見ると、軍人が 8 万 2,000 人であり、家族を含めて 10 万人強という（МУБХЭШХ 1996: 496）。

このモンゴルに駐留していたソ連軍はモンゴル軍との大規模な連合軍事演習を数回行った。1968 年の秋、モンゴル・ソ連の連合軍事演習がモンゴルのトゥブ・アイマグ（中央県）で行われた。参加した兵士数はそれぞれ 1 万人近く、自動車等は計 3,200 輻に達した。1973 年 5 月 13～23 日の間、国境を越えて侵入してきた敵を共同で殲滅するとの仮想の前提で、モンゴル・ソ連の連合軍事演習「ケレルン 73」が行われた。演習にはソ連の専門家 18 名が指揮官として当たっていた。モンゴル側からは計 8,000 人余りが参加した。ツェデンバルをはじめとするモンゴルの党、政府の指導者が演習を観覧した。今回の演習を通して、危険な状況に緊急対応する施設と能力が不足していること、迫撃砲の半分が準備できていない分隊もあること、下級士官や兵士

が消極的であることといった問題が浮かび上がった。これらの問題から軍隊の散漫状況、基層部隊の兵士と下級士官の不満や士気の低下が窺われる。

そして、1977年3月23～30日の間、ソ連の内バイカル軍部司令 P. A. ベリク (П. А. Белик) を指揮官としたモンゴル・ソ連連合軍事演習「ゴビ 77」が行われた。モンゴル・ソ連両軍から計 1 万 4,000 人が参加し、目標の達成期間を短縮するため、演習の期間中、両軍の間に社会主義競争を展開し、ソ連軍戦士に見習うという呼びかけのもとで、広場で友誼の集いをおこない、経験を交流する催しも行われた。さらに、1979年、中国・ベトナム戦争勃発などの国際政治・軍事情勢が極めて複雑な背景のもとで、南部国境附近で3月11日～17日のあいだ、連合軍事演習「ナイラムダル 79」を実施した。指揮官はソ連極東軍事総司令官 B. I. ペテロフ (В. И. Петров) である。両軍は指揮部から兵士に至るまでのレベルで人員を相互交換して共同行動を取った (Паламдорж, Ш 2001: 271-278)。

1979年5月、「国防をさらに強化する方策について」、「徴兵に適齢の若者が必ず兵役に服すシステムを作る」決定などが出され、軍拡がさらに進められた。同年、国防委員会が設置された。さらに、同1979年末、ソ連軍のアフガニスタン侵攻が中国・ソ連関係の緊張をピークに至らせた。これを受け、モンゴルの軍拡も一層強まった。1981年、「モンゴル人民共和国全社会の兵役義務について」などさらなる兵力強化を進める一連の兵役法が登場した。そして、党や政府機関の指導者層も普段の公務を一時中止し、8～10日間の集中軍事訓練を受け、野外訓練と射撃に参加し、軍官僚の肩書きを与えられ、有事の際には戦場に赴く準備をしていた (МУБХЭШХ 1996: 488)。

軍拡のもう1つの内容は青少年の軍事教育の強化である。1960年の規定に基づき、1961～1962学年度以降すべての学校教育に軍事教育の内容を取り入れ、学生に一定時間の軍事教育を施した。さらに、1980～1981学年度以降すべての大学と学院に軍事部を設立し、軍事教育の時間を増やして、大学生に500時間、専門学校と小、中、高等学校には140時間の軍事教育を実施するようになった。軍事愛国主義教育の講座やセミナーが開かれ、革命の旧跡を訪ねるなどの活動も数多く行われた。1984～1985学年度から、すべての大学生は11種類の軍事予備技術を学び、卒業前に男子学生は1ヶ月の集合訓練を施され、優秀者にはオフィツェルの肩書きが与えられた。女子学生は集合訓練に参加しないが、軍隊の看護婦として育てられる。このような学校教育システムは1994年をもって終結した (Паламдорж, Ш 2001: 264-268)。

4 モンゴル軍とソ連軍の連携

この節では、ソ連の軍事援助とモンゴル軍官の養成（モンゴルへ派遣されたソ連軍官とソ連で留学、勉強したモンゴル軍官の人数）を概観し、とくに軍隊の誓詞への分析を通して、モンゴル軍とソ連軍の密接な関係、前者に対する後者の与えた物資援助と精神面の影響を考えたい。

4.1 モンゴル軍隊建設に対するソ連の援助

20世紀のモンゴル軍隊はほとんどソ連軍のみと接触・交流してきた。両者の緊密な関係は、地理的位置のほかに同じ社会主義国家としての連帯感の上に築かれたものである。モンゴルにとって言えば、20世紀に独立を獲得し、この独立を守るため自らの軍隊を建設し、発展に向かう過程に、隣接するソ連・ロシアから多大な援助を得たのである。

早くも1911年の辛亥革命が勃発した際、モンゴルが独立を掲げて戦ったときから、モンゴル軍とソ連・ロシア軍との関係の基礎が築かれていた。1912年11月2日、首都フレー（現在のウランバートル）でモンゴル・ソ連の友好協定が結ばれ、そのなかにモンゴルの軍隊建設を援助する内容が含まれていた（Монгол Улсын Үндэсний Төв Архив. ф. А_234. Т1. ХН63）。これは両軍関係の歴史の重要な源泉になる。1920年代以後、モンゴルとソ連は社会主義の理論・観点のもとで、「共同の敵」と戦い、数回にわたって軍事行動をともし協力してきた。具体的な両軍の関係には、ソ連軍からモンゴル軍への武器、物資、技術の提供と教導員の派遣、戦時の相互の物資援助および共同軍事行動、ソ連軍のモンゴル駐留などが含まれる。

このように、早い時期より援助を受けていたが、1930年代以後援助が急増した。1933～1935年のあいだ、モンゴルの国防費用の44.8～80%はソ連の援助によるものであった（Гомбосүрэн 1998: 57）。モンゴルの財政困難で軍事費用が比較的少ないその時代には、軍隊は主にソ連の援助によって維持されていた。1934年11月、ソ連・モンゴル相互援助条約（口頭）が結ばれ、1935年からの5年間、毎年600万トゥグルグ（モンゴルの貨幣単位）の無償援助をモンゴル人民革命軍に供与することが口頭で約束された（Паламдорж, Ш 2001: 344）。

第2次世界大戦中、ソ連は極めて困難であった時期にもかかわらず、モンゴル軍への援助を中断することなく継続した。ソ連からの援助を大量に受ける一方でモンゴル

は戦時体制を敷いてソ連を援助し、モンゴル軍隊と国民はソ連赤軍へ物資を送った。一例を挙げると、1942年、資金集めのための大がかりな運動を展開すると、モンゴル国民からの援助物資を積んだ列車が赤軍のもとへ送られた。1943年1月、モンゴル国民の資金によって組織された「革命モンゴル」という名称の戦車隊がモンゴル代表からソ連赤軍に譲渡された（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988: 39-48）。また、共同軍事行動を行い、両軍がともに敵と戦った。1939年のハルハ川戦争（ノモンハン事件）では、ソ連軍とともに日本軍の撃退に成功した。1945年にはソ連とともに対日宣戦に加わった。このように互いに援助し、助け合い、共同行動していくなかで深い友情を築いた。

このような歴史的なつながりを持つ両軍の関係は、1960～1980年代に、国際情勢や地域情勢、とくにソ連・中国・モンゴル3カ国間の関係と大きく関わるなかで、さらに緊密となり、共同国防政策を取るようになった。モンゴル軍はこの20余年間もこれまでと同じように、ほとんどソ連の軍隊のみと接触し、交流していく。1990年代まで、一般武器に関しては、モンゴル軍がソ連軍とほぼ同じような武器・技術を所持し（Паламдорж, Ш 2001: 223）、社会主義理念の下で一致した計画・指導を有していた。さまざまな任務・役目を共同で果たすなかで苦楽を共にし、深い絆で結ばれた。この時期のモンゴルはソ連の衛星国家と言われ、その軍隊はソ連の極東安全防御システムの一部となり、いっそう強化された。したがって、ソ連軍がモンゴル軍に与えた影響がいかに全面的で大きなものであったかということが容易に理解できる。

1967年から大量のソ連軍がモンゴルに駐留するようになり、1970年には、モンゴル駐留のソ連軍をモンゴル全軍のなかの特種部隊として組織した。1980年代の中後期から、ソ連の国内情勢が変化し、ソ連が解体した。これは世界に大きなインパクトを与え、当然ながらモンゴル・ソ連関係にも大きな変化をきたした。1986年、ゴルバチョフがモンゴルからソ連軍を撤退させる意を表明した。そして、1987年1月、両国の協議が行われ、ソ連軍の撤退で一致すると、同年4月から撤退がはじまり、1992年に完全撤退した。約30年間の中国・ソ連対立は、モンゴルにソ連から多額の借款を得る機会を与えた。1990年代初頭になると、ソ連の対モンゴル軍事援助はほぼ全部停止したが、1972年から1990年まで約100億ルーブルの借款を得ており、実際この多額な借款は、モンゴルの社会経済の大きな変革と進歩の誘因となったという（小長谷 2007: 306）。

モンゴル軍は1990年代までの70年間、ソ連の物資援助を受けるほか、軍事科学、軍隊建設の理論と実践、経験、武器・技術などを全面的に勉強し、軍官を養成してき

た。ソ連軍官の派遣はモンゴル軍隊の建設に重要な役割を果たし、その影響は大きいと考えられる。1913年にロシアの上、中、下各級教導員計59名、翌年の1914年に22名がモンゴルに派遣された。1936年、ソ連からの教導員が205人まで増え、1939年のハルハ川戦争のときに1,135人となった。軍拡の時期にも、ソ連の参事官、顧問と技術者がモンゴル軍隊に少なからず来ていた。その数は1978年に179人、1982年初頭に252人であった（МУБХЭШХ 1996: 494）。軍隊の建設と兵士の管理、指導などの面においてソ連の軍官が大きな貢献をしていたことは明記すべきという（Соркин 1972: 90）。

ソ連軍官がモンゴルへ来て指導するほか、モンゴル軍官のソ連留学も盛んであった。ソ連留学から帰ってきた軍官がモンゴル軍隊の主要な指導職を占め、軍事訓練や軍事教育に主導的な役割を果たした。1921年の秋、初めてモンゴルからソ連イルクーツクの赤軍軍官コースに軍官を派遣し、留学させた。これはモンゴル軍官のソ連留学の開始であり、それ以降、多くのモンゴル軍官がソ連の軍事アカデミー、各地の軍事学校に留学した。1930年代を見てみると、1931年に100人近く、1932～1939年の間、444人の軍官がソ連の各種の軍事学校を卒業した（Гомбосүрэн 1998: 140）。1930年代後半に留学軍官人数が増加した背景には、「粛清」により多くの軍官が失脚したことがある。

第2次世界大戦中、1942年から、モンゴル人民革命軍の上級軍官のほぼ全員、そして一部の中級軍官がウランウーデにある士官コースに留学した。1940～1945年の間にソ連に留学した軍官は361人であった（Гомбосүрэн 1998: 151-152）。早い時期のみならず、後に国内で軍官および他の人材の養成が出来るようになったときでも、ソ連留学の人数は増えつづけ、とりわけ軍拡期に急増した。前述したように、1980年のソ連留学人数は727人であり、1983年は1,031人に上った。これはモンゴルの国内軍事学院で学んでいた軍官の人数とほぼ同じであり⁷⁾、1980年代初期には、モンゴル人民アルミーのオフィツェルの35.3%がソ連の軍事アカデミー、各種の軍事学校の卒業生であった。つまり、当時、中上級軍官の3分の1強がソ連留学の経歴を持っていた。軍官以外の技術人材もソ連留学していた。1980年代の統計によると、モンゴル軍の連隊、専門大隊、師団の指揮者及びより上級の軍官、エンジニア、これらの80%近くがソ連で軍事教育を受けていた（МУБХЭШХ 1996: 492-493）。このように、モンゴル軍とソ連軍は上層指導者から一般兵士のレベルまで交流を深めてきた。

1930年代半ばから、モンゴルの軍官は外国語を習うようになった。さらに、1936年から、ソ連軍の戦術、軍事指揮法を勉強するために、上級軍官には必ずロシア語を

習得する指示が出された。この時期にはまた、軍事部、将軍司令部、連隊、師団司令部の各機構にロシア語部が設けられ、軍官はそこでロシア語を勉強した（Гомбосүрэн 1983: 139）。ロシア語学習はモンゴル軍官教育体制の伝統として1990年代まで存続した。そして、ロシア語はモンゴル人民共和国の軍隊のみならず、国民全体が世界を認識し、世界と接触する1つの重要な架け橋になっていた。

モンゴル・ソ連軍隊のこのような深い友情と固い絆を記念して、1971年、ウランバートルの南に位置するザイサン・トルゴイ（Zaisang tolgoi）丘にソ連兵士の功績をたたえた記念碑が建てられた。丘の入り口には、「ソ連戦士の記憶は、空の太陽のように永遠であり、大地の燃える火のように神聖である」と記されている。頂上の広場の中心には伝統的なモンゴルの灯「トルガ（Tulga）」があり、トルガの内側はモンゴル、ソ連両人民の友好、相互援助をイメージしたモザイク壁画になっている（写真1）。モンゴル軍隊はこのようにソ連軍との真摯かつ永遠の友誼を謳歌されるなかで育ってきた。

ソ連の全面援助のもとで、1990年代初頭には、モンゴル人民アルミーは国際軍事理論、戦争手段などの面において、当時の複雑な国際・地域の政治・軍事情勢に対応できる部隊となった（МУБХЭШХ 1996: 419）。

1960～1980年代はツェデンバルが執政していた頃である。ツェデンバル政権の性格についていえば、それは終始ソ連との同盟に変わらぬ忠誠を保つものであった。ツェデンバルはソ連に対する忠誠を誠実に示すことでモンゴルのもっとも信頼できる指導者という評価を高めることができた（Ts. バトバヤル 2002: 86）。これはある意味においてモンゴルがもっと早い時期から取ってきた、心ならずもの政策の延長と深化である。モンゴル人にできるのは同盟者を選び、その同盟者の政策に順応することだけというのが、辛い、厳しい現実であった。軍隊に限らず、モンゴル政府にもソ連の専門家、顧問、相談役が少なからず招かれていた（ロッサビ、モリス 2007: 64-70）。しかし、モンゴル人民共和国はソ連の政策に追従こそしていたものの、モンゴル政府は常にモンゴル人の手にあった（Ts. バトバヤル 2002: 83-93）。したがって、『モンゴル国における20世紀（2）——社会主義を闘った人びとの証言』（国立民族学博物館調査報告71）のなかでも多く語られているように、ソ連に対して、ツェデンバルのようにすべてソ連を真似し、いかなることにもソ連の指示を仰ぐような姿勢を、必ずしも取る必要はなかったと思われる（小長谷 2007: 82-104; 182-201; 213-217）。

近代モンゴル軍隊の建設がソ連の多大な影響を受けたことについて、モンゴルの軍事史関係著書のなかにも次のような指摘がある。1950～1980年代末のあいだに行われ

た「軍隊の拡大には、……国家財政能力・生産能力への配慮が充分ではなかったこと、社会主義国家の援助に依頼過剰、国際主義・社会主義の軍事思想に左右されたこと」などの問題があった（Паламдорж, Ш 2001: 376）。

軍隊ではないが、党や政府の政治家間の「闘争」で用いられるさまざまな拷問方法はソ連から輸入してきたものであるという証言がある（小長谷 2007: 163-164）。これはモンゴル軍隊内のリンチ、暴力を考える上で参考になろう。

次にモンゴル軍とソ連軍の誓詞について考えてみたい。

4.2 両国の兵士誓詞の比較

1924年、モンゴル人民共和国の憲法が誕生した。1940年、1960年および1992年に憲法がそれぞれ改正されている。改正された各憲法には、公民の兵役に服す義務および軍人の祖国を守る役目が明記されている。憲法の規定に従って、兵士にはその忠誠心を表明する誓詞がある。モンゴル人民革命軍の戦士は1925年の建国記念日に初めて誓いを立てた。しかし、兵士の誓詞内容が定められたのは1941年の誓詞が最初である。次節では、モンゴルとソ連の軍隊誓詞の内容を比較してみたい。

4.2.1 ソ連（ロシア連邦）の兵士誓詞

各時代のソ連（ロシア連邦）の軍隊誓詞は次のようである。

① 1918年の兵士誓詞（赤軍）

Военная присяга 1918 года (Красная Армия)

1. Я, сын трудового народа, гражданин Советской Республики, принимаю на себя звание воина рабочей и крестьянской армии.
2. Пред лицом трудящихся классов России и всего мира я обязуюсь носить это звание с честью, добросовестно изучать военное дело и, как зеницу ока, охранять народное и военное имущество от порчи и расхищения.
3. Я обязуюсь строго и неуклонно соблюдать революционную дисциплину и беспрекословно выполнять все приказы командиров, поставленных властью Рабочего и Крестьянского Правительства.
4. Я обязуюсь воздерживаться сам и удерживать товарищей от всяких поступков, порочащих и унижающих достоинство гражданина Советской Республики, и все свои действия и мысли направлять к великой цели освобождения всех

трудящихся.

5. Я обязуюсь по первому зову Рабочего и Крестьянского Правительства выступить на защиту Советской Республики от всяких опасностей и покушений со стороны всех ее врагов, и в борьбе за Российскую Советскую Республику, за дело социализма и братство народов не щадить ни своих сил, ни самой жизни.
6. Если по злему умыслу отступлю от этого моего торжественного обещания, то да будет моим уделом всеобщее презрение и да покарает меня суровая рука революционного закона.

Председатель ЦИК Я. Свердлов

Секретарь ЦИК В. Аванесов

"25" апреля 1918 года

1. 労働人民の息子、ソ連の公民として私は、労働者・農民の軍隊の戦士になることを受け入れる。
2. ロシアと全世界のプロレタリアートの名義を以って、この名義を名誉と見なし、軍務に懸命に励み、人民と軍隊の財産を損ずることなく、これを眼のように大切に守ることを宣誓する。
3. 私は革命の規律を固く遵守し、労働者・農民の政府より下された軍官の命令を歪めずに実行することを宣誓する。
4. 私は自分自身と同志たちにソ連公民の名誉を損なう行動を決して犯させず、すべての勤労者を解放する偉大なる目標に、自らの役割と知恵をもって貢献することを宣誓する。
5. 私は、労働者・農民の政府の号令にしたがい、すべての敵の侵犯、危険や恨みからわがソビエトを守り、ソビエトおよび社会主義事業、人民の友誼のために、才能と生命を捧げることを誓う。
6. もし私がこの誓言に叛けば、皆に唾棄され、革命法規により制裁を受ける。

中央委員会委員長：Y. セベレデロヴ

中央委員会秘書長：B. アバネソヴ

1918年4月25日

② 1939～1947年の赤軍誓詞

Военная присяга Красной Армии (1939-47 гг)

Я, гражданин Союза Советских Социалистических Республик, вступая в ряды Рабоче-Крестьянской Красной Армии, принимаю присягу и торжественно клянусь быть честным, храбрым, дисциплинированным, бдительным бойцом, строго хранить военную и государственную тайну, беспрекословно выполнять все воинские уставы и приказы командиров, комиссаров и начальников.

Я клянусь добросовестно изучать военное дело, всемерно беречь военное и народное имущество и до последнего дыхания быть преданным своему народу, своей Советской Родине и Рабоче-Крестьянскому Правительству.

Я всегда готов по приказу Рабоче-Крестьянского Правительства выступить на защиту моей Родины — Союза Советских Социалистических Республик и, как воин Рабоче-Крестьянской Красной Армии, я клянусь защищать ее мужественно, умело, с достоинством и честью, не щадя своей крови и самой жизни для достижения полной победы над врагами.

Если же по злему умыслу я нарушу эту мою торжественную присягу, то пусть меня постигнет суровая кара советского закона, всеобщая ненависть и презрение трудящихся.

ソ連社会主義共和国の公民である私は、労働者・農民の赤軍に徴集され、忠実でかつ勇敢であり、紀律を遵守し、弛みなき精神を持つ戦士となり、国家と軍隊の秘密を固く守り、軍隊の上官、長官、政治委員の下した任務・命令を遂行することを礼節を持って誓う。

私は軍事技術を勤勉に学び、軍隊と人民の財産を全力で守り、最後の氣息を出し切るまで人民、わが祖国、労働者・農民の政府に忠実であることを宣誓する。

私は労働者・農民の政府の命令に従い、労働者・農民の赤軍の戦士として、命と鮮血を惜しまずに敵を全面的に打ち負かし、わが祖国なるソ連社会主義共和国を、勇敢にかつ力強く、誇り高く守ることを誓う。

もし私がこの誓言に叛けば、ソ連法律の厳しい制裁を受け、勤労者大衆に唾棄されることとなる。

③ソビエトアルミー誓詞 (1991 年前)

Военная присяга Советской Армии (до 1991 года)

Я, гражданин Союза Советских Социалистических Республик, вступая в ряды Вооруженных Сил, принимаю присягу и торжественно клянусь быть честным, храбрым, дисциплинированным воином, строго хранить военную и государственную тайну, беспрекословно выполнять все воинские уставы и приказы командиров и начальников.

Я клянусь добросовестно изучать военное дело, всемерно беречь военное и народное имущество и до последнего дыхания быть преданным своему Народу, своей Советской Родине и Советскому Правительству.

Я всегда готов по приказу Советского Правительства выступить на защиту моей Родины - Союза Советских Социалистических республик, и, как воин Вооруженных Сил, я клянусь защищать ее мужественно, умело, с достоинством и честью, не щадя своей крови и самой жизни для достижения полной победы над врагами.

Если же я нарушу эту мою торжественную присягу, то путь меня постигнет суровая кара советского закона, всеобщая ненависть и презрение трудящихся.

ソ連社会主義共和国の公民として私は、防衛軍の隊列に加わり、忠実で且つ勇敢であり、紀律を遵守する戦士となり、軍隊と国家の秘密を固く守り、軍隊の長官、上官、政治委員の下した任務・命令を遂行することを礼節を持って誓う。

私は軍事技術を懸命に勉強し、軍隊と人民の財産を全面的に愛し、守り、最後の氣息を出し切るまで人民、わが祖国ソ連とソ連政府に忠実であることを宣誓する。

私はソ連政府の命令にしたがい、戦士として、生命と最後の一滴の鮮血を惜しまずにわが祖国ソ連社会主義共和国を守り、敵を全面的に打ち砕くために、勇敢に力強く、名譽を損なうことなく戦うことを誓う。

もし私がこの誓言を破れば、ソ連法律の最も厳しい制裁を受け、勤労者大衆に永遠に唾棄されることとなる。

④ロシア連邦アルミー誓詞 (1993 年)

Военная присяга Российской армии (с 1993 года)

Я, (фамилия, имя, отчество), торжественно присягаю на верность своей Родине -

Российской Федерации.

Клянусь свято соблюдать ее Конституцию и законы, строго выполнять требования воинских уставов, приказы командиров и начальников.

Клянусь достойно выполнять воинский долг, мужественно защищать свободу, независимость и конституционный строй России, народ и Отечество.

Утверждена законом Российской Федерации “О воинской обязанности и военной службе” от 11 февраля 1993 г.

私（父の名、名、姓）は、ロシア連邦であるわが祖国に忠実であることを礼節を持って誓う。

憲法および法律を尊重し遵守し、軍の任務と軍隊の上官、長官が下した命令を忠実に実行することを宣誓する。

軍人の役目を誇り高く果たし、ロシアの自由、独立、憲法に基づいた秩序および祖国、人民を勇敢に守ることを宣誓する。

1993年2月11日ロシア連邦の法律「軍の任務と義務について」に明記された。

4.2.2 モンゴル兵士の誓詞

以下は、モンゴル兵士誓詞およびその日本語訳である。

① 1941年モンゴル人民革命軍誓詞（原文は写真2～5）

モンゴル人民共和国公民として私は、人民革命軍の誓詞を受け入れ、忠実かつ勇敢であり、紀律を遵守し、弛みなき精神を持つ戦士となり、国家と軍隊の秘密を固く守り、軍隊の紀律と規定、および長官・政治委員の下した任務・命令を無条件に遂行することを誓う。

私は軍事技術を懸命に勉強する。軍隊と国家の財産を眼のように全力で愛し、守り、最後の氣息と鮮血を出し切るまでわが人民、党と政府に忠実であることを宣誓する。

人民革命党および政府の決定と命令にしたがい、私はわが祖国モンゴル人民共和国を守るために、常時備えをし、モンゴル人民革命軍の戦士として祖国を守り、敵を打ち負かすために、勇敢でかつ力強く、身命を惜しまずに戦うことを固く誓う。

もし私がこれらの誓言に叛き、これを破れば、モンゴルの勤労者大衆に永遠に唾棄

され、革命法規による最も厳しい制裁を受けることにはかなる怨言もないことを保証して誓う。

サイン：

職：

姓：ホルロー

名：チョイバルサン

分隊名：

共戴 31 年 2 月 11 日

②モンゴル人民共和国防衛軍の兵団、分隊、機構に所属する職員、義務兵の誓詞(1977 年)
БНМАУ-ЫН ЗЭВСЭГТ ХҮЧНИЙ НЭГТГЭЛ,АНГИ,
БАЙГУУЛЛАГУУДАД АЖИЛЛАЖ БАЙГАА АЖИЛЧИН,
АЛБАН ХААГЧДЫН ТАНГАРАГ

Бүгд Найрамдах Монгол Ард Улсын Иргэн би тус улсын зэвсэгт хүчний нэгтгэл,анги,байгууллагуудад орж ажиллахдаа БНМАУ-ын үндсэн хуульд заасан иргэнийхээ үүргийг гүнзгий ухамсарлаж сонор сэрэмж,сахилга баттай байж, цэргийн болон улсын нууцыг нарийн чанд хадгалж,өөрийн эх орон, нам,засаг, ард түмэн, пролетарийн интернационализмд чин үнэнч байхаа батлан тангараглана.

Би төрийн хуулийн заалт,захирагч дарга нарын үүрэг,тушаалыг үг дуугүй үнэнч шударгаар биелүүлж, зэвсэгт хүчний алдар хүндийг ямагт хүндэтгэн өргөмжилж явахдаа батлан тангараглана.

Би социалист өмч, цэргийн зэвсэг,техникийг бүх аргаар хайрлан хамгаалж,мэдлэг боловсролоо байнга дээшлүүлэн эрхэлж байгаа ажил,мэргэжлээ бүрэн эзэмшсэн байхыг батлан тангараглана.

Хэрэв миний бие өргөсөн энэ ариун тангаргаа гажуудуулбал хамт олондоо жигшигдэж БНМАУ-ын хууль тогтоомжийн дагуу хатуу шийтгэл хүлээнэ.

БНМАУ-ын Ардын Их Хурлын Тэргүүлэгчдийн

1977-оны аравдугаар сарын 17-ны өдрийн

217дугаар зарлигаар батлав.

モンゴル人民共和国の公民として、私は当該国の防衛軍の兵団、分隊、機構に入り勤務する際、モンゴル人民共和国憲法に定められた公民の役目を深く理解し、弛みな

き精神を持ち、紀律を遵守し、軍隊と国の秘密を固守し、わが祖国、党、政府や人民、そしてプロレタリア国際主義に忠実であることを固く誓う。

私は国家の法律の規定、上官・長官の下した任務・命令に無条件に従い、忠実に実行し、軍隊の名誉尊厳をいついかなる時も銘記し尊重することを固く宣誓する。

私は社会主義の財産、軍隊の武器と技術を、全力で愛し守り、知識素養を常に高め、従事している仕事に全力をあげることを固く誓う。

もしも私が捧げたこの聖なる誓言に叛けば、大衆皆に唾棄され、モンゴル人民共和国の法律規定に基づき厳しい制裁を受ける。

モンゴル人民共和国人民大会議議長団

1977年10月17日第217号決定により可決

③ 1990年兵士誓詞

БНМАУ-ын Ерөнхийлөгчийн 1990-оны 9дүгээр сарын 18-ны өдрийн 1дүгээр зарлигаар батлав.

ЦЭРГИЙН ТАНГАРАГ

БНМАУ-ын Зэвсэгт хүчний дайчин би өвөг дээдсийнхээ ариун гал голомт, монгол улсынхаа халдашгүй дархан байдлыг амь бие үл хайрлан батлан хамгаалахаа эх орон, ард түмэн, төр засагдаа андгайлан тангараглая.

Би ард түмнийхээ үндэсний эв нэгдэл, монгол цэргийн шилдэг уламжлалаа эрхэмлэн хүндэтгэж, цэргийн эрдэмд шамдан боловсорч, улсын нууцыг чандлан хадгалж, төрийн хууль, цэргийн дүрмээ хатуу сахин биелүүлэхээ тангараглая.

Ардын цэрэг Би энэ тангарагтаа үнэнч явна. Хэрэв няцваас төрийн хуулийн цээрлэл хүлээнэ.

モンゴル人民共和国防衛軍の戦士としての私は、わが先祖の発祥地、わがモンゴル国の不可侵な聖なる状態を、身命を惜しまずに守ることを、祖国、人民と政府に誓う。

私は人民の民族団結とモンゴル軍の優秀な伝統を尊重し、軍事技術を懸命に勉強し、国家の秘密を固く守り、国の法律と軍の紀律を厳しく遵守することを誓う。

人民の兵士として私はこの誓いに忠実に従う。もしこれを破れば国の法律の制裁を受ける。

④ 1993 年兵士誓詞

ЦЭРГИЙН ТАНГАРАГ

Монгол Улсын Иргэний Цэргийн Үүргийн болон Цэргийн Албан

Хаагчийн Эрх Зүйн Байдлын Тухай хууль Нэгдүгээр Бүлэг

Нийтлэг үндэслэл дугаар зүйл. Цэргийн тангараг

1. Монгол Улсын иргэний цэргийн жинхэнэ албанд орохдоо:

“Монгол Улсын иргэн би Монгол Улсын Үндсэн хуулиар хүлээсэн иргэний цэргийн үүргээ үнэнчээр биелүүлж, өвөг дээдсийнхээ ариун гал голомт болон Монгол Улсынхаа халдашгүй дархан байдлыг амь бие үл хайрлан батлан хамгаалахаа эх орон, төр, ард түмэндээ андгайлан тангараглая.

Би ард түмэнийхээ үндэсний эв нэгдэл, Монгол цэргийн шилдэг уламжлалаа эрхэмлэн хүндэтгэж, цэргийн эрдэмд шамдан боловсорч, улсын нууцыг найдвартай хадгалж, Монгол Улсын хууль, цэргийн дүрмийг чанд сахин биелүүлэхээ батлан тангараглая.

Эх ороноо батлан хамгаалагч дайчин Би өргөсөн тангаргаасаа няцваас төрийн хууль ёсны цээрлэл хүлээнэ” гэж цэргийн тангараг өргөнө.

2. Цэргийн тангараг өргөх журмыг Монгол Улсын Ерөнхийлөгч тогтооно.

/Энэ зүйлийг 1993-оны 10 дугаар сарын 21-ний өдрийн хуулиар өөрчлөн найруулсан/

モンゴル国民の兵役義務と現役軍人の法的地位法第一章総論第5項

1. モンゴル国民が義務兵役に服すには、

「モンゴル国民として私は、モンゴル国憲法に基づいた国民の兵役義務を忠実に果たし、先祖の神聖な発祥地であるモンゴル国の聖なる国土を、身命を惜しまずに守ることを、わが祖国、政府と人民に宣誓する。

私は人民の民族団結、モンゴル軍の優秀な伝統を尊敬し、軍事技術を懸命に勉強し、国家の秘密を固守し、モンゴル国の法律と軍の紀律を遵守し実行することを固く誓う。

祖国を固く守る戦士として私は、自分が奉じた誓言に背くことあらば、国の法律による制裁を受ける」という兵士の誓いを立てる。

2. モンゴル国大統領は兵士の誓いを立てる規定を定める（この項は1993年10月21日の法律によって改定された）。

4.2.3 モンゴル・ソ連兵士誓詞の比較

① まず、1990年以前のモンゴルにおける各年代の軍隊誓詞には、表現に多少の違いは見られるものの、基本的には政治制度のすべてにおける状況と同じように、ソ連の誓詞の影響を強く受け、ほとんどソ連の精神、主旨、内容と表現をそのまま模倣したことが明らかである。

② 次に、各時代のモンゴル兵士誓詞の内容からその当時の国際情勢が読み取れる。1977年の誓詞は1941年と比較すれば、2つの特徴があると思われる。第1に、1977年の誓詞は適用範囲がより広い。1970年代は中国・ソ連戦争を予想した書物も出されていたほど、中国・ソ連対立がピークを迎える時代であったため、1977年の誓詞の適用範囲は義務兵に限らず、軍隊にかかわる仕事に携わるすべての関係者が誓詞にしたがい、誓いを立てるように求められている。中国・ソ連関係の緊張が高まるなか、戦争が勃発する可能性もより高まり、「公民の役目を深く理解する」「いついかなる時も」というような極めて警戒を強める言葉遣いが用いられ、兵士に対する要求もより厳しくなっていることがこの誓言のすべてから窺える。2つ目の特徴は、モンゴルとソ連との関係がさらに緊密になっていることが兵士の誓詞に反映されている点である。「プロレタリア国際主義」というのは明らかにモンゴル・ソ連の一枚岩の友好同盟相互援助関係と、モンゴル・中国さらに中国・ソ連の対立・敵対関係を強く意識した表現であると考えられる。

各時期の誓詞内容はその時代の憲法における兵役についての規定とも関連しており、これらは共に国際・地域情勢に影響されている。1940年憲法第10章第103項では「兵役に服すことは立法で定められており、モンゴル人民革命軍の兵役に服すことは、モンゴル人民共和国国民の崇高な義務である」と規定されている。1960年の憲法第8章第89項第8条では、「社会主義祖国を社会主義の敵から守り、モンゴル人民共和国人民軍の兵役に服すことは、モンゴル人民共和国国民の崇高な義務である」と規定された。これは1940年の誓詞と比べると、反社会主義勢力が存在しているという前提下での表現になる。1940年は、社会主義と資本主義（帝国主義）の対立というより、ファシズムと反ファシズムの対立する戦争時代であった。国家制度上の社会主義と、それを敵対視する資本主義（帝国主義）の対立はそれほど差し迫ってはいなかった。しかし、1960年は中国・ソ連関係の悪化に伴いモンゴル・中国関係も変化しはじめた年代である。中国・ソ連のイデオロギー上の不一致、すなわち「ソ連の修正主義」、「中国の教条主義」という相互の理論上のすれ違いから軍事対峙にまで発展しはじめていた。実のところ、第2次世界大戦が終わった後、1950年代の一時期は

中国・ソ連関係の蜜月時代であり、モンゴルは両社会主義国と密接なつながりを持ち、双方から援助を受け、「赤色保険箱」⁸⁾とさえいわれるほどであった。ところが、1960年代初頭から地域情勢が一変し、中国・ソ連、モンゴル・中国の関係が悪化したため、憲法とそのほかの関連法律のなかの兵役についての規定と表現も異なってきた。兵士誓詞の表現は、中国・ソ連対立の深刻化を伝えている。これとは対照的に、1992年のモンゴル国憲法第2章「人権・自由」第17項第1条4には「祖国を守り、法律に従って兵役に服す」とだけ規定されており、特定の国に向けたような表現は一切用いられていないのである。

③ そして、1940年から1993年のモンゴルの兵士誓詞では、社会主義的革命的な色彩から民族アイデンティティおよび民主的なものへと変化してきた。社会主義時代の誓詞には「最後の氣息と鮮血を出し切るまでわが党と政府に忠実であること」、「長官の下した任務・命令を無条件に遂行する」、「労働者大衆に永遠に唾棄されることにはいかなる怨言もないことを誓う」などのいかにも社会主義的革命的な表現が盛り込まれている。まさに、このような誓詞が軍隊内部の無法状態を生み出す重要な一因であると、退役軍人は言う。長官の下した命令がいかなるものであろうか、これに無条件にしたがわなければ誓いを破ることとなり、すなわち労働者大衆に永遠に唾棄されることとなる。言い換えれば、自ら立てた誓いに叛かないためには、長官、上官の命令がどのようなものであろうか、たとえこれが法律に違反するものであろうか、これを無条件に忠実に実行せねばならない。民主化、自由化の風が吹きはじめた1990年の誓詞には「モンゴル人民共和国」、「人民軍」という表現がまだ使われているものの、社会主義時代にタブーとされていたモンゴル民族のアイデンティティ、民族の先祖といったエスニック的、ナショナリズム的な内容が書き込まれていることは、1つの非常に大きな進歩である。

④ 最後に、1990年前のモンゴル兵士誓詞の表現がソ連よりも革命的、社会主義的色彩が濃厚であることを指摘しておきたい。「長官の下した任務・命令を無条件に遂行する」、「モンゴルの労働者大衆に永遠に唾棄され、革命法規のもっとも厳しい制裁を受けることにはいかなる怨言もないことを保証して誓う」、わが「党に忠実であること」などの極端に革命的な表現（下線を引いている箇所）はソ連の誓詞には使われていない。これは恐らく、当時のモンゴル人民共和国の状況によるものである。つまり、同盟者に対する忠誠心の表明になろう。しかし、モンゴルの1990年の誓詞がソ連の1991年の誓詞より民主的であることも看過してはならない。この時期はソ連（ソ連解体は1991年12月26日）もモンゴルもまだ社会主義体制であるが、モンゴル

の兵士誓詞は民族の自尊心、アイデンティティを強調した上に、ソ連誓詞でまだ使われていた「軍隊の長官、上官、政治委員の下した任務・命令を実施する」、「最後の氣息を出し切るまで」、「労働者大衆に永遠に唾棄される」などの表現を避けている。このような違いは、モンゴルが社会主義のソ連模倣の枠に長期にわたって縛られ、いざそれを破ろうとする時には、より徹底的な行動に出ることの反映であろうと考えられる。

5 軍隊生活の実態——当事者の証言

モンゴルに対するソ連のはたらきかけが強まるにつれ、ソ連とモンゴルという2つの社会に相当な違いがあるにもかかわらず、「ソ連を模倣する」方針の下、ほとんどの側面でソ連の指示を受けるという気風がますます広がっていった。この時期のモンゴルの指導者層には、強大な隣国の支配から脱することを考えた人も一部いたが主流にはなりえず、ソ連が推進する政策や計画はほぼ例外なくモンゴルに導入された。そこで、モンゴル人の独自性が失われ、ソ連から政治・軍事体制のみならず人々のモラル、品行など道徳観念までの多くのものが持ちこまれた。

軍拡政策の推進に伴って、まずソ連の指示による軍隊再編を実施し、いわゆる近代化部隊として多数の連隊、兵団、特別作戦部隊、国境守備隊のような様々な軍人集団がつくられ各地に配置された。すでに触れたように、当時、モンゴル人民共和国の成年男子は皆、法律の規定により兵役に服する義務を強制され、2～3年間の軍営生活を送っていた⁹⁾。しかし、部隊建設そのものの過程に深刻な問題が生じ、多くの第1線部隊においては飢寒状態、上下関係の悪化及び官僚主義的腐敗行為が一般化し、制度の不備に伴う無法状態下で、法に抵触するリンチや暴力、それに強盗などが多発していた。将兵の道徳的素養はきわめて低下し、軍紀の崩壊状態を生みだした。

当初、社会主義祖国のためにと、軍旗の下に跪き誓いを立て入隊してきた純朴な若者たちは、絶望の淵に陥り、自殺者も現れていた。社会主義時代のモンゴルでは2種類の監獄があると伝わってきた。1つは「黒い監獄（ふつうの監獄のこと）」といい、もう1つは「赤い監獄（軍隊を指す）」という。赤いというのは社会主義モンゴル人民共和国を意味し、そして当時のモンゴル軍の部隊は監獄に等しいということになる。兵士たちが、まるで囚人のように暮らしていることから、モンゴル人民共和国の軍隊は「赤い監獄」と呼ばれた、と当事者が語っている。

悪習に染まったモンゴル軍による犯罪率が年々増加しつつあった。そして、軍の無

法的影響が地域社会にも及び、軍犯罪と連動した社会的犯罪事件も増加した。これは、あきらかに軍風気の社会的浸透をものがたっている。当時の軍営部隊は無法的思想が生まれる1つの温床になっていた。したがって、近代モンゴルの社会的気風やモラルの変容過程を軍と結びつけて考えてみる必要があると思われる。

軍拡の過程において基層部隊で発生した問題について、МУБХЭШХ (1996: 475)には次のような言及がある。「基層部隊特に建築兵には、食事の悪さ、住居の寒さ、衛生状況の不良、医療条件の不足といった原因から兵士が痩せる、病気にかかるといったことが起きていた」ため、1978年と1979年の2回にわたって、このような状況に対応する措置についての決定が出された。しかし、これらの決定が実施されたか否か、具体的にどこまで実施されたかについては、まったく触れられていない。それにしても、この記述から、軍隊の基層部隊が深刻な状態に陥っていたことは間違いないようである。

物資的な悪条件のほかに、兵士同士や兵士と士官間の相互関係にも異常な現象が起こった。そのため、国防庁は1979年と1983年の2回に渡って「兵士関係の規律に違反する現象との戦いを強化する」という規定を出した。1979年以後の5年間に軍事裁判所で裁判を受けた者の内、兵士間関係の規定に違反した者が平均で10%を占めたという。このような状況に基づき、新兵を一定期間中、単独で訓練させることの廃止、同一出身地の兵士を1つの分隊、小隊に編成する、軍隊駐屯地域の人にはなるべく地元で兵役に服する、紀律大隊 (Sahilgajuulah batlion, つまり犯罪兵士の収容所) の設立というような措置を講じたが、あまり効果を挙げなかった (МУБХЭШХ 1996: 475-478)。筆者の現地調査で分かったように、これらの規定はまさに当時の基層部隊で起きていたさまざまな不法や異常な状態に応じて考案されたものであり、またちょうどこの頃 (1982年) に、紀律大隊が創られた。

しかし、1960～1990年代は、モンゴル軍史にとっては重要な時期であり、軍隊建設が「史上最高を誇る成績を上げた」と誇り高く述べられている (Паламдорж, III 2001: 149)。とくに1970～1980年代には、軍隊が最盛期に達し、戦闘力が高まり、兵士が愛国主義の情熱と固い意志を有し忍耐強く育てられたという (МУБХЭШХ 1996: 488)。まさにこの強い忍耐力というのは、リンチやいじめなどの不法な待遇に我慢する内容も含まれているのであろう。

一般的に、あらゆる種類の人々の人生経験が、生の資料として研究に使われるようになれば、その研究に新しい方向性が与えられる。軍隊は特別な社会団体であるが故に、その真相が明らかにされるには、公的な政府側の報道、記事のみでは事足りない。

経験者の記憶を引き起こし、現地調査で得られる口述資料が特に重要となってくる領域である。そこで、聞き取り調査で記録した軍隊生活経験者の証言、すなわち、部隊の底辺からの新しい証拠によって、1960～1980年代の軍隊生活の実態を内部からみてみよう。

つぎの記述は筆者が本稿のテーマを取り扱うようになった1つのきっかけであり、中国側の資料に記載されているモンゴル逃亡兵士の数多くの越境事件の1つである（呼倫貝爾盟公安処边防局1991；石広義1993）。1969年11月25日、モンゴルのケレルン歩哨3班兵士エネビシ（Enbishi, 依努必喜）は銃を持ち、国境を越え中国側に入ってきて亡命を求め、中国で働くことを強く希望した。本人の願望によって中国政府は河南省新郷市の染織工場に配置した（石広義1993: 203）。この記載を確かめるため、筆者は2009年2月、中国河南省新郷市染織工場を訪れた。しかし、この染織工場は20数年前にすでに閉鎖され、今は工場の古い宿舎だけが残っている。そこを尋ねて歩いたが、情報がなかなか得られず失望していたところ、人事関係の仕事に携わっていたという古老に出会った。そこから、このエネビシについての消息を少し得ることができた。老人の話によると、この人はモンゴル国の人であり、1970年前後に来たが、ここではミシ（Mishi, 米西。エネビシのビシの発音に近いためだと思われる）という名前を使っており、2年ほど働いた後北京に呼び出された。その後は送還されたと聞いた。彼の特殊な身分のため、身上調書は残っていないという。期待していた情報は得られなかったが、少なくともこのような兵士、このような出来事が実在していたことは確かめられた。

モンゴル国での調査は2007年7月25～26日、2008年8月24日～9月3日と2009年1月16日～24日の3回行い、計25名の退役軍人に話を聞くことができた。調査の対象者には、特にこちらから訪ねて行った人（多くは元軍官僚）と市場の物売りやタクシー運転手など町で出会った人（ほとんど普通の兵士）とがある。便宜上、前者と後者は2つのグループに分けて、それぞれのインフォーマントを大文字と小文字で表記する。

5.1 元軍官僚等

軍隊駐屯地の調査を行なうため、2008年8月26日トゥンヘル（Tünghel, Tüngheとも言う）へ出発した。トゥンヘルはセレンゲ・アイマグの小さな集落であり、ケンティー山脈に位置し、ウランバートルから北へ約130キロ離れた所である。ここは森林の多いところであり、8月末にはかなり冷え込んでいたが、緑はまだ残っていた。

トゥンヘルには1990年まで、軍隊の規定に違反した犯罪兵を収容する紀律大隊(072部隊)がおかれていた。現在は310分隊の1支隊として残っている。しかし、私たちが訪れたとき、だれひとりいなかった。建物はすべて鍵がかけられているが、窓にはほとんどガラスが張られていない。パン製造所や給湯所など3つの建物には310分隊の標識が付けられているが、その他の建物の多くは072部隊の標示のままである。おそらく1990年に部隊が撤収したあと、名義上は1支隊として存続しているものの、実際には運営されていないという印象を受けた(写真6～19)。兵士寮の入り口の両側に建てられたスローガンは内容を見ると分かるように明らかに民主化以降のものであるが、かなり剥がれ落ちている。

トゥンヘルで応接してくれたネルグイ氏によると、1998年頃ここには30人程度の兵士がいた。現在はひとりのオフィツェルがいるが、兵士はいない。しかし、オフィツェルは出張のため、今日はいない。軍隊の中の犯罪者を収容する施設は、国内でこだけであったという。

Aさん

まず、トゥンヘルにおける元犯罪兵収容所の旧跡を尋ねた後、この軍隊の図書室で23、24年間勤めていた60代の婦人Aさんを訪れた。彼女は語る。

ここは元来072部隊であったが、紀律大隊240部隊が移転してきたことにより、在来の兵士1分隊が守衛兵として残されると、ほかは皆ウランバートルへ移った。072部隊は軍隊の燃料用の木材を伐採する部隊であり、だいたい1955年か56年に設立された。自分が在職していたときの072の長官はナムスライ(Namsrai)で、次に来たのがナムジル(Namjil)少佐、その次は同じく少佐のサンボウ(Sambo)であった。紀律大隊240部隊がここに移って来るとその上官にタングド(Tanggud)が当たっていた。タングドの次はアイルメド(Ayurmet)が就任した。240部隊には500～600名の兵士が配属され、3つのオロト(Orot)¹⁰⁾があった。240部隊は先の072部隊のように、木材を伐採し、汽車に積み込む仕事をしてきた。犯罪兵のここにおける服役期間は様々であった。ここに来る原因は主に逃亡、リンチ、暴力などである。ここは軍隊の監獄であり、民間からの犯罪人は来ない。犯罪兵は普通の民間の監獄に送れないため、ここに収容される。ここにはリンチ、暴力は存在しなかった。軍隊の規定に違反した全軍すべての犯罪兵はここに収容される。

犯罪兵と守衛兵との間にトラブルが起こっていた。犯罪兵は400～500名くらいであった。軍事裁判所の裁判を経て、ここに来る。ハラシヨロン(Har shorong)¹¹⁾と比べれば、ここは普通の軍人のように生活して、仕事をしていた。食事は普通の軍隊と同じである。犯罪兵は朝山に出て夕方遅く戻ってくる。昼食は食堂の人が運んでいく。犯罪兵は大変疲れていたようであった。伐採作業中事故死なども発生していた。死亡が発生した場合、規定に従ってサインをしてそれで終わる。これも普通の軍隊と同様である。あそこのピンク色

の2つの建物はイスカラド (Isklad)¹²⁾ である。長い建物は072部隊兵士の寮であったが、240部隊が移って来たあと、犯罪兵の寮となった。体の弱い兵士には比較的軽い仕事を与える。飢餓はなかった。普通の軍隊はどこでも同じように、兵士が飢えに堪えかねて、イスカラドから食べ物を盗むということがあったが、ここではそんなことは発生しなかった。ズーンバヤン (Zuunbayan)¹³⁾ やトゥブ・アイマグ、セルゲレン (Sergeleng)¹⁴⁾ などでは倉庫からの盗難が起っていたそうである。紀律大隊では哨兵の見張りが厳しいため、犯人の逃亡はほとんどできない。犯罪兵への教育なども行われていた。木材伐採のほかに、毎日2時間の学習があり、法律などを勉強していた。

Bさん

次に、この副長官で大尉であったBさん(60代前半)を尋ねた。

1982年、240部隊はウランバートル近くのアムガラン (Amgalang) の建築部隊第2分隊のなかに設立された。創設の月日は忘れた。人民大会議議長団の決議によって創設された。設立の当初から犯罪者を収容するところであった。後に、この第2分隊から独立してできた紀律大隊に、もとの建築第2分隊の軍官が紀律大隊の下級士官として来任した。1年後の1983年、240部隊がドルノゴビ・アイマグのダランジリガラン (Dalan jargalang) に移った。これは、武器を保存する秘密の場所、つまり武器倉庫を造るためであった。倉庫は石で造っていた。ダランジリガランはハラ・アイラグ (Har' airag, ドルノゴビ・アイマグ西北の町) の手前にあり、この施設は現在も残っている。1985年の秋、よく記憶していないが、何かの70周年記念を迎えるため、7人を残してほか200人近くを釈放した。この7人は繰り返して罪を犯した重犯者たちであった。重犯人であっても紀律大隊で過ごす期間は最長2年間である。1986年、この紀律大隊がまだダランジリガランにあったとき、私は少尉として来た。当時の犯罪兵の規模は200名くらいであった。紀律大隊が設立された目的は、軍隊で刑事犯罪を犯した者、たとえば暴行、逃亡、窃盗、リンチ等の罪に問われ、軍事裁判を経た罪人を専門に収容するためであった。普通の監獄は悪習に染まった人ばかりであり、犯罪兵は普通の監獄に行かせれば、また悪習に染められさらに悪くなるため、専門の収容所を造った。ロシアにはこのような機構があるため、それを真似して創った。この分隊の名前はトルゴルフ・パトリヨン (Torguuluh batlion, 処罰大隊) とも言うが、正式な名称は紀律大隊240部隊である。このような人たちと一緒に仕事することは大変である。ここは普通の監獄のようである。犯罪兵を見張る軍隊である守衛兵は普通の軍人であり、240部隊に所属している。したがって、240部隊は普通の兵士と犯罪兵から成っている。元072部隊から2つのオロト計140名程度の兵士が見張りのためここに残った。すなわち、2つのオロトの兵士が犯罪兵の監視に当たっていた。犯罪兵も2つのオロトに分けられており、紀律を与えるオロトという。守衛兵は1つのオロトが70名であり、2つのオロトで140名である。犯罪兵の数は増えつつあったが、一週間に平均2~3人が増え、最多の時期(1987年まで)には340名前後であった。義務兵役期間が3年間であった時期に、多くの人が徴兵されていたため犯罪兵の人数ももっとも多かった。犯罪兵の服役期間は6箇月から2年間で、辺境軍を含むすべての犯罪兵がここに収容される。紀律大隊がダランジリガランに約3年間置かれた後、1986年11月にここトゥンヘルに移ってきたときに、100人程度の犯罪兵がいた。このとき、240部隊が072部隊と改称された。紀律大隊の初代長官はタングド

(Tanggud) 氏であり、後任にはアビルメド (Ayurmet) 氏がついた。

トゥンヘルでの犯罪兵の仕事は樹木の伐採である。ここは森林地帯になるため、軍隊の燃料用の木材を準備していた。仕事は鋸を用いての完全手作業である。毎日決まった木材伐採の作業ノルマが与えられ、必ずその日に完遂しなければならない。このノルマというのは、毎日2人で24立方メートルの木材を切り倒し、それをさらに薪木にすることである。2人で伐採し、処理した薪木は2台のトラックを満載にする。決められたノルマを達成できなければ休めない。達成した人は休める。これは大変な重労働である。犯罪兵が終始守衛兵の監視下で働く。守衛兵は実弾の入った銃を持って監視に当たる。

今は072部隊が撤退し、軍隊による木材伐採は完全に行われなくなったが、ここが森林資源の豊かな土地であることから、民間企業による木材の伐採は現在も行われている。その屑が山積みになっている。語りは続く。

犯罪兵の服装は新しいものではなく、退役軍人が残した古着を使う。肩章はない。冬は棉のコートが提供される。

犯罪兵の逃亡は毎日のように起こっていた。しかし、逃亡兵を銃殺することはしなかった。逃亡兵に対して武器を使ったことはなかった。逃亡兵を捕える仕事は守衛兵が実施する。守衛兵の上官が責任を持って、逃亡兵を追跡する。大体捕まる。もっとも長く逃亡していたのが1箇月くらいであった。逃亡すれば、罪がさらに重くなる。ここに来ている犯罪兵が逃亡も含め、再び軍紀に違反するようなことをすれば、軍事裁判所の裁判を経て普通の民間の監獄に送られることもある。紀律大隊には軍事裁判所から代表として、ひとりの大尉が常駐していた。1990年7月1日に、人民大会議の決定によって、この紀律大隊は撤収された。

犯罪兵には、ここに来た時期の前後や収容期間の長さの違いによる上下関係がある。普通の監獄で発生するすべての出来事は軍隊の監獄（この紀律大隊）でも発生していた。この犯罪者はすべてガンツホダグ (Ganc hudag)¹⁵⁾ から送られて来る。普通の監獄からは来ない。普通の監獄とは大差がない。たとえば、出身地や元の出身部隊が同じ兵士たちがグループを作って相互に殴り合う現象は起きていた。ただし、守衛兵が見張っているため、いつもということではないが、殴り合いは起こっていた。すれ違うときに拳を押しつけるなどのようなトラブルは常に見られていた。犯罪者たちは自分のことをサヒラグ・ジュルグチ (Sahilagjulagchi)¹⁶⁾ という。だれかが身体に触れると、普通の兵士と同じように、すぐに自分の名前を「教育を受けている戦士〇〇〇」という。このような犯罪兵たちと仕事をすることは大変である。ここの軍官がまさに犯罪兵の父母のような役割を担う。オロト長である上官は彼らの父役である。私は副上官であり、母役にあたり、主要な教育役であるため、彼らをとことろ細かに観察し、いささかの異常でもあれば、理由などの詳しい事情をかならず聞き出す。犯罪兵がここの規定に違反すれば、禁足を命じられる。つまり、多くの人を1つの小さな部屋に寝させる。たとえば、16人を広さがこの自宅の corridors (Kordor)¹⁷⁾ の大きさ、約8平方メートルくらいの1つの部屋に入れる。禁足室にはいつもだれかが入っている。犯罪兵は新兵ではないため、ゴージュル (Goojuur)¹⁸⁾ とは呼ばないが、お互いに悪人と呼び合う。

犯罪兵の住居はゾーンと言われ、その周りに高さ2mの石塀が作られ、その内側にはや

はり高さ2m くらいの有刺鉄線が張られている(写真19)。逃亡を防ぐために犬3匹が飼われていた。犬を石堀と有刺鉄線の間に放して見張らせる。犯罪兵たちは逃亡しないように、このゾーンのなかに入れられる。犯罪兵は決められたノルマの仕事在完成すれば、休む。逃亡の可能性が低いと判断された人は山に木材伐採に出る。重罪者は伐採した木材を汽車に積む仕事をする。いつも夜、仕事をしてきた。仕事が多いときは30人が8時間内に、汽車のワゴン10台をいっぱい積み込む。12～15立方メートルの木材を1両の大きなトラックに積み終えるには、4人で普通は30分かかるが、積載に熟練した場合は15分間で完成できる。伐採に熟練した人は短時間でその日の基準に達し、すなわち2台のトラックを満載にする24立方メートルの木材を切り倒し、薪木に処理することができる。そのうえまた、翌日の仕事の準備も済ませておく人もいる。余った時間は寝る。娯楽というものは売店でタバコ、飴、茶などを買うくらいである。犯罪兵に毎月6トゥグルグの手当てがある。妻が売店で働いていたため、よく知っているが、現金が残っていれば取られるため、手当てが渡されると6トゥグルグを全部使うように、すぐに売店で必要な品物を買う。しかし、品物も取り上げられていたかも知れない。

ゾーンのなかでは自由である。食材は軍隊から提供するが、料理は犯罪兵たちが自分で調理する。犯罪兵のなかから食堂で働く人を出す。調理が得意な人がこれにあたるが、もっとも重要なことは上官の信頼を得た人が食堂で働く。彼らは行動が比較的に自由である。この士官はすべて普通の兵士が担当する。犯罪兵のなかから士官は出さない。

ここを出た兵士が後に、副上官であった私に大変親しくしてくれる。この前、ウランバートルに行ったとき、その兵士の名前も覚えていないが、「副上官」と声かけられて、レストランに連れていかれ酔うまで飲まされた。

犯罪兵たちは成長して、良くなって出て行く人もいれば、また戻ってくる人もいる。兵役の期間がまだ終了していない兵士はこの懲役期間を終えたあと再び兵役に戻る。なかに、部隊で再度犯罪を起こしてもう1度ここに来る人がいる。とくに小隊長などのような下級士官が軍隊に戻ってから兵士に暴力を振るったため、再び紀律大隊に送られてきた人がいた。犯人成分の割合としては、およそ50%が小隊長であり、30%が逃亡兵士、20%がその他の窃盗、強盗などのいろいろな軍紀に違反した兵士である。ここに来た小隊長のほとんどは兵士への暴力が原因であった。

山での作業中のみならず、兵士や番犬の監視があるにもかかわらず、逃げようとする人もいる。寮から脱走する者は横ばいになったり、柵の下に穴を掘ったり、犬に餌を与えて馴らしたりして逃亡を図る。冬にも床板の下に穴を掘って逃げ出したケースがあった。犯罪兵はここに来て数箇月も経っているのに、「副上官、ウランバートルから軍車が来たか」と聞く。「来た」と答えると、「だれだれが来たでしょう?」と言い、実際、当たっている。軍車が来るまではいつ、どのような人が来るのか私さえ知らなかったのに、犯罪兵たちにはなぜか分かっている。犯罪兵は外界との連絡が取れないが、どのようにしてこの情報を得ていたのかというと、ここに来る前に、ガンツホダグの拘置所にいるときに軍紀違反者たちは互いに情報を交換し、つぎにだれが紀律大隊に来るかということほとんど推測できているようである。ホブド・アイマグとドルノド・アイマグの部隊の兵士たちも連絡を取り合っていたという具合である¹⁹⁾。

犯罪兵士はウランバートル、セレンゲ・アイマグとドルノド・アイマグの出身が多かった²⁰⁾。

同性愛の現象は存在していなかった。普通の「黒い」監獄や軍隊には同性愛が存在して

いると聞いたが、ここにはそのようなことはなかった。

犯罪兵と守衛兵との間にトラブルは起こっていた。

ここにも医療所はあり、サービスが良かった。ほかの物資補給なども普通の部隊と同様である。ただ、犯罪兵は囲いのなかで見張りの下にいるため、仕事の効率が低くプレッシャーがかかる。犯罪兵はどこに行っても守衛兵が付いて行くからである。

毎晩、2時間の文化教育を行う。毎週月曜日と木曜日の晩は新聞を読む。国際ニュースや世界情勢などについての内容である。

普通の部隊と同じように、犯罪兵たちも宿舎の板でできている地面にモップをかけたり、蠟をひいたりするため、床は鏡のように光る。

この小隊長は普通の下級士官であり、すなわち犯罪人ではない。普通の軍隊のなかで下級士官が兵士を処罰する権限を持つと同様に、この小隊長も犯罪兵を罰することができる。

私の在職していた期間に、木材伐採や積載の仕事のため2人が事故に遭遇して死んだ。兵士間の暴力等による死亡事件は発生しなかった。このほか、病院でどれくらいの人が死亡していたかについてははっきりしないが、少なくないであろう。ガンツホダグで5、6箇月も軍事裁判所の判決の結果を待っている間に、肺の結核などにかかった兵士が来ることもあるため、実際に兵士の死亡は発生していた。

この食事はよかった。普通の部隊と同様であり、量的にも保障されていた。また、野生の果物も多く、これもよく食べていた。山での仕事のため、冬は建築兵と同じように棉のコード、フェルトのブーツなどが支給される。朝8時から夜8時までの間、毎日少なくとも10時間以上働いていた。

1つ良かったことはつまりこの士官の給料が普通の軍隊より高いことである。分隊長に普通の軍隊のオロト長に相当する給料が支給される。私の月給は800トゥグルグくらいであった。

犯罪兵には休暇がない。実家に不幸があっても、上級機構からの許可がなければ休暇は出さない。朝と晩に軍歌を歌う。これは普通の軍隊と同じである。この守衛兵のなかにも普通の軍隊と同様にオネー・イルガ (Onii'ilga)²¹⁾ つまり先輩後輩による厳しい上下関係が存在していた。守衛兵は軍紀に違反すれば裁判官が来て裁判してから直ちに紀律大隊に入れられる。犯罪兵の仕事ぶりや姿勢、態度などについて分隊長が証明書を出す。囚人が反省し、更生したいという希望が強く、積極的によく頑張っていれば喜びの書²²⁾を上官からもらう。それによって懲役期間を縮めることができる。2年間の刑期で来たがよく頑張ったため1年半でここを出た人がいた。兵士たちには個人の身上調書があり、そこに分隊長が兵士についての評価を書き込む。それによって喜びの書の発行を決める。なかには、喜びの書をくださいと頼んでくる人もいる。よく頑張った人はみんなの模範になる。

逃亡予防のために、ゾーンの四隅にそれぞれの監視塔があり、1晩中大きな電灯がついている。白昼のようである。守衛兵士は徹夜で、絶え間なく「タルーラ、タルーラ」と声を上げる。これは1つは守衛兵が寝ないように、もう1つは守衛兵が見張っていることを囚人に知らせ、逃亡を防止するためである。このように警戒しているにもかかわらず犯罪兵が逃亡を図る。逃亡防止の有刺鉄線の留め金を抜いたりしていた。守衛兵は2時間毎に交代で巡邏に出る。監視が厳しいものの、隙をねらって逃げ出してしまうことが時々発生していた。

囚人のなかに刺青をしている人はたくさんいる。刺青の模様は本人の自由であるが、大

体動物などになっており、部隊の番号が使われない。

犯罪兵たちはまた、見張りのために飼っている犬に元部隊の司令部の士官や士官夫人の名前を付けて、その犬を殺してホーショール (Huushuur)²³⁾ を作って食べる。犬の肉は持病の再発を予防する効果があるとよく言われるので、「副上官、あれ(犬を指している)を殺して食べた」と言う。山に出て猪なども狩って食用にしていた。

犯罪兵のなかでもとりわけ、逃亡の経験を持つ人は再び逃亡する可能性が高い。それは元いた部隊で殴られ、居られなくなり、プレッシャーが大きいために逃亡していたからである。

囚人たちは宣誓しない。

私は少尉から大尉まで昇進し、軍隊の戦闘勲章をもらった。妻は軍隊の食堂、売店などで働き、子どもたちはここトゥンヘル²⁴⁾の学校へ行く。240部隊は人民軍に所属する。1990年7月に撤収するとき守衛兵は残り、兵役期間終了まで伐採の仕事が続け、かつての072部隊がのちに310分隊に編入された。軍官たちはほかの部隊へ移動したが、私は退職した。240部隊で仕事をしてきた人々とは定期的に再会している。最近では2004年に再会した。

休暇も娯楽もないため、ここの犯罪兵たちは非常に寂しい。就寝前にふるさとの歌などを歌ったりして、寂しさを凌いでいた。

1982年から1990年7月1日に撤収するまでの8年間、収容所に入った犯罪兵人数は延べ1,000人程度であり、この中で、オフィツェルは延べ100人前後であった。

私の在職期間中、ひとりの兵士がいじめられ、虐待されたため、山に出て木材を伐採するとき隙を見て逃げた。このトゥンヘル²⁴⁾の近くにアスラルト・ハイルハン山 (Asralt hairhan uul)²⁴⁾ のムスティーン泉 (Mustiin arshan) という所がある。彼はオプス・アイマグのザブハン・ソム郡 (Zabhan) の出身であり、ここの地理や地形はよく知らないが、数年前父とムスティーン泉に行ったことがあるため、そこへ逃げた。地元の人があるの逃亡を発見し、兵士がそこへ行くと紀律大隊に通報した。軍官2名が彼の後を騎馬で追いかけた。しかし、山に森が茂っていたため、彼に追いつけず、見つからなかった。彼はムスティーン泉に着き、その服に肩章がなく普通の衣服に似ていたため、泉に来ていた人々は彼に異様さを感じなかった。彼はアスラルト・ハイルハン山で1頭の白い馬を盗み、三日三晩かけてウランバートルへ逃げ着いた。その後、近くの地方へ逃れる途中見つかり捕まった。

囚人の食品は総じて言えば、当時には普通の人あまり好まないいわゆる粗末な、下級の雑穀などが主要なものであったが、現在から見れば、これらこそ健康食品である。

①ドグイボロンタイパーブル茶 (Dugui bolongtai baabar cai, 丸角のパーブル茶) : ソ連から入ってきた茶のことであり、だいたい20 cm×30 cm×4 cmのサイズの立方体であり、これはドグイボロンタイ茶 (丸角の茶) というが、これを3つか4つに分けたものはパーブル茶と言う。このパーブル茶を3リットルの水で沸かす。たいへん濃い茶になる。彼らには牛乳が入りできないため、牛乳は入れずにストレートで飲んでた。加糖練乳が手に入れば入れる。この茶を飲んでみたことがあるが、コップ1杯飲んだだけで大量の汗をかくため、実際、体に大変良いものである。

②家畜の内臓 : 軍隊の支給品のなかで動物の内臓が最も良くない部分として見られていた当時、これらの内臓は囚人に回されていた。

③犬や猪の肉 : 肉がそれほど充分ではなかった時代には、犬を飼ってそれを食料にし、山に入って猪を狩っていた。

④フチ・ボダー (Huc budaa), シャラ・ボダー (Shar budaa) : いずれもキビ、トウモロコ

シなどの雑穀を指し、健康に良い。

⑤野生の果物：山に、たくさんの果物が自生しており、それを摘んで食べていた。

⑥ボル・ゴリル (Bur guril, 灰色の小麦粉)：社会主義時代のモンゴルでは、小麦粉が3つのランクに分けられていた。最も上等なものはドガル・ウゲイ (Dugar ügi guri, 1等級・ランクのない小麦粉) と言い、官僚たちが食べる。次はネグドゲル・ゴリル (Nigdüger guril, 1等小麦粉) と言い、普通の人たちが食べる。その次はホヨルドガル・ゴリル (Hoirdugar guril, 2等小麦粉) であり、色が灰色に近く、質が良くないと言われ、囚人にはこれを提供していた。このホヨルドガル・ゴリルは、ボル・ゴリルとも呼ばれていた。

このような飲食物は当時の考え方から見ると、良くないものであったが、実際、健康に非常に良い品物であった。

C さん

2008年8月25日、ウランバートル、50代の男性。

ゴビアルタイ・アイマグ出身。1983～1986年の間に兵役につき、ズーンバヤン169部隊に所属していた。軍隊にデグリム (Deglem)²⁵⁾ は存在していた。先輩の兵士2人に拳で殴られたことがある。椅子の背もたれの棒が折れるまで殴られたこともあった。上官に食事を運んで行き、お金をもらうことはしていたが、新兵の食事を取ることはしなかった。だれかが窃盗を働くと、冬でも全員を、戸外に下着1枚で立たせる。帽子の徽章などすべてが盗まれていた。老兵は射撃練習のとき、的によく命中させていた。士官が兵士をじかに銃殺していたことが兵士の間で密かに流れていた。兵士が何らかの原因で入院したり、逃亡したりしていた。3年目の老兵も逃亡していた。兵士ひとりにしらみがあれば小隊全員を外に立たせる。兄は自分と同じ部隊のオフィツェルであったが、兄からたばこ1本もらったことはない。兄は私をほかの兵士と同じように扱い、何かあれば拳で殴っていた。1度、私は軍紀に違反したため、カラゲル (Harger)²⁶⁾ を命じられた。しかし、なんと言っても実の兄弟であるからして、兄が他の兵士を使って肉を届けてくれた。また、おそらく兄が働きかけてくれたおかげで、すぐに禁足から出ることができた。新兵の宣誓はとても素晴らしかった。旗に口付けをすることは素晴らしかった。

銃で兵士の肩や胸をたたくことはあった。服装は良かった。冬の下着は洗うほど柔らかくなり、暖くなる。靴の底を厚く固くすれば、格好良く見える。また、それでお互いに特に新兵の頭を打つ。このような暴力は1981～1985年にもっとも酷かった。

氏は1980年代、モンゴル人民共和国駐フフホト領事館の運転手であったが、死者ひとりを出す交通事故を起こしたためモンゴルに戻った。しかし、ウランバートルでも冬、また交通事故を起こし、ひとりを死なせたため、監獄で3年間過ごし、その後、軍隊に入った。今はウランバートルで電気工事に従事している。

D さん

8月30日、ウランバートルに住む父子をインタビューした。息子のDさんは、20

代半ば、2005～2006年の間、013部隊の通信兵であった。

私が兵役に服していた時期はモンゴル国の兵役法が変わって兵役期間が1年間となっていたが、軍隊に入った時期の違いによるオネー・イルガが存在していた。春と秋2回徴兵していたため、6箇月の違いがある。6箇月早く来た人が後から来た人をトイレに呼び出してバハル (Baqal) というロシア製の非常に固い長靴を使って殴る。シャナー・ウッグフー (Shanaa ügüh) と言って、タオルやベルトでこぶしを巻き、相手の顔などを殴る。これは、殴られた跡が残らないからである。腕立て伏せをさせ、腕立て伏せをしているときに、胸を蹴る。鉄棒からぶら下げてお腹を殴る。

また、食事のときに騒ぎをたてれば食事抜きにする。特に、新兵の食事を奪ったり、或いは食事抜きにしたりする。兵士が暴力を受けて入院していたこともある。腹部を殴られ、排尿困難の障害になったため退役した兵士がいた。被害者が暴力を加えた人の名前を出さないため、加害者が分からないまま事件は終息してしまった。また、新兵の服、靴を奪い、新しいものを自分の破れた古い物と強制的に交換させる。新兵をゴージュルと呼ぶ。兵士の間では、暴力を「ヤブナ (Yabna)」²⁷⁾ などと言う。トイレに行かせず失禁させるといういじめの方法もある。つまり、大量の飲み物を飲ませ、長時間に渡ってトイレに行かせない。我慢できずにズボンははいたまま排尿させる。

曹長の手当ては月2,350トゥグルグで、普通の兵士は2,150トゥグルグになっていた。兵士の手当てをオフィツェルは下位の士官に取らせて、自分のものにする。そのために、オフィツェルは小隊長に酒を買ってあげる。オフィツェルは飲酒しない。私が退役するとき、小隊長になり、下位に1名の軍曹、2名の副軍曹の助手が設けられた。この3人がそれぞれひとつずつの分隊を管理する。1つの分隊に20名前後の兵士が所属する。自分の在籍していた小隊には3つの分隊がある。計76名の兵士を管理していた。軍隊に入っていたときに刺青をした。右腕の刺青には剣に絡みつく植物と骸骨が、手の甲のほうには生年月日が、そして、右の胸には花、左腕には鷹と蛇がそれぞれ入れられている (写真20, 21)。ほかの兵士たちも皆刺青をしており、模様は鳥など様々であった。

彼が軍隊で宣誓した時の写真の撮影も許された (写真22)。

Eさん

父のEさんは50代前半、セレンゲ・アイマグ出身。

私は1978～1981年、バヤンウルギー・アイマグのダヤンギーン歩哨所 (Dayangiin zastab, Dayan湖の近く) の0165部隊で兵役についた。オネー・イルガ、リンチが存在していた。1年目の兵士は新兵と、2年目はアスマン・ツェレグ²⁸⁾ と、3年目はハラ・ツェレグ²⁹⁾ と呼ぶ。この歩哨所には60名くらいの兵士と十数名のオフィツェルがいた。辺境の巡邏は当番制で、当番に当たると1週間巡邏に出た。ちょうど私が兵役についていたとき、このような事件が起こった。カザフ族の兵士ゲスダワー (Gesdava) が私と同じ1978年に徴兵されたモンゴル人兵士エルデネ (Erden) に暴力を振るい、真冬のなか裸足で戸外に立たせ、足を凍らせた。その後、ゲスダワーたちが狩りに行き、エルデネを食事の用意をするようにと留守番で残した。エルデネは食事の用意などせず、銃を用意して、ゲスダワー

たちが戻ってきて部屋に入ってきたとたん、ゲスダワーを銃で撃ち殺した。頭に銃弾が29発もあり、そのなかの1発は頭を貫通していた。

ここでは以前、バヤンウルギー近くのアイマグから徴兵していたが、1978年から、東部の、たとえばウランバートルやセレンゲ・アイマグ出身の兵士も徴集するようになった。遠隔地域の兵士のあいだに、生活習慣や文化の相違によってトラブルがより多く発生するようになった。バヤンウルギーでは、最初、カザフ族の兵士がモンゴル人をいじめ、すべてのことをカザフ式に行い、実行していた。モンゴル人とカザフ族とは言葉がよく通じないため、(コミュニケーションが円滑にとれず)、カザフ人がモンゴル人に乱暴を働く。

食事としては、カザフ族がイスラム教徒であるため、豚肉を食べない習慣を持ち、最初は羊肉を自分たちが食べ、豚肉をモンゴル人兵士に回していたが、後になって、モンゴル人兵士が強くなり、争いで勝ち、豚肉も羊肉も全員で食べるようにした。そして、カザフ族兵士がモンゴル族兵士をいじめていた方法で彼らをいじめ、仕返しした。

違法越境事件も起こっていた。バヤンウルギーはモンゴル、中国の新疆ウイグル族居住地とソ連の3ヶ国の国境隣接の地である。私の在役した1978～1981年の間、中国領内からモンゴルへ2人が違法越境して入ってきた。

ポー・チネーレフ(Boo chineeleh)と言って、胸を銃で強くたたく。また、暴力の方法としてはパンを食べさせる。つまり水やお茶などの液体を与えずに、大量のパンを強制的に食べさせる。また、食事のとき、新兵に「お腹がいっぱいになったか」と聞き、「まだ」と答えたら、食べ物を8リットル食べさせてから、ベルトで頭の縦の長さを測り、その長さを以ってお腹を引き締めて、テントの回りを速く走らせる。そうすると、大量に食べさせられた食べ物を吐き出し、時には吐しゃ物が勢いよくテントの上まで飛ばされる。

私と同じ1978年に入隊した兵士全員が刺青を施した。私の刺青の内容は1985年7月10日10時、スフバートル広場で皆が再度会う日時である。約束を果たして全員で再会した。兵士たちの刺青の模様はほかに虎、狼などさまざまである。

私が退役するとき、伍長であった。伍長は室を管理して、15名の兵士が管下にあった。

Fさん

8月31日、ウランバートルで電気の仕事に従事している40代半ばの男性。

1983～1986年まで兵役についた。1年目は128部隊、化学兵の小隊長を養成する班に入り、1年間勉強して卒業し、小隊長として別の小隊289部隊に移った。これはウランバートル近くのウランアラング(Ulaan aarangg)駐屯部隊である。退役時には軍曹の肩書きを持つ分隊長であった。軍隊の生活はそんなものであろう。小隊長や3年目の老兵ハラ・ツェレグは新兵とは直接に接触せず、新兵の管理や訓練などを2年目の兵士アスマンに任せる。軍隊内部の暴力というのは、うちでは、速く走れない、整列ができない兵士を規定にしたがい訓練させ、走らせるという程度のものであった。要求を達成できない者や規定に違反した者は鉄棒に縛り付けておくと、2、3時間経ってから行ってみると兵士がもうそこにはいない。どのようにしてそこを離れたかは分からない。私はリンチや暴力をしていないが、やり方としてはシャナー・ウグフフと言って、タオルかベルトを拳に巻いて殴る、と聞いた。これは殴られるほうは痛みを感じるが、傷害にならない。ほかに、牡牛殺しというのも耳にはしていたが、自分の分隊には存在しなかった。兵士の脱走は発生していた。新兵だけ

ではなく2年目のアスマン兵も逃げて、分隊長が追いかけて捕まえてくる。脱走の理由は軍隊生活に慣れない、軍隊の圧力に耐えられない等である。或いは兵士たちはホームシックや家庭の困難、父母の体調不良などに悩み、士官に何も相談せずに、直ちに逃げてしまう。捕まったらあれこれと逃亡の言い訳をする。もし話してくれれば解決の方法も相談できたであろうが。新兵の逃亡は、主に食事などに慣れないという理由によるものである。

小隊長の手当は毎月28トゥグルグであったが、兵士は10トゥグルグであった。兵士の手当は本人に渡さず、小隊長が取ってしまう。従来より、新兵の10トゥグルグの手当は彼ら本人の手に入ることはなかった。手当がどこへ行っているか新兵はまったく分からない。ハラ・ツェレグは新兵と2年目の兵士アスマンの手当を横取りしていた。また、共産主義青年団団員の会費2ムンク（10ムンクは1トゥグルグ）も兵士から徴収して小隊長が横領してしまう。基層部隊の状況は主に分隊長や小隊長によるものである。特に小隊長の人柄や責任感、管理の善し悪しが重要である。2年目のアスマン兵ひとりに新兵ひとりを任せると。新兵が分からないことはアスマン兵に聞く。まだなにも分かっていないため、新兵を殴ったりしてはいけない。自分がいた部隊は国防庁直轄の専門部隊であったため、兵士数は少なく、食事のときに1つのテーブルに4人しかいない。私が軍隊の駐車場の夜間の守衛当番に出ていた。行列長が食堂の仕事の検査にも出る。副軍曹は守衛兵を指揮し、2時間ごとに守衛の当番が変わるようにする。上等兵は夜の守衛番に出ない。新兵の最初の期間が終わると宣誓していた。軍隊に入った第45日目に宣誓する。宣誓することはとても素晴らしい。これは軍隊の嬉しい出来事であり、少将のような位の高い士官が立ち合う。そのとき宣誓の祝いが行われ、相撲を取る。国や軍隊の大きな記念日の際、閲兵式が行われる。私は1986年に軍隊創設65周年記念の祝典に参加した。

軍隊の食事は良かった。1日3食で、食事の供給もよかった。とくに新兵はおなが空いたとき、いつでも食堂でパンなどの食べ物ももらっていた。ウランバートルの部隊では地方や辺境駐屯地の兵士より待遇がずいぶんましであった。もっとも大変だったのは辺境軍と建築兵である。

Fさんの親が地位の高い人であるため、ウランバートルに残ることができ、地方へ行かなかったと、彼の友人は言う。

Gさん

友人の紹介で、トゥブ・アイマグ庁所在地のゾーンモド (Zuun mod) 市で現在タクシー運転手をしているGさんを尋ねることができた。ゾーンモド市はウランバートルから南へ約43km離れたところであり、その南に016部隊が駐屯している(写真23, 24)。2008年9月3日、ゾーンモドに向かう途中、ちょうど大型トラックで機械を運搬している軍隊の車両と出会った(写真25)。

Gさん(50代半ばの男性)は中佐であったため、ズゥーンバヤン部隊に関する情報ある程度把握しているであろうと思い尋ねることにした。同行のモンゴル国の人はGさんの遠戚であった。その話によると、Gさんの妻の妹は現在、中国との国境

都市ザミンウード（Zaminn üüd）で1,000頭の家畜を持つ裕福な暮らしを送っている。この裕福な生活の基礎は亡きご主人が軍隊の上級軍官であったことであろう。姉妹3人の夫は皆、軍隊のオフィツェルであった。Gさんの証言は次の通りである。

私はバヤンホンゴル・アイマグ出身で、1991年までドルノゴビ・アイマグのズゥーンバヤンで軍隊に入っていた。1991年にその部隊の1部が撤収する際、トゥップ・アイマグ軍事事務局に移り、退役するとき、副ホランダ（Ded huranda, 中佐）であった。2006年ゾーンモド市に引っ越した。今はタクシー運転手である。

ズゥーンバヤンには1980年代、現役軍人が将兵計1万3,000人くらいおり、そのうちオフィツェルが870人前後であった。軍隊の編制としては平和時期と戦時との両種類がある。戦時に人数を迅速に拡大するため、武器装備としては、2万5,6,000人の武器提供ができる編制状態であった。つまり、一旦戦争が発生したときには、登録されている60歳までの予備役軍人、退役軍人を再び徴兵することになる。たとえば平和時は1つのオロトが75人であるが、戦争時には100人以上になる。私が知っているところでは、ズゥーンバヤン駐屯部隊では平均で毎日少なくとも15,6人の兵士脱走事件が発生していた。リンチ、暴力で死んだ人はいないが、病気にかかって亡くなった人は存在していた。たとえば当時兵士の間には01病が流行していた。これは腸の伝染病であり、感染して死んだ兵士がずいぶんいた。また、夏には逃亡兵が逃げている途中で脱水状態に陥り死亡することも起きていた。武器操作の訓練で操作を誤って怪我を負い、手足を失ったりするような事故も発生していた。当時は実弾の入った武器を用いて訓練していたからである。軍隊内部の毎日のニュースや報告によってこのような情報は入手していたが、死亡についての確実な総人数は把握していない。義務期間未満の兵士が退役することもあり、ズゥーンバヤン駐屯部隊の機械化歩兵旅団は毎年10人程度、ほかの専門分隊では4,5人前後であり、合計14,5人くらいあった。それは訓練時の事故、病気または貧困などの理由によるものである。軍隊で罪を犯した兵士は軍事刑事裁判を経て軍隊の刑務所である紀律大隊に行く。

私が1991年、トゥップ・アイマグに転属するときにはズゥーンバヤンはまだ師団のままであったが、1992年から縮減しはじめ、1995年には1小隊のみ残し（写真26, 27）、ほぼ完全に撤収された。撤収する際、兵役期間が終わった兵士は退役し、まだ兵役期間が満了していない兵士はほかの分隊へ移された。ズゥーンバヤン師団は126部隊と称され、もともとは第6騎兵師団であり、その基礎の上に建設された。この部隊はハルハ川戦争を経た部隊の基礎の上に建設したものであるため、非常に強かった。ズゥーンバヤン部隊撤収後、木の柵などは人々に全部持っていかれたが、131, 132, 133部隊の建物はまだ残っている。

当時モンゴルの軍隊配置としては、ズゥーンバヤン師団のほかにホブドのホロー（Horoo, 旅団）、エリデニト師団、ウブル・ハンガイ師団とトゥップ・アイマグ師団があった。この4つの師団の規模はほぼ同じで、師団の上位にはバリガド（Barigad）があり、第5アルミーはこれらすべての師団、旅団を統帥する司令部で、その上位は将軍司令部である。ズゥーンバヤン師団は6つのホローを有し、これらのホローの番号は131, 132, 133, 138, 139, 169であった。分隊は200, 201というように順番に207まで、それに136を加えて計9つあった。207部隊は戦闘師団、136は戦車、ほかにはまた音楽、コメンダント（Komendant, 追捕大隊）、修繕修理、運輸、エンジニア、化学、通信、間諜、建築、パン製造所、消防隊などの専門のオロトがあった。

Hさん

男性、40代後半。彼は次のように語る。

セレンゲ・アイマグ出身、1984～1987年の在役、ズーンバヤン201部隊の通信兵であった。8年教育を終えて、ウランバートルの経済学校に入ったが、第1学年が終わるとき、同級生の誕生日パーティに参加し、飲酒したため学校に除名された。それで、軍隊に行くことにした。徴兵された当初はウランバートル近くのタブントルゴイ（Tabun tolgoi）駐屯部隊アルミー中央司令部の所管部隊に入った。新兵の宣誓が終わった後、どのような技術を持っているかと聞かれたが、当時、テムス（TMS、技術専門学校の略称）を卒業した人たちも軍隊に入っていたため、自分も彼らと同じように何かの技術を有すると思われるだろうと、通信の技術を持つと答えた。そのとき、証明書などは発行されなかった時代であるが、嘘をつくと危ないため、みんな忠実に答える時代であった。実際、通信技術の知識についてはほぼ何も知らなかった。しかしそれでも、通信部隊に入れられた。

宣誓が終わって間もないある日、第5アルミーの少将が基層部隊の視察に来ると聞き、老兵たちが靴の底を厚く敷いたり、高い帽子をかぶったり、服装にいろいろと手を加えた。少将は閲兵しているときにこのことに気づき、アルミー中央司令部の所管部隊の兵士であるからこのような調子に乗った格好をしているのかと怒り、隊列のなかから1名の兵士を呼び、前へ出して訓話した。この兵士はバヤンウルギー・アイマグ出身のカザフ族であり、モンゴル語を話すとき訛があるため、私は笑った。すると、少将に呼び出され「義務兵は祖国を守るため、どこで義務を果たしても良いので、ズーンバヤンに行かせる」と命じられた。このようにして私はズーンバヤンの通信部隊に行った。私と一緒に地方の部隊へ送られたもうひとりのオフィツェルがいた。このオフィツェルは上着のボタンをかけていないところを少将に見られ、「規律のないオフィツェルはエルデネト部隊へ行かせる」ということになった。私はズーンバヤンの新部隊においても通信班に入った。新部隊へ行ったあと、ここに来た理由を皆に知られたため、ハラ・ツェレグの老兵に「少将に笑ったように笑え、皆に向けて笑え」と笑わせられた。笑わないと殴られるので、仕方がなく、嘘笑いをしていた。ウランバートルから来るときに、新しい軍服を着てきた。新しい服や帽子を譲るように求められたが、応じなかった。すると、ある朝、目が覚めると自分の服がなくなっており、その代わりに旧いものが置かれていた。

ズーンバヤンに行った最初は新兵たちの服がかなり旧いため、地方だからこんなのかと思っていたが、間もなく自分も彼らと同じように服が旧くなった。すなわち、新兵の帽子、靴、服などの新しいものは老兵に奪われ、旧いものを与えられたからである。風呂に入る回数が少ないため、旧い服にはしらみが繁殖しやすい。ひとりにしらみがあると、同じ建物に入っている全員に移るようになっていた。しらみが1つの建物からほかの建物へと移っていくため、違う建物に入っている兵士等は互いに相手のしらみだと責め合う。また、新兵は常にお腹が空いている状態にある。それは、食べ物が老兵に奪われ、食事のなかに入っている肉を取られ、いつも1番良くない食品を食べるからである。モンゴルは20世紀1980年代半ばまでは毎年、春と秋の2回徴兵していた。春は6月に行われ、義務を果たして3年後の6月に退役する。ハラ・ツェレグはずっと新兵と2年目のアスマンを制御する特権を持つ。

新兵が軍隊に入った第45日目に宣誓する。宣誓するまでのこの45日間にはスフバート

ル室³⁰)で文化学習もする。すべての部隊にスフバートル室が設置されている。いわゆる文化学習とは主に、ツェデンバルをはじめとする国家や党中央局の過去と現在のリーダーや国防庁長官らの名前を暗記することである。暗記できた人は休めるが、暗記できていない人はできるまで休めない。宣誓した後、このスフバートル室が銃を解体したり、殴りあい、暴力を振るったりする場所になってしまう。いじめや兵士間の暴力が止まらない原因は、被害者がもし上官に報告すれば、さらにひどい目に遭い、一層の暴力を振るわれるようになることにある。いじめや兵士間の暴力は、上官らにとって都合の良いことであり、実際、上官にはそれを阻止しようという気持ちはない。それがゆえに、上官らは暴力を受けたため報告した兵士を報告しなくなるまで殴るよう、秘密裏に他の兵士に指示を出す。つまり、上官に報告すれば、逆効果を招く。

老兵が新兵や2年目のアスマン兵を冬、下着1枚で戸外に立たせる。兵士たちは若いため、寒くてもあまり病気になるなかったが、厳寒のなか、少しでも温まるように体を動かす。このような罰は、チッパツァガン(chipha cagan)と称される。ツァガンはモンゴル語で白色の意味、チッパはロシア映画の主人公であり、戦争のときこの人が白い下着で戦っていた。モンゴル兵士の下着もこのような白色であるため、下着だけで外に立たせる罰をそう呼ぶのである。1晩中、戸外に立たせて明け方になって部屋に入れられる。上官が早朝視察に来るとき、皆、何の異常もなくよく寝ているように見える。デグリムは言うことを聞いてもらい、大人しくさせるために、老兵が新兵と2年目のアスマン兵に施すものである。2年目の兵士は新兵と同じように「秩序を与えられる」、つまり暴力を受ける。3年目の老兵のみが後輩に対して特権を持っている。3年目の老兵がいかに弱く、悪くても後輩の兵士を支配し命令する権力を有する。2年目の兵士にはこのような特権がない。老兵は夜、新兵を起こして仕事をさせたりする。毎月の10トゥグルグの手当てを横取りする。自分たちが老兵になるとまた同じように後輩をいじめ、暴力を振るう。

1984年末、131部隊の新兵がズボンのベルトを使ってトイレで首を吊って自殺した。原因不明。トイレ内に当番時に持つ軽機関銃が立てられてあった。

逃亡兵は追い詰められて逃げている。祖国に忠誠の誓いを立てたのでよほどの事がないかぎり逃げないはずだ。兵士の誓詞が兵士の意識のなかに本当に浸透していれば、リンチ、暴力、いじめは発生しないはずである。兵士の人数が多いため、リンチ、暴力、いじめは軍官僚の管理にとって好都合かもしれないが、祖国を守るため宣誓しているので、本来、暴力などを振るうはずはない。兵士ひとりにもリンチ、暴力を与えてはならない。

軍隊の生活があまりにも辛いので、兵士が退役までの日々を心のなかで数える。老兵が新兵に「お前がここに来てどれくらい経って、あとどれくらい残っているか」と聞く。新兵が軍隊に来てから経っている日数あるいは残りの日数を答える。そうすると、「まだまだ〇日ある。壁に頭をぶつけれ」と命じられる。新兵は「まだまだ〇日ある。」と言いながら、頭を壁にぶつける。これはすでに1種のおきてになっていた。「まだまだ〇日ある。」というのは退役までまだまだ遠いとの意味であり、老兵の新兵に対する様を見ろ心理の表現である。「私はもうすぐ退役するが、お前はまだまだ遠い」という意味であり、それによって1種の自己満足を得ている。軍人の規定では、老兵に身体を触られ接触したときに、あるいは殴られるときでも必ず「私は戦士〇〇〇」と自分の名前を言う。そう言わなければ戦士ではない。

当時はロシア製の蠟がモンゴルでたくさん使われていた。後輩の兵士に木製の床に蠟をひかせるとき、両手に雑巾1枚ずつを持たせ、奥さんあるいは彼女の名前を聞き出し、両

手の雑巾にそれぞれ兵士本人と奥さんまたは彼女の名前を与える。2年目や3年目の兵士が監督役として、働いている兵士と奥さん（あるいは彼女）の名前を非常に早口で言う。名前を言うたびに、それに対応している手で間に合うように拭く。言うほうが速くなれば拭くほうも速くならないといけない。

モンゴル軍隊内のリンチや暴力、いじめはソ連の影響を受けたものである³¹⁾。建築部隊では暴力がより深刻であった。兵士がお互いを建物の上から押し合い、落として死亡させる。しかし、家族に通知するときは事故死であり、社会主義建設のために献身したという。死亡兵の処置としては、軍当局が死者の遺族に遺体の面会をほとんどさせず、「光栄にも祖国のために命をささげた」と虚偽の告知をして片付ける。遺族は身内の死亡の真相が知りたいと死因に疑問を感じても言うてはいけない。それは反社会主義の罪になる。しかも、当時の背景としては、人々は社会主義を守ることを自分の神聖な義務だと思いこみ、悲しい事実を前にしても、それを秘すること自体が社会主義に忠実であることになると考えていた。また、新兵は痩せており、3年目の老兵はのんびりして、精神的にも安定しているため体がとても丈夫である。それゆえ、退役して家に帰ると両親は息子が軍隊に行つて良かったと勘違いする。

ズーンバヤンで1986年、オプス・アイマグ出身の兵士が亡くなったため、私たち兵士5名が埋葬に行った。霊安室に20人くらいの死体が置かれていたので、門番に間違えないようにと注意された。棺に入れて、地下に埋め、その上に墓石を立てた。葬式の後、死者の親戚の家に呼ばれ、お礼としてお茶をいただいた。大変貧しい家であり、ハラ茶 (Har cai)³²⁾を飲んでた。1980年代、ズーンバヤンでは毎年少なくとも20名の兵士が命を落としていた。当時の軍隊は「赤い監獄」と呼ばれていた。このようなモンゴル軍は中国軍とどのようにして戦うのか。もし外国から侵攻があった場合、モンゴル軍が全敗したに違いない。

軍隊では各民族間の生活習慣、宗教信仰などの相違によって、トラブルが起こる。最も激しかったのはハルハ族とカザフ族の対立である。ハルハ人と比べて、カザフ人はマイノリティーであったため、カザフ人の兵士がいじめられることが多かった。

ハルハ人はオイラトのドゥルベト人のことを嫌っていた。ツェデンバルがドゥルベト出身であるため国民はみなドゥルベト人を嫌うようになった。人びとの間に「ドゥルベト人は人間ではない。4本の脚は肉ではない」³³⁾という話が流れていた。国民のツェデンバル嫌いの理由は、ファースト・レディがロシア人であるため、ツェデンバルに見習って、社会主義時代、国や党のリーダーたちが皆、ロシア人の妻を娶り、ロシア人の妻たちが共謀してモンゴル人を圧制したということにある³⁴⁾。

父母が社会的地位の高い人であれば、子どもを遠い辺境に行かせない。ウランバートルの駐屯部隊に残しておく。普通の人々の子どもは地方に行く。

軍隊では暴力、いじめ行為はエスカレートし、兵士の身体傷害や精神傷害につながっていた。兵士の栄養低下、傷害、肺結核などによる病死が増加していた。また、士気弛緩の問題も存在していた。多くの人は祖国に忠誠を誓い、激情と希望に燃えて人民軍に入ってくるが、間もなく何が何だかわからず当惑してしまう。復讐もあった。兵同士が互いに恨みあい、チャンスを狙って自分をいじめた者に報復する。逃亡が大きな問題となり、逃亡兵が増加したため、コメンダントという追捕大隊を特設した。兵士の自殺事件は早い時期から発生していた。全自殺者の正確な数字を把握することは困難であるが、ズーンバヤン駐屯部隊だけで毎年の自殺者は10～20人であった。

1980年代、モンゴルの軍隊は最大で10万人に達していたであろう。万一、中国の攻撃を受けた場合には、ズーンバヤン部隊は1時間抵抗しなければならない。1時間以内に、ソ連の援助部隊が到着するからである。社会主義時代の軍隊の誓詞がリンチ、いじめをもたらした重要な原因である。誓言のなかに祖国、人民に忠実であるべきという内容があるため、いじめられたり、暴力を受けたとしても逃げてはいけない。そうすれば、誓言に背いたことに等しく、法律の制裁を受けなければならない。食事、服装は祖国、人民が提供しているため、祖国、人民に忠実でなければならない。なおかつ、殴られるとき、暴力を受けるときには、反抗してはいけない。しかし、どの時代のいかなる戦争にも、反抗せずに立ったまま攻撃を受ける敵は絶対存在しない。したがって、リンチ、いじめ、殴打は訓練ではなく、時間つぶしのためのものである。

Iさん

国際列車がエレーン（Ereen, 二連）市で10時間も停まるため、2009年1月17日、エレーン市内の蒙古医学クリニックにてモンゴル国からの患者Iさんを訪ねた。1959年生まれの男性で、このクリニックで常に受診しているため、医者とは顔馴染みである。それで、話を聞くことができた。その話は次の通りである。

ホブド・アイマグで1979～1982年までの在役。軍隊内部の異常な現象は、鹿狩りに出たときにも見られる。何らかのトラブル或いは以前の仲たがいでいによって、相手を撃ち殺しておきながら銃が暴発したという。当時、銃の暴発事件が時々発生していた。実際は、いじめや揉みあいなどで故意に発射して殺したが、銃を拭いたりする際に取り扱いの不注意で誤って人に当たったと報告し、家族にもこのように知らせる。暴発事故の多くが新兵同士ではなく、2年か3年の老兵による新兵に対するものであった。もしも新兵が銃に慣れないため、暴発事故を起こすということであれば納得できるが、3年の老兵がこのような事故を起こすことはいかにも不自然に思われる。とうてい理解し難いことであるが、遺族には祖国を守るため献身したと知らされる。

Jさん

2009年1月23日、ウランバートルの第6ビチル（Bichil）団地に在住のJさん（男性）を訪ねた。

1971年生まれ、1990年6月～1992年7月の間、中国内モンゴルの東ウジュムチン（Ujumchin）と隣接するスフバートル・アイマグで兵役に服していた。辺境軍（国境警備隊）通信兵の146部隊である。1年目はウランバートルであり、2年目はスフバートル・アイマグであった。辺境軍は人民軍より人数が少なく、後方勤務と通信隊の2部分からなっている。スフバートル・アイマグにロシア軍もいたが、モンゴル軍とは別々の駐屯地であり、3年間の兵役義務を終えるとロシアに戻っていた。私の現在住んでいる団地のとなりの第3、第4ビチル団地にもロシア軍は駐屯していたが、1988年から撤収しはじめた。

1990年徴兵された兵士は2年間の兵役義務をもつ最後の1期になる。1991年、民主化の波による転換期にあったモンゴルは徴兵を行っていない。1992年から、義務兵の期間は1

年間となった。普通の2年間の兵役を終えて帰郷する人のほかに、辺境軍のなかに家族連れで残り、いつまでも退役せずに辺境の巡回に出る軍人もいる。

1992年7月から同年10月の秋の徴兵がはじまるまでの数箇月間は兵士がいないため、軍官僚のオフィツェルたちが辺境巡回に出ている。辺境軍は3、4人が1組で週に2～3日間パトロールする。アンギー（Anggi、小隊）の駐屯地からザスタブ（Zastab、歩哨所）へ、そして辺境巡回というようなシステムであった。10の歩哨所が1つの小隊になる。食事は良かった。自分が所属していた小隊は食用の馬5頭、牛30頭くらいと羊約2、300匹を所有していた。毎月10トゥグルグの手当てを手渡されていた。しかし、老兵が手当てを奪ったりすることもある。いじめにより、殴られて死亡した事件も発生していた。いじめに耐えられず、銃で自殺した人もいる。暴力を受けたため、中国へ逃げた人がいることも耳にしていた。私が在役していた間、中国からひとりで越境してくるという事件が2度起き、通訳がいたことから、漢族であろうと思う。後に、ふたりとも中国へ送還されたと聞いた。辺境軍の1つのホローには1,000人前後の兵士がいる。リンチやいじめのやり方としては、個別訓練つまりリンチを加えた過剰な訓練を課する、牡牛殺しというのは牛を殺すように、棒や大きなハンマー靴（ロシア製の重い軍靴）などを使って被害者の額の真ん中を激しく殴る、重い銃身で被害者の胸を強くたたき、などがあった。また、新兵に故郷から品物を送ってくるように電話させ、品物を老兵が取る。ひとりの兵士が家族にこれからは品物を送らないでほしい、送っても私の手に入らないと本当のことを漏らした。それで、母親が上官に報告するようにと言ったが、それはだめだ、そんなことをすると私が殺されると怯えたという。もう1つ、老兵が新兵にインスタントスープを持って来いと命じたため、新兵が売店へ買いに出かけようとする、老兵が売店ではなく、実家からたくさん送ってもらえという。それは売店では1つ2つしか買えなく、故郷からは多く送ってくるからである。

以上は10名の軍人に対する調査内容であり、彼らはすべて筆者から訪ねて行ったため、比較的詳細な話ができ、基層部隊生活の各方面にわたる情報が得られた。この10名には中下級士官、普通の兵士と軍隊施設の職員が含まれ、彼らはそれぞれの立場から証言した。

第一に、ひとり（Hさん）を除いて、食事は良かったと言う。しかし、飼犬を殺して食べることや兵士が倉庫から食べ物を盗む事件から、食糧が不足していたことは察知できる。また興味深いことに、一般兵であったHさんの、とりわけ新兵が常に「お腹が空いている状態にある」という証言と対照的に、士官であったFさんは新兵には特別な配慮がされていたという。2005～2006年の間に兵役についたDさんによると、新兵が食事を奪われ、食事抜きにされることは最近まで発生している。

第二に、兵士逃亡の理由。士官等は（Fさん、Gさん）兵士自身の問題であるとする一方、Hさんは基層部隊内部で発生していたさまざまな暴力やいじめの具体的な仕方を語り、さらに暴力が根絶できない理由を分析し、問題が軍官僚の無責任にあると指摘している。軍隊内部の暴力は無秩序、異常であることは言うまでもないが、後述のjさんも語るように、上位の軍官僚にとっては、暴力がむしろ管理上に好都合であ

り、「無秩序」を取り除く手段として存続された。収容されていた犯罪兵成分の割合と犯罪理由からみると、逃亡を図った兵士が全犯罪者の30%を占めることとなり、また下級士官の兵士への暴力が非常に普遍的な現象であったことがわかる。よって、リンチと暴力が大変深刻であったことが窺え、まさにリンチと暴力が兵士脱走の重要な原因の1つであったと考えられる。

第三に、兵士の死亡問題。士官等は暴力による死亡を否定し、犯罪兵の収容所では伐採事故、普通の部隊では伝染病や武器操作の誤りや逃亡途中の脱水などが原因であると説明している。これと反対に、兵士は故意致死や自殺についても明かしている。

第四に、民族間の対立。モンゴルでは、人口の90%以上を占めるモンゴル族のほかに少数民族も存在する。最大の非モンゴル系少数民族はモンゴルの最西部に住んでいるカザフ族であり、彼らはトルコ系カザフ語を話すイスラム教徒である。生活習慣や文化、とりわけ宗教信仰の異なることなどから、モンゴル族とカザフ族のあいだにトラブルが発生し、ときには銃殺のような激しい対立も生じていた。

第五に、軍隊の戦闘力。「当時の軍隊は「赤い監獄」と呼ばれていた。このようなモンゴル軍は中国軍とどのようにして戦うのか。もし外国から侵攻があった場合、モンゴル軍が全敗したに違いない」と兵士のHさんは語る。前文3.2でも触れたように、連合軍事演習「ケレルン73」で浮かびあがった問題はまさにこの証言と一致した情報を示している。これはいままでの軍隊を謳歌してきた多くの「研究」とはまったく異なる軍隊像を描き出してくれている。

物事の捉え方が人によって様々というのは普通である。しかし、上述からは、語り手の軍隊に置かれていたポジションの違いによって、同じ問題に異なる証言が発せられることが分かる。また、各対象の話の重点が一様ではないことこそが、軍隊生活の全体の把握を可能にする。

5.2 兵士への調査

3回の調査では普通の兵士に対する聞き取りも行った。時間の順に整理しておく。

まず、2007年7月25日、モンゴル国の国境の町ザミンウードで調査を行い、3人を対象にインタビューした。

aさん

ウランバートル市、タクシー運転手、40代後半の男性で、下級士官であったかと思われる。

軍隊には体罰やリンチなどがあったことは間違いない。しかもこれは日常茶飯事のような当たり前のことであり、学校のような団体にもあるのではないか。

b さん

ザミンウード駅でタクシーを待っていた 50 代前半の男性。

1978～1981年の3年間軍隊に入っていた。虐待方法については、熱いお茶を頭にかけて、被害者が熱いため声を上げると、「黙れ」と言って、意識を失い、声が出なくなるまでかける。また、食事抜きをして、丸1日何の食べ物も与えずに飢えさせることもあった。

冬服祭と言って、新兵に冬の服を着用させ、すべての武器、日常生活用品を背負わせ、過剰に走らせる。

c さん

ウランバートル市、タクシー運転手。40代の男性。

兵役は1987～1989年の2年間であった。暴力について、新兵を1晩中寝させずに訓練させたり、食事を抜いたりしていた。それから酷いことに、口へ放尿、つまりゴムの管を使って被害者の口へじかに放尿することもあった。

d さん

7月26日、エレーン市内における蒙古市場³⁵⁾で50代と30代後半の男性2人と話した。dさんは(50代)1980～1983年の兵役を終えた。軍隊内部の暴力についてdさんはこう語っている。

軽機関銃の頭で尾骶骨を打ち、被害者が笑うまで止めない。笑うというのはつまり尾骶骨が痛く、我慢できなくなるとき、顔が歪み、表情が笑っているようになることを指す。

e さん

トゥンヘル往きの列車のなかで、隣り合わせた64歳のカザフ族の老婦人eさんに話を伺った。

故郷はホブド・アイマグのホブド・ソム(Hobd som)であり、1954年ホブドを離れナライハ(Nalaih)³⁶⁾に移住した。20歳のときに空軍(飛行隊)に入り、23年間軍隊の食堂で勤めていた。ナライハにモンゴルとソ連空軍の師団が駐屯していた。私は2008年北京オリンピックの射撃で銀メダルを獲得したグンデグマー(Gündegma)の父母と一緒に兵役に服していた。グンデグマーの父母はオフィツェルであり、父親は落下傘が開かなかつたため事故に会い、亡くなった。私には7人の子どもがおり、皆男子であり、末子(2008年現在23歳)のほか皆軍隊に徴兵されていた。末子は8万トゥグルグを支払い、兵役を免れた。昔の時代、皆よく働き頑張っていたものの、今の若者は艱難辛苦を知らず、働かなくなった。当時の軍隊では、兵士が野菜を栽培し、秋にはそれを穴蔵に貯蔵し、自給自足の生活を目指していた。

fさん

ズゥーンバヤンでは元軍隊駐屯地の建物の写真を撮って、その後、近くの有名な仏教寺院ハマルヒード寺を訪れることにした。そのときのタクシーの運転手（50代の男性）は軍隊生活をつぎのように回想している。

私は医者 of 技術を身につけているため国連平和維持部隊に数回派遣されている。1986～1988年の間、兵役に服していた。私が部隊に入っていたとき、タンク兵と砲兵の間にトラブルが起き、各自の武器を持ってあわやというところで、国防庁長官が調停に入り静まった。普通なら異郷へ兵役に行くひとが多かったが、父母がオフィツェルであったため、出身地のズゥーンバヤンで兵役に服すことができた。当時、品物が乏しかったため、軍官らが部隊の羊のなかから数頭を自分のものにして食用にするほか、売ってお金にしていた。もちろん、自分の父母は正直な人なので、こんなことはしていなかった。その証拠に、ひとりの兵士が賄賂としてジャガイモを持ってきたが、父母は受け取らずそのまま帰らせた。

当時、軍官僚のなかに、賄賂や汚職があったことを表しているといえる。

gさん

ウランバートル市、40代後半の男性。

1981～1984年、ズゥーンバヤン206部隊で兵役についた。暴力に堪えかねて、カザフ族の新兵が冬に脱走した。駐屯部隊がズゥーンバヤンにあり、モンゴルと中国の国境が近いため、このカザフ族新兵が中国へ逃亡した。ズゥーンバヤン周辺は人が少なく、一面に広がった平原なので、方角がわかりにくい。道に迷って、凍死したのであろう。仲間たちが捜したが、結局翌年の春に、中国との国境から約45キロ離れたところで死体が見つかった。死者の目がへこんでおり顔では判別できなかったが、衣服で判断できた。逃亡の時期が冬であったため、死体が凍結し、オオカミなどの野獣に食べられなかったのであろう。脱走兵は、モンゴル国内には、身を隠す場所がないので、中国へ逃げるしかなかった。当時、このカザフ族新兵を捜しに行くとき、オボー（Oboo）³⁷⁾のある場所を目当てにしていた。オボーには旅人の捧げた布施の銭があり、その銭を取ってきてタバコを買って吸うためである。その銭を目当てに、人探しの名目で老兵が新兵を行かせる。逃亡兵が多かったため、彼らを捕まえる専門部隊のコメンダントがウランバートル市に設けられていた。カザフ族の兵士はモンゴルの各地の部隊で暴力を受けるが、カザフ族の多いバヤンウルギー・アイマグではモンゴル族の兵士が暴力を受ける。

hさん

ウランバートル駅、50代の男性。

1986～1989年137部隊に入っていた。現在はこの部隊の駐屯地が荒廃している。137部隊の総人数は1,000人前後であった。当時、基層部隊内部に暴力は存在していた。今の人には言っても信じる人がいない。今の若者はトールガ（Tuulag）³⁸⁾である。軍隊のリンチ、い

じめの方法の1つは、ズボンを脱がせて、大変熱いハローンピーシグ (Haluun piishig)³⁹⁾ の上に押し付けて座らせる。もちろんその動作はとても速いので、大きな怪我にはならず、数日経てば治る。このようなリンチ、いじめは多く発生しており、その方法も様々であった。もう1つは、トージュュー・マリア (Toojuu maria) という暴力である。トージュューはデッキブラシを指し、マリアはロシア女性の名前に多く用いられる。トージュューを使って掃除する姿が女性と踊っているようであるがゆえにこの名がつけられた。やり方としては、相手をトージュューの頭に立たせ、加害者が持っていた持ち手の長竿を急に放す。すると、トージュューの頭が転がってしまい、その持ち手の長竿が被害者 (デッキブラシの頭に立っている人) の頭に当たる。

男性はなによりもまずハローンピーシグのことを口にした。恐らく、このことはあまりにも印象的であり、意識のなかに深くのこり、ずっと頭のなかから離れず、軍隊生活に触れると、すぐに浮かんでくるのであろう。言い捨てるように、言い終わったあと憤って立ち去った。

i さん

ウランバートル市, 50代前半の男性。

ズゥーンバヤンの207部隊, 1985～1988年の在役。軍隊の生活といえば、楽しいことはあまりなかった。兵士の下着の縫い目の中にしらみが繁殖していた。基層部隊の兵士特に新兵はタオルで腋下や下半身を拭くと、しらみがタオルについてくる。お風呂に入るのが10日間位に1回程度で、しかも、大勢の人が一斉に入り、時間の制限が厳しいうえ、新兵が先輩の体を擦ってあげるため、まだ自分の体を洗っていないうちに制限時間になってしまう。普通みんなしらみがあったとは言わない。また、食事のとき、おかずのなかに入っているわずかな肉は老兵に取られることもよくあった。

j さん

ウランバートル市, 50代前半の男性。

1958年生まれ, 1978～1981年まで、人民軍ではなくズゥーンバヤンの辺境軍に入っていた。ウブル・ハンガイ出身。今は鉄道関係の仕事をしている。記念やその他の目的で、3年目の老兵が退役前に他人の勲章を借りて、写真を撮っていたことがある。

リンチやいじめが絶えない理由は、自分が新兵のときにいじめられ、虐待され、その歳月を耐え忍び、やっと2年目や3年目になり、自分も威張らなくてはならないとついつい思うところにある。威張れる時期が来たので、それを十分利用して、過去の自分への慰めにしようと思う。また、上司から見ると、兵士間や小隊長のリンチ、いじめが兵士管理に必要な不可欠な方法でもあり、自分の管理にとっては有利であると考えている。このような悪循環や管理体制不備のために、軍隊のリンチやいじめは禁じても根絶できず、自殺する人も後を絶たなかった。

k さん

ウランバートル市ナラントール市場, 40 代後半の男性。

1981～1984 年の間兵役に服していた。軍隊生活はいい経験であった。たくさんのことを学ぶことができた。とくに人間関係については、他のところで経験できないことを体験した。男は軍隊に入ってからこそ成長していく。軍隊生活はさまざまな困苦を乗り越えて強靱な意志を培うことにつながる。食べ物は朝がカーシ (kaashi)⁴⁰⁾、昼は雑穀で、おかずは白菜などの野菜の漬物炒めである。当時、軍隊では野菜を保存するには漬物にすることが多かったのである。晩は指ほどの太さのうどんと黒パンであり、肉が入っていると小隊長や先輩に取られてしまう。年に数回、記念日の祝いの時に限って、ホーショールやボーズ (Booz) が食べられる。軍隊に入った時期の前後による上下関係が厳しく、新兵は一晚中寝ずに、徹夜して老兵の服を洗濯し、アイロンをかけ、靴にワックスをつけて拭き、朝までにすべてをきれいにしておかなければならない。しかし私は新兵に服と足巻きを洗わせることはしなかった。

l さん

ウランバートル市ナラントール市場, 40 代後半の男性。

ドルノゴビ・アイマグ 133 部隊機械化歩兵団に入っていた。1984～1987 年在役。1 年目は司令官室の秘書としてひとり部屋を持って、幸せであったが、ほかの兵士に殴られ、いじめられたため、歩哨に行き 2 年間で過ごした。私は新兵を殴ったりしていなかった。3 年間の軍隊生活を経て、1 人前の男として成長した。1 年目はさまざまな仕事をして人に使われる。2 年目はステータスが少し上がり、3 年目は指示を出し、人を使い、真の男となる。軍隊生活のリンチと暴力といえば、氷上に立たせる、つまり、寒冬の夜、川の氷上に素足で長時間立たせる。凍傷で足のゆびすべてを失った人もいる。厳寒や雪の降る中、薄着で 1 晩中立たせるか素足に軍靴を履かせておく。モンゴルは非常に寒いので、寒さに耐えるには軍靴の中に厚い靴下を履かなければいけない。靴下を履かないことは裸足にほぼ等しい。兵士は皆、退役までの残る日数を数える。しかし、男は飢寒に晒され、殴られ、いじめられといったような多くの苦難を経て成長していくものである。

m さん

ウランバートル市ナラントール市場, 40 代後半の男性。

腕立て伏せと言って厳寒の中、手袋をはめずにセメント上で腕立て伏せをさせる。なかには、凍傷になり指を 6 本失った兵士もいた。あるいは、腕立て伏せをさせるとき、胸の下に針を上向きに立てて置くか蠟燭をともして置く。これは腕の上下運動の幅が大きく制限され、非常に疲れやすく、辛いものになる。

しかし、兵士の経歴がない男は本当の男ではない、軍隊のいじめなどを乗り越えられない、耐えられない軍人はごみ同然である。

モンゴルの軍隊の中に、タンガリグ・ボス (Tangrag bos)⁴¹⁾ 関係が存在している。つまり、軍人の誓いとは関係のない、非人道的リンチ、いじめである。兵士はいかなる個人財産も

持ってはいけない。新兵の故郷から送られてきた品物を老兵が横取りする。手紙も本人に渡さず、老兵が手紙を読む。ベルトで鞭打たれることもあった。

n さん

ウランバートル市ナラントール市場。

1979～1982年のあいだ、ドルノゴビ・アイマグのウランバダラフ・ソム (Ulaan badrah som) の辺境軍に所属していた。食事などは良かった。軍隊でのリンチ、暴力の一つに、「蚊にささせる」というのがある。夏の夜中に河岸に立たせて蚊にささせるのである。「自転車に乗る」というのは被害者の足のゆびの間に棉を挟ませ、それに火をつけるものである。被害者は熱さに我慢できず、自転車をこぐように足を動かす。私は軍隊ではいろいろな悪いことを学んだが、それは生活の知恵であり、生きる力を身につける方法でもあるため、息子も軍隊に行かせた。都市では何も学べない。

o さん

ウランバートル市レストラン内、40代後半の男性。今はタクシー運転手をしている。

1961年生まれ、1982～1985年の間、ホブド・アイマグで兵役に服した。軍隊でのリンチ、暴力の方法はさまざまである。新兵が服を奪われることはよくある。軍隊に入った間もないある朝、目を覚ますと新しい靴がなくなっており、その代わりにボロボロの靴が置かれている。何も言わずにその古い靴を履いた。もし上司に報告すれば、さらなる酷い目に遭うため、だれも何も言わない。

暴力に堪えかねて、兵役を中退するために、自ら体に不治の傷病を負わせる人もいた。たとえば、手術を受けるために、故意に針を呑みこんだり、銃を打つには欠かせない人差し指を切断したりして兵役を中退する人がいた。

昔は成年男子皆が兵役に行ったが、1990年代以後は庶民の子が兵役に行き、官僚や金持ちの子供が行かなくなっている。庶民は金も力もないため、子どもを兵役に行かさざるをえない。

町に出会った人たちへの聞き取り調査は前グループと比べるとばらばらで、零碎であるものの、ひとりひとりの語りが自分の独特な内容を有し、あえて削除せず提示した。彼らの証言から次のような情報が見出せる。

第一に、暴力の存在を認め、肯定的な評価をする。軍官僚が軍隊内部の暴力の存在を忌避することと対照的に、兵士はそれを認め、さらに、暴力やいじめは当たり前のことであり、そのような厳しい試練を乗り越えてこそ成長していくとの見方も示されている。軍隊では飢寒に晒され、殴られ、いじめられ、多くのものを学び、生きる力を身につけるといふ。一般の兵士はこのように堂々と暴力を語ることは、長く辛い歳月を忍び、ようやく「威張れる時期が来たので、それを十分利用して、過去の自分への慰めに」(jさん) することで暴力が繰り返されるものの、加害者と被害者のいずれ

にしても、その責任が彼ら本人にはなく、士官たちにあると考えているからであろう。一方では、とくにhさんの「今の人には言っても信じる人がいない」というときの憤りを覚える表情が筆者の脳裏からなかなか離れない。彼は今になっても、昔の軍隊をありのままに受けとめるには多大な苦痛を感じているようにも見えた。ここでは、暴力を無視、隠蔽せず、それを記述し、その意味を問い、必要なら犠牲者について語るべき、という文化人類学の回避できない課題の困難と重要性を改めて感じさせる（田中雅一 1998: 12-13）。

第二に、軍官僚の賄賂や汚職。fさんと前述のCさんは軍官僚であった親族（父母や兄）が賄賂、汚職などはしていないと主張する。それでは、逆に言えば、ほかの士官にはこのような不名誉な行為をとる人が存在していたことになる。兵士の手当を横領していた不法行為は士官の語りにも言及されている（Dさん、Fさん）。このように、昔から軍隊内部に暴力および賄賂や汚職が存続しつつあった。

民主化以降、軍隊には庶民の子が行き、権力や金銭を持つ家庭の子が行かなくなった。これは、現在のモンゴル国の未だ完全に軌道に乗った状況ではない現実を反映しており、そのうえ、少なくとも軍隊は人々の憧れではないことを物語っている。

第三に、証言の多声性。軍隊に深刻な問題が多く存在していたという内容のほかに、兵士は食事や服装が良かった、新兵の宣誓が素晴らしかったとも証言している。一般の兵士にしても、軍隊生活はさまざまな意味において彼らの重要な経験であり、振り返るとき多くの記憶がよみがえってくる。そこには辛い日々も楽しいときもあるはずである。

5.3 体験者証言のまとめ

このように、3回に渡る調査の結果をまとめると、調査対象の談話において以下の項目を含めた内容について触れられた。

①軍営生活状況：食事、服装、手当て、衛生、訓練、軍紀、素養、健康状態、いじめ、暴行、体罰など。②人間関係：上下関係、将兵関係、兵士間関係。③軍に存在していた様々な問題、特に、軍官僚の腐敗、汚職には次のような内容が多かった。士官特に下級士官が兵士を、老兵が新兵を殴打するなど激しいリンチ・暴行・兵士同士を指示して被害者に暴力を加える・軍営で起こっている兵士の死傷や無法行為を放任し、職責を果たさず、兵士の生活に無関心である・横領、収賄。④無法秩序：法に抵触する「傷害致死」、軍紀違反の一般化、悪質事件の増加、指導部の無対策状態。⑤虐待方法。

聞き取り調査はできるだけ軍官と普通の兵士の両方の意見を聞くように配慮した。軍官僚は、下級士官であっても普通の兵士に比べればやはり特権を持つ階級であったため、真実については話さないか言い尽くさず、一部を隠しているようである。他方で、軍官僚を尋ねることは当時の軍隊の全体概況を把握するには不可欠であり、さらに一般兵士に知られていない情報を聞き出すことも可能である。たとえば、トゥンヘルでは、Bさんのほかに状況を把握している人が調査時にはだれもおらず、実際、Bさんが詳細な情報を提供してくれた。また、ここで過ごした犯罪兵士は自分の経歴を隠すことが一般的な心理であり、そのような普通の兵士を尋ねることは不可能に近かった。

しかしながら、本論文ではなるべく多くの経験者の話を聞き、提示される情報の多声性に注意を払うように努力した。そしてその中には暴力についての語りが多くあった。暴力の発生特徴、研究者自身の暴力に対する認識の不十分および特に異文化の暴力を扱うにはさらなる躊躇を覚える、などの理由によって、暴力はこれまでの文化人類学研究があまりとりあげなかった分野である（田中雅一 1998: 4-5）。本稿においても認められるように、調査対象者のほとんどが、リンチ、いじめが存在していたと証言しているが、ごく一部の例外を除き、自分がいじめを施すほうでも、いじめを受けたほうでもないという点を強調することで共通している。暴力を振るうほうはもちろん良くない事だと考えているため、自分がやったとは普通認めない。いじめを受けていたということは、自分が弱いということ認めるに等しいと受け止められているようであり、自分が酷い目に遭っていたことも明かしたてがらない。暴力、とりわけ軍隊内部の暴力を取り扱う研究の難しさの一斑が窺える。

モンゴル軍隊といえば、たしかにかつては人民軍将兵を含め民衆の識字率の向上に重要な役割を果たし、ことに指導者層幹部と青年たちには文化知識や法律意識を与える「学校」とも言えるほどであった。しかし、そのような軍隊はあらゆる悪事が学べるところと変し、その冷淡非情な空気の中かで、謹厳実直型の人物を育てることができるとは考え難い。

とくに、士官から生じた「官僚的やり方」、「職権をもって私利をはかる」といった不正風潮の蔓延がモンゴル人民軍の歴史的威信や権威を地に落とし、国民の受忍限度を越える事態となっていたことは、社会主義放棄後の世論の痛烈な批判の中にも反映されている。こうした不正風潮の蔓延を阻止しないかぎり、全軍を指揮する立場にあるモンゴル人民革命党の威信はもはや維持できなくなったといえよう。当時のモンゴル軍の戦闘力は「前古未曾有」の低下となり、もし外国から侵攻があったとすれ

ば、文字どおりモンゴル軍には全滅の道以外になかったと第一線部隊体験者は証言している。

上述の考察は退役軍人の証言に基づき、軍隊の実態を把握しようと試みた。しかし、下記の筆者が調査を行っているなかで経験したことも、モンゴル軍隊の状況を捉えるには重要な参考材料になろう。

5.4 調査中の関連する出来事

ここまで提示した事例はいずれも兵士であった人たちからの聞き取りであるが、兵士に対して一般の人々がどのような認識をもっているかも重要であろう。ここでは、文末に示した写真の解説も加えて、調査中に会った人々や関係ある出来事を記しておくと同時に分析を加える。

5.4.1 退役軍人の刺青

ズーンバヤン行きの列車のなかで、横に隣り合わせた40代前半の男性が、左手に刺青をしていた。1990年に2年間の兵役義務を終え、それを記念するため、入れたという。手の甲のほうは自分の名前の頭文字Cであり、それから月、太陽、火と1990という模様と文字になる（写真28）。

5.4.2 ウランバートルからズーンバヤンまで

ウランバートルとズーンバヤンの間の列車は往復ともに夜行列車である。偶然にも、車内通路を挟んだ私たちの向かいの座席には退役軍官たちがいた。同行のモンゴル国の人によると（彼は兵役に服していたためよく知っている）、おそらくホランダ（Huranda、大佐）か副ホランダ（中佐）たちだという。少し離れた座席にも彼らの同行者がいて、計16人前後であったが、そのなかの8人の席が私たちのすぐ向かいであった。彼らは50代から60代後半の模様で、見たところ軍隊における肩書きの高低順に座っているようであり、階級の名称で呼び合っていた。モンゴルの列車のなかは飲酒禁止であるが、彼らは最初、係員がいない隙を見て、ひそかに酒を飲んでいて、係員が切符検査のとき酒気に気づき、彼らの切符を没収し、後で罰金をすると告げた。それでも飲酒を止めず、夜11時以後は飲み放題で、1晩中大騒ぎしていた。軍官たちがあまりにも騒がしいため、周りの乗客の非難を浴びたが、「昔、お前らが幸せに暮らしていたとき、俺たちがお前らのために祖国を守り、お前らの屎尿まですべてを守っていたんだ」、「公共の場所だから、行為を自由にするのが当たり前。地方の列車

はこんなもんだ」という。深夜4時ごろ、突然、女性の大声が響いた。軍官に酒を勧められるとき体を触られたという。女性はそもそも離れた席にいたが、いつの間にか軍官たちの席に近寄ってきて、酒を一緒に飲んでいて、女性は40代後半の模様に、商売をしているらしい。揉みあい口げんかにとどまらず、殴り合いになり、ごたごたが30分くらい続いた。互いにたいへん粗暴でぞんざいな言葉を遣い、激しくやり合った。軍官たちは人数が多く、周りの乗客は恐れているのか、だれひとりトラブルに介入しそれを阻止しようとしなかった。

少し落ち着いて、一件着落だと思っていると、もう少しで終点に着くという5時前、また急に女性の大声が聞こえてきた。これもやはり軍官たちとの喧嘩であった。この50代の女性は私たちの斜め向かいで、軍官たちと背中合わせの座席であったが、何らかのトラブルが起こり、彼らを罵倒していた。「昔のようにあんたたちの威張る時期はもう終わった。今、あんたたちはホジャー（Hojaa）の犬だ!」とたいへん激しい言葉を遣った。このホジャーとはモンゴルの人々が中国人に対する蔑称であり、「華僑」が語源であろうかとされる。列車を降りるときこの女性は、軍官たちとの喧嘩でイヤリングを落とすと気付いたが、捜しても見つからなかった。

ズーンバヤンに着いてから知ったことであるが、ズーンバヤンは地方の小さな町なので、人々は互いのことをよく知っている。地元の人によると、これらの旧軍官たちは1990年頃軍隊が解散したため、皆、元の地位と仕事を失い、今はズーンバヤンにある中国の石油会社の警備員として働いている。軍官僚たちが地位や名誉を失った寂しさと失意からくる反動も手伝って引き起こされたであろうが、この2つの出来事から、軍官階級の昔の不遜ぶりと素養の低さ、そして国民の彼らに対する軽蔑の眼差しが窺える。たまたま偶然にこのような軍官たちと出遭ったかもしれないし、皆が皆このような人ばかりではないことは確かであると思うが、昔の軍隊とくに軍官僚階層の一側面を窺わせる出来事でもあったと感じられた。

ズーンバヤンは中国との国境に近いので、冷戦期には重要な駐屯地であり、ここから退役した軍人はここがモンゴル最大の軍隊駐屯地であったという。しかし、現在ではかつての軍隊駐屯地におけるほとんどすべての建物が廃墟となっている。ここは人口が少なく、地方の小さな町であるため、これらの建物は使い道のないまま放置されている。大量な廃屋のほかに、地平線の向こうまで続く平原に残された戦車、大砲の薬莖および大砲の薬莖が杭として作られた囲いは、ここが昔の重要な軍隊駐屯地であった姿を偲ばせる（写真29～34）。残念なことに、ズーンバヤンにはもはや退役軍人がほとんど残っていないため、聞き取りはできなかった。

5.4.3 ナライヒーン・ゴルドク

9月2日朝、ナライハを訪れた。ウランバートル市から東へ車で約30分程度走ると道路の右手に軍用半地下飛行場（写真35）が見えてくる。半地下にしたのは空襲を防ぐためである。もう少し行くとゾーンモドといわれる場所であり、その向かいの道の左手がテレルジ山（Terelji）である。ゾーンモドの向こう側のテレルジ山の麓に旧ソ連軍官の宿舎があり、当時ナライヒーン・ゴルドク（Nalaxiin gordog, 写真36, 37）⁴²⁾と呼ばれていた。町または団地を意味するゴルドクと呼ばれていたことから、当時は相当な数のロシア人が住んでいたことが分かる。その規模は現在なお残っている大きな集落のような建物群からも推測できる。このゾーンモドというのは、不思議なことに、周りに平地が広がるなかでここにだけ少しばかりの樹木が生えているため、100本の木との意味でゾーンモドと呼ばれ（写真38）、歴史上ガルダン⁴³⁾が敗戦したところだとモンゴル国の人がいう。ゾーンモドで敗戦したガルダンがテレルジ山に逃げたという。したがって、このゾーンモドはトゥブ・アイマグの県庁所在地のゾーンモド市とは異なる場所である。

5.4.4 民主化後の兵役につく状況

2009年1月17日、エレーンからウランバートルへ向かう列車のなか、向かいの席には3人家族が座っていた。内モンゴルのシリンホトで長女（10歳）がコンサートに出演した帰りである。男性は30代前半の若い人で、軍隊に入った経験はないという。義務兵役に服していない理由を尋ねると、幼い子どもを持つからだという。その後、話しているうちに彼の父母がともにオフィツェルであったことが分かった。聞き取り調査のなかにもあったように、民主化後、権力や金銭など様々な理由や手段で兵役を免れることが多かった。

このように、筆者が身をもって見聞したことから、昔と今の軍隊実態の一端が推測できよう。また、軍隊経験者（Dさん）の語りのなかにも出てくるように、モンゴル軍隊内部の暴力は1960～1980年代にとどまらず、今日まで存続している。まさに今現在も身の回りで発生していることであるため、民主化以後に注目されはじめ、マスコミに取り上げられることもある。軍隊内部の暴力の公表は社会主義時代のモンゴルではとうてい想像のつかないことであったが、民主化以降これが可能となった。テレビ局が2007年に行ったインタビューの映像がすでに放送されている。その他、インターネットにおいても関連記事が見られる。以下に2つの例をあげておく。

記事1：タイトル「人間の地獄を身をもって経験したいならば軍隊へ」

「祖国が呼んでいる。行きなさい」と言い、息子を送り出す母親の心。

若い人が軍隊に入って建築、通信、運転などの技術を身につけ、成長していくことを多く耳にしたことであろう。しかし、徴兵に当たって、現在の軍官は今の若者たちの知識素養が低く、体質が良くないとマスコミに漏らしている。だが特に、最近は上下関係によるいじめ、老兵による暴力を受けたことによって心身の障害にいたるケースが増えている。軍隊で刑事事件が多発しているため、親は金銭を払い、なるべく子どもを兵役にやらないようにしている。しかし、経済的に余裕がない親はやむをえず、せめて悪いものから護られるようにとラマ僧に読経してもらってから息子を軍隊に送る、ということが、一種の慣習として定着している。このために、現在では「庶民の子どもだけが行く兵役義務」と言われるようになった。

「基本人権委員会」は、国防軍将軍司令部に所属するウランバートル部隊の6つの小隊と、国境警備隊所属のドルノゴビ、オブス両アイマク辺境軍第5小隊とを対象に将兵・兵士関係について調査を行った。その結果、調査に協力した829人のうち、79.4%の軍曹、55.9%のオフィツェル、53.6%の准尉、38.7%の兵士が部隊の人間関係において規定違反の行動が存在していると回答した。辺境軍の522人のうち、44.8%の准尉、23%のオフィツェル、10.2%の軍曹、22%の兵士が軍隊の人間関係に規定違反の行動が存在していると回答した。軍隊の32.3%が殴打などの暴力、32.3%が脅し、圧力、36.6%が金銭や物質の要求が存在し、辺境軍の17.6%が暴力、17.6%が脅し、6.3%が金銭や物質の要求が存在するとそれぞれ答えた。

2006年10月の状況では、上官に殴られた12名の兵士が軍隊の中央病院で治療を受けた。これらの事例は軍隊におけるリンチ、暴力、恐喝が存在していることを表している。しかし、このような出来事は水面下で発生しており、表面には出ないため、軍の上層指導部は把握していない。筆者の退役軍人の知人は軍隊に在役中、胸を銃の頭で強くたたかれ、ラジオ通信の電気に感電させられ、腕立て伏せを強要され、蹴られ、拳で殴られるなどの辛い経験をしたため、兵役に行くのは良くないと若い人たちに警告している。暴力を上官に報告すれば、周囲に嫌われ、さらに身の安全の保障もなくなり、危険にさらされるようになるため、誰もこれを隠して言わない。

このような将兵・兵士の異常な関係は刑事事件につながりかねない。2005年5月、辺境軍0245部隊の山岳歩哨所で、兵士3人が歩哨の副指揮者と歩哨長を銃殺して、国境を越えてロシアへ逃げた。原因は士官による兵士への暴力である。

休暇を取って実家から部隊に戻ってきた兵士を探し出し、その物品を没収する。

013, 029, 120, 326 部隊では兵士に品物を要求していた。032 部隊の士官が休暇の許可書をひそかに売っていたことも調査で明らかになった。オフィツェルが私用や友人の頼みなどの手伝いを兵士に強要していた。

以上のような不名誉なことが起こっているため、軍隊の名声は地に落ち、若い人たちの間では「人間の地獄を、身をもって経験したい人が軍隊に行く」と言われている（ニュース・ゴーパー・モンゴル, <http://news.gogo.mn/r/27855>, 2009 年 1 月 28 日アクセス）。

記事 2：タイトル「国防軍 032 部隊の兵士が肺炎にかかった」

2008 年 5 月 21 日、『モンゴル消息』（Монголын мэдээ）紙の記事。032 部隊では、風の強い晩、風呂から上がった新兵 127 人が体を拭かずに服を着させられ、すぐに戸外で走らせられた。それがゆえに、風邪を引き、当日の晩、咽が痛み、高熱を出し、起きられなくなった兵士が出た。しかし、責任者はこれを放置し、診察に行かせなかった。事態が拡大し、100 人の兵士に様々な症状が現れた。さらにその内、13 人が肺炎にかかり、症状が重くなり入院した。この不祥事がきっかけになり、国防軍將軍司令部は 032 部隊を調査した。その結果、暴行容疑で大尉ひとりと副准尉ひとりが警察に書類送検された。今回の事件の詳しい事情について、関係するオフィツェルと病院の医師に取材を求めたが応じてくれなかった。また、入院している兵士との面会も断られた。このように、軍隊における異常な出来事は組織的に隠されている。このほかにも、表沙汰にされていない事件は数千件のほろう（モンゴル新聞出版概況, <http://Sonin.mn> Монголын сонин хэвлэлийн тойм, 2009 年 6 月 17 日アクセス）。

6 軍拡のもたらした社会的影響

軍拡がモンゴル社会にもたらした影響について、聞き取り調査でインタビューに応じてくれた士官、ウランバートルで服役していた退役軍人や後方勤務をしていた人などの多くがそのプラス面を強調したが、地方で兵役を終えた一般兵士は沈黙するか避けて通る場面が多かった。なかには、稀に、そのマイナス面について言及している人もいる。これも理解できることであると思う。彼らが自分の歩んできた道、経験したこと、過去の「輝かしき時代」にはプライドを持っているに違いない。あるいは、過去を振り返るとき、見直すべきと知りながらもそれを真正面から直視することができないかもしれない。以下は、主として文献資料に基づきながら、聞き取り調査も参考にし、この問題について、モンゴルの人々がどう見ているかを扱っていく。

6.1 社会への貢献——教育・専門技術人材の養成・演芸・建築

軍隊は基地を拠点としつつも、きわめて流動的な組織であるゆえに、周辺地域社会に及ぼす影響も非常に大きい。

①教育

モンゴルは国土が広く、人口が希薄に分散しており、多くの人が遊牧移動していた。そのため教師や教材の不足といった状況にあった。そのような20世紀前半においては、軍隊は人々の集まる場所であり、軍隊に入ってきた兵士に教育を施すことは遊牧民を集めて教育するより、もっと効果が上がる良い方法であった。独立後の長期にわたって軍隊は教育の主要な機構となり、モンゴル人民革命軍のなかに設置されている政治指導機構である政治局は、「軍と人民の教育処」と称される（Паламдорж, Ш. 2001: 304）ほどであった。疑いなく、当時の軍隊は知識と文明を広げる中心となっていた。

文字の読み書きがまったくできず、世の中がどのようなになっているかを全然知らない若者たちは、軍隊で教育を受け、世界の情勢を知り、文明の入り口に導かれたのである。これはいわば彼らの見聞を広げたということである。軍隊で教育を受け、読み書きができるようになった兵士たちが退役して社会の各分野で活躍すること自体は、国民の素養向上に大きく寄与するのである。なかには、学校で教鞭を取る人も現れた。また、党と政府は国民全体の教養を高めるため、軍営を知識と文明を広め国民の教育素養を向上させる重要な場所とすることを、退役兵も含めた全軍に対して呼びかけた。新しい知識や習慣を身につけた軍人は革命の事業を宣伝する良い教材となり、軍隊の地位を高めるにあたり積極的な役割を果たした。政府のキリル文字による読み書きの大衆化活動、さらに軍隊将兵の識字普及運動もひとつの動力となり、近代的初等教育が強化され、1960年代になると、モンゴルでは教育体制が整い、ほぼ全国民が読み書きできるようになった。1980年代には、軍隊で服役している青年たちの83.1%が大学または中高等学校教育を受けた（Сайнаа, Э. Амд Туяа, О. 1981: 22）。

軍隊内部で実施する教育のほかに、軍隊が青少年の労働・国防知識の教育にも携わった。青少年の年齢によって12～14歳、15～16歳、17～18歳と分け、それぞれに多少異なった教育を施していた。教育の内容は、17～18歳を例として見ると、①モンゴル人民共和国の体操、スポーツについての学習；②社会と個人の衛生をどう守るか；③有毒気体の少量使用の知識を身につけるなどである（Паламдорж, Ш.

2001: 262)。また、地方への訪問、公演、小規模な理論学習会の開催、講演などを数多く行った。このように、軍隊は国民の文明開化、識字率の向上に大きく寄与した。

②演芸

軍隊と民衆とのつながりを深める1つの重要な方法は演芸である。軍隊はモンゴル演芸の伝統を受け継ぎ、これと同時に、西洋の音楽と演劇も学び、全国範囲で県劇場を建設し、数多くの演芸キャンペーンを実施した。軍隊の歌舞団は軍隊に限らず、全国各地のアイマグ、ソムに巡回公演を行っていた。また、軍隊は吹奏楽を創出し、モンゴルにおける吹奏楽の基礎を築いた。当初の目的が何であろうと、これらがモンゴルの演芸、芸術の発展に大いに貢献したことは疑いない。

③専門技術人材の養成

兵士には読み書き教育のほかに、総合素質教育も施していたため、兵士たちは何らか1つの技術を身につけていた。

軍人は服役している期間中に、退役後に地方で果たす役割、担う役目などを考慮した教育を施された。軍隊で各種の技術を身につけた兵士たちは帰郷後、紡織、鍛冶、皮革、自動車の運転や修理、製靴、医療、馬具製造、獣医、森林管理、電気通信、財政会計、経済、金融そして行政機関や役所というようなさまざまな分野で貢献した。軍人は自らの志願によって、希望する技術のコースで勉強する事ができ、ふるさとに帰れば大歓迎され、重要なポストに採用されて活躍した。とりわけ軍隊は、国の行政機関の役人を育てる人材準備の重要な基地になっていたということが言える。

ここで、とくに指摘しておきたいことは、モンゴルが1950年代から農業開発を重んずるようになったことである。しかし、農業の技術人材が大変不足しており、その人材の育成を軍隊に任せていた。兵士の学習科目に農業関係の内容を取り入れ、農業コースを開いたりしていた。また、兵士と下級士官には毎年一定日数の農業実習をする指示が出されていた。軍隊は野菜などを自ら栽培し、自給自足の生活を目指していた。

④建築

建築面においても、軍隊の挙げた成果は目覚ましいものであった。1960年8月、人民軍事務総部所属の建設局が設置された。1966年から、ソ連や他の社会主義国家の援助で行う建築はすべて軍隊が実施するようになった。したがって、建築兵の人数

を増やし、建築材料や建築技術の開発においてもさまざまな措置を講じた。軍隊用にかぎらず、全国各地の工業用や民間用の建築にも建築兵が重要な役割を果たした。建築兵が設けられていた1936年から1996年までの間、83億トゥグルグ強に相当する建築と修繕を成し遂げ、30種類におよぶ技術分野の建築技術者およそ4万人が軍隊で育てられた（Галын бурхад сонины 1996. 11. 25）。

もう1つは民間航空事業の創立と発展である。モンゴルの民間航空事業は軍隊の航空事業の基礎の上に創設され、発展してきた。1946年、モンゴルの民用航空局が設立された。1950年代、軍の第5航空師団は赤旗星第5飛行隊となり、完全に民用航空事業に携わるようになった。このようにして、モンゴルの民用航空事業がはじまったのである。これ以外には、自然災害時の緊急出動や経済困難のときの救済なども高く評価すべきであろう。

6.2 マイナスの影響

軍隊を養うにはまずその衣食住の供給という問題に直面する事になる。軍隊の拡大にしたがい、兵士住居の需要量が増加することはいうまでもない。そのために、膨大な財力、物資と人力が使われた。その一例を挙げると、軍拡のため、建築用と燃料用としての木材消費量が大きく増えた。1980年代、毎年平均100,000 m³の燃料用、10,000 m³の建築用の木材が提供されていた（Паламдорж, Ш. 2001: 189）。木材の伐採作業には犯罪兵も当てられていた。1970年代中期から大量の軍官住居と兵士寮が次々に建てられたが、調査でも明らかになっているように、民主化以降、軍隊の縮減とソ連軍の撤退のため、そのなかの多くは使い道が見つからず、放置されたままになっている。

モンゴルの軍拡に一体どれくらいの費用を費やしたか、その確実なデータは、今のところでは不明と言わざるを得ない。というのは公式文書が、軍事文書館の定める40年間非公開とされる規定によって見る事ができないからである。だが、当時の兵士生活についての規定および講じた措置によって、軍隊を維持するためにかかっていた費用の一端を窺い知る事ができる。1960年の規定では、兵士の食事に1等と2等の肉が6割以上を占めること、ひとりあたりに毎日肉500g、パン750g、バター30g、砂糖35g、ジャガイモ400g、白菜などの野菜200gを与えることとなっている。また、タバコを吸う人にはタバコも提供する。実際に消費された家畜のデータを見ると、1968年に軍隊が消費した家畜は計101,767頭であり、このほか、鹿2,500頭、カモシカ27,000頭を消費した（МУБХЭШХ 1996: 472）。また、長期にわたってモンゴ

ルに駐留した、家族を含め10万人強とされるソ連軍の日常生活が環境に与えた影響も非常に大きかったと言えよう。実際、このソ連軍の大規模な駐留に関しては、1980年代末頃ゴルバチョフが撤退を決めるまでの長い間懸念が持たれていた。さらに、両軍の大規模な軍事演習には膨大な費用がかかったことも事実である。

なお、第5節で取り扱った経験者の証言によって分かるように、軍拡政策の推進に伴って、様々な軍人集団がつくられ各地に配置されたが、部隊建設そのものの過程に深刻な問題が生じていた。飢寒状態など物資施設条件の不足のほか、多くの第一線部隊においては上下関係の悪化や官僚主義的腐敗が一般化し、制度の不備に伴う無法状態及び法に抵触するリンチ、暴力などが多発していた。そのうえ、将兵の道德素養も低下しつつあった。これらの要素が軍紀の崩壊状態を生み出し、当時の軍営部隊は無法的思想が生まれる一つの温床となり、そしてこれが地域社会にも浸透していた。周辺地域、たとえば中国や日本と異なり、モンゴルは人口が少ないため、兵士は社会のすべての階層から構成されており、人口当たりにも占める比例が高い。それゆえ、軍隊の国民や地域社会に及ぼす影響も大きかった。軍隊で起きていたさまざまな不法な出来事は地域社会に対しても良からぬ影響を広くもたらしたに違いない。

1960～1980年代の複雑な国際情勢が国家としてのモンゴルに抑圧的な社会環境をもたらし、そのことがモンゴルの軍隊と地域社会の相互影響に大きくかかわったと考えられる。

7 おわりに

今や、世界とアジアの政治情勢も軍事体制も大きく変わりつつある。このような時代に、20世紀を振りかえって見ると、モンゴルの軍隊建設にいったいどのような意味があったのかという疑問が自ずと浮かんでくる。モンゴル国の人々にとって果たしてそれは正しい選択であったのか、という問題へのとらえ方において、転換と新しい視点が求められる時期にわれわれは在るといえるであろう。

民衆の間ではモンゴル・ソ連の関係を批判的に見る立場が民主化以前からずっと存在していた。それは民衆の間に流れるジョークにも現れている。「ウランバートル鉄道」の運行について、列車がモスクワから到着するときには「ウーフ、トス、ウーフ、トス（脂、油、脂、油）！」という音が鳴り、出発の際には「ハナラー、ツァドラー、ハナラー、ツァドラー（充分だ、満足だ、充分だ、満足だ）」と鳴る、という小咄がある（小長谷2007: 84）。本稿の調査にもでてきたように、民衆のツェデンバル反発

の一要因はそのファースト・レディがロシア人であることによるものとされ、国家指導層にもこのような感情を抱く人が存在していた（小長谷 2007: 189; 286; 289-290）。

すなわち、ソ連のモンゴルに対する援助を大変有り難く受け取っている一方で、反対の見方も示されていた。モンゴルの国家指導者層のなかでも、ソ連の影響を排除したいという主張が場合によっては非常に強烈であった。とくに、ソ連の「顧問専門家」たちに対する反発が最も強かった（ロッサビ、モリス 2007: 68）。

確かに、ソ連はモンゴルに対し、1971～1990年までの期間に100億ルーブル近い援助借款を与え、これが経済、社会発展の重要な基盤の整備に一役を買ってきた。しかし、軍隊問題、特に軍拡について聞き取り調査を受けてくれた人びとのなかには「モンゴル国には軍隊が本当に必要であったのか」、「モンゴル人にとって長引いた軍備とは何であったのか」と問いかける人もいる。現地調査では、軍隊における不法状態の原因について、ほとんどの人が答えようとしなかったが、その答案を考えている人がいることは疑いない。調査対象のひとりの退役軍人は、世界で軍隊を持たない国が存在しているように、モンゴルも国境の歩哨に立つのに必要な程度の軍隊だけを維持することで充分であると語る。中国とソ連・ロシアという両大国の狭間に生きることが変えられないが、それを賢明に利用すべきである。モンゴルの軍力は中国とソ連・ロシアのいずれにも到底およばないものであり、一旦戦争が起きればあっという間に敗れてしまう。それゆえに、軍隊にかかる費用を国家の経済・文化建設に使用したほうが正しい使い道であるという。

本稿の目的は、1960～1980年代における軍隊生活の実態解明に努めることである。これは軍事評論でも軍事史を相手にしようとするものでもなく、ソ連に続いて世界史上2番目の社会主義国家となったモンゴル人民共和国における強権的政治と民衆の受難と歴史との3者の関係を追究し、従来の公式文献には現れなかった「下層民衆からの社会像」へのアプローチを試みるものである。20世紀のモンゴル近代化を基層部隊兵士の生活実態の側面から記録しておき、さらなる研究の参考資料になれば幸いと願うばかりである。

また、現地調査についても簡潔に触れておきたい。集団として調査対象に選んだのは、中国との国境附近の大きな軍隊駐屯地であったドルノゴビ・アイマグのズウンバヤンと犯罪兵の収容所であったセレンゲ・アイマグのトゥンヘル、長い歴史を持ち、史上多くの戦功を挙げ、今なお運営されているトゥブ・アイマグのゾーンモド市附近の016部隊、この3つであった。個人を対象にした調査では、主として人口が集中している最大都市ウランバートルを選んだ。ウランバートルでは、とにかくタクシー

の運転手と市場の物売りに退役軍人が多かったことが大変印象的である。聞き取りに応じてくれた25名の対象者の談話内容には重複した部分が少なからずあるため、本稿では重要であると思われる内容を除き、話を逐字書き表すのではなく、重複する内容はなるべく省略するようにした。なお、このテーマ自身の特性によって、聞き取り調査はある程度の困難が存在していた。すなわち、中、上級軍官は下級士官や兵士の生活から遊離していたこと、または不法な状態をいくらか察知していたにもかかわらず放任したという自己責任のため、基層部隊のなかに起きていた不良な出来事に触れないか表面だけに触れてより深い真相は避けるといったことである。下級士官と兵士らは、被害者または加害者いずれかの当事者である場合、プライドやメンツによって、真実を語らないか一部だけを語り、あるいは隠したり、録音を気にしたりするというケースがあった。このときは、メモを取るしかなかった。そのために、聞き漏れや書きもれがあった可能性は否めない。また、被調査者の意見を尊重し、登場する人物はいずれも匿名を用いることにした。

謝 辞

このような難しい作業は地元の人びとの協力なしでは順調に進むことはできません。なにより、まずモンゴル国立大学社会科学学院歴史学部教師 D. スフバートル博士と同学院社会学部教師 T. プレンジャルガル博士の大きな恩恵を受けました。彼らご夫婦から惜しめない知的支援とその他の援助を大いにいただき、深謝いたします。本稿の執筆に当たり、国立民族学博物館教授小長谷有紀先生から様々な面に及ぶ貴重なご指導をいただきました。衷心より深い謝意を表します。また、心暖かく迎え入れてくださったトゥンヘルネルグイ氏、ズーンバヤンのオトゴンバートル氏その他のインタビューに応じてくださった皆様に心から深い感謝の意を申し上げます。なお、今回の論文には掲載できませんでしたが、聞き取り調査のテープおこし（モンゴル文）の作業に当たって、科学研究費補助金（基盤 A）「近代世界におけるジェノサイド的現象に関する歴史学的研究」（代表者：石田勇治）の援助を受けました。記して感謝いたします。

インタビューに応じてくださった方がたをはじめ、本稿の作成にいたるまでのさまざまな場面で協力してくださったすべての方がたに、改めて厚くお礼申し上げます。

注

- 1) 軍隊を対象とする社会学的研究は多々あり、ここでは東アジアにおける米軍に関する主要な研究を2例あげておきたい。『沖縄の占領と日本の復興』（中野・波平・屋嘉比・季 2006）は沖縄駐在米軍を歴史学・社会学・政治学などの視角から「沖縄の占領」と「日本の復興」の社会的実態の重層性を考察した。『国連軍の犯罪—民衆・女性から見た朝鮮戦争』（藤目

- 2000) は朝鮮戦争のさなかに戦場を視察・調査した3つの国際 NGO の報告書を集成したものであり、このような資料の公開によって、とりわけ現在もお東アジアに駐在している米軍について考え直されている。
- 2) ほかにほまた、米兵と結婚した外国人女性の置かれている立場、一般社会のジェンダー規範や軍人妻への差別を扱った研究(西宮 2004)、日本の自衛隊を旧日本軍、米軍そして一般社会の男性との対比で、自衛隊がどのようなアイデンティティを形成しているかを検討する試みがある(サビーネ、フリーシュトゥック 2004)。
 - 3) 遊牧領域の面積は、そこで養うことのできる家畜頭数と、ほぼ比例的関係にある。世界的に知られた生態学者今西錦司の現地調査によると、モンゴル高原では、たとえばヒツジ一頭の行動圏はおよそ半径6キロであるという(今西 1993: 235)。多くの家畜に良い草を提供するには、広い面積の領域が必要である。
 - 4) 「ハイサンとオタイ—ボグド・ハーン政権下における南モンゴル人」(中見 1976) では、いままでなかった視点から、ハイサンとオタイに代表されるモンゴル独立政権—ボグド・ハーン政府内の南モンゴル人が担う役割とその意義、それに彼らの運命を再検討することによって、20世紀モンゴル史の構成の一要因たる国際関係の力の原理が強く働いていたことを指摘し、当時の南モンゴルのかかえていた矛盾を明らかにした。また、氏の「文書史料にみえるトクトホの“実像”」(中見 1995) などの研究もモンゴル近現代史の再構成に大きな影響を与えた。
 - 5) 氏の早い時期の研究「ダムバドルジ政権の内モンゴル革命援助」(二木 1984) に続いて、「リンチノのモンゴル革命」(二木 1995)、「モンゴル人民党第一回大会とプリアート人革命家たち」(二木 1998) などが挙げられよう。
 - 6) ラティモアは、ほかの数箇所においてもモンゴル人の対中国人と対ロシア人の感情の違いを記述している(ラティモア 1966: 218-222, 278-287 など)。また、モンゴルが独立を取得、維持するため、ロシア(ソ連)からの援助を求めた理由の1つとして、やはりモンゴル人のロシア人と中国人に対する感情があげられている(Ts. バトバヤル 2002: 24)。
 - 7) 1979年、モンゴル軍事総合学院の在学人数は867人で、1982年は1,121人であった(МУБХЭШХ 1996: 439)。
 - 8) 赤色は社会主義を意味し、保険箱は中国・ソ連両方からの援助を受けているため十分に保障されるとの意味である。
 - 9) 独立後、1924年に初めての憲法が作られ、これは1940年、1960年と1992年にそれぞれ改正された。1924年憲法にはモンゴル人民革命軍建設の主旨が明記されている。1940年憲法第10章第103項では「兵役に服すことは立法で定められており、モンゴル人民革命軍の兵役に服すことは、モンゴル人民共和国国民の崇高な義務である」と規定している。1960年の憲法第8章第89項第8条では「社会主義祖国を社会主義の敵から守り、モンゴル人民共和国の人民軍の兵役に服すことは、モンゴル人民共和国国民の崇高な義務である」と規定した。1992年モンゴル国憲法第2章「人権・自由」第17項第1条の4には「祖国を守り、法律に従って兵役に服す」と規定している。さらに、1963年の「全国民の兵役に服す義務について」のなかに、総人口に対する軍事教導員人数の比率を定める規定を設けた。
 - 10) オロト(орот(pot)), ロシア語 pot からの借用語。調査で退役軍人に聞いたところでは、普通、1つのオロトには70~80名程度の兵士が所属している。オロトの下位に分隊(20~30名の兵士から成る)があり、分隊の下にはタソグ(室、10~15名の兵士から成る)がある。軍隊の組織は上位から順次にアルミー(軍)、ディヴィズ(師)、ホロー(団連)、アンギー(隊)、オロト(70~80人)、分隊(20~30人)、タソグ(10人以上)というような構成である。
 - 11) 直訳すると黒い監獄との意味。普通の監獄のことである。
 - 12) ロシア語 склад からの借用語。倉庫を指している。
 - 13) 中国との国境に隣接するドルノゴビ・アイマグの南に位置する。冷戦期、対中国の最大の軍隊駐屯地であったと退役軍人がいう。
 - 14) ドルノド・アイマグ県庁所在地のチョイバルサン市の西北に位置し、ロシアとの国境に近い。社会主義時代のモンゴルの重要な軍隊駐屯地であった。
 - 15) ウランバートル市バヤンズウレフ区に位置する拘置所。
 - 16) 教育を受けている者、秩序を与えられている者という意味。
 - 17) ロシア語の коридор からの借用語であり、廊下を指す。
 - 18) ゴージュル(goojuur) は元来漏斗、蛇口を指すが、モンゴルの軍隊では新兵がいつも1

- 番良くない食べ物を食べて、お腹を壊し、トイレが近くなることから、新兵はゴージュルと呼ばれるという。
- 19) この2つのアイマグはモンゴルの東西の両端に位置しており、遠く離れている。
 - 20) 聞き取り対象の退役軍人のひとりによると、これらのアイマグは各地からの移民が多く、血が混ざるため、性格が激しい。小範囲内での婚姻関係が長く続くと、人の性格はおとなしく、意気地がなくなるという。
 - 21) オネーは年のという意味で、イルガは違い、相違を指す。
 - 22) 喜びの書、つまり高く評価する証明書を言う。
 - 23) 小麦粉を練った皮でひき肉を包んで油で揚げた料理である。モンゴル版の揚げ餃子とも言える。
 - 24) トゥップ・アイマグ北部に位置し、トゥンヘル東にある。
 - 25) デグリンム (deglem) は軍隊のなかのいじめを意味し、ほかに、デグ (deg), デグレリト (deglet) などとも言う。deglem, deg, deglet はもともと①規定、制度、ルール、秩序、習慣②社会制度③刑罰などの意味である。しかし、モンゴルの軍隊では秩序を守るようにさせる、秩序を与えるという意味でこれらを用い、事実、秩序を守るという大義名分の下リンチ、暴力、いじめが横行していた。
 - 26) カラは黒い、黒色であり、ゲルは部屋、住いである。カラゲルは直訳すると黒い部屋の意味であるが、普通、牢屋を指す。ここでは禁足の意味で使われている。
 - 27) 本来は行くという意味、軍隊では暴力の代名詞となっている。
 - 28) アスマン (asman) は本来①成熟後去勢された動物特に雄馬②読み書きのできないラマ僧を軽蔑した呼び名③読み書きのできない、との意味である。ツェレグは兵、兵士という意味。
 - 29) ハラ (halaa) は換える、替える、交代などの意味。
 - 30) ダムディン・スフバートル (1894-1923) はモンゴル革命家。モンゴル人民義勇軍を編成し、1921年、人民政府樹立後全軍司令官に就いた。社会主義時代のモンゴルでは、その軍事的功績などによって、人民革命の功労者として高く評価を受けていた (チョイバルサンほか 1971)。ウランバートル中心部のスフバートル広場には彼の騎馬像が今も残る。社会主義時代の各部隊にはスフバートル室というコーナーが設けられ、そこで兵士の文化学習や娯楽が行われる。
 - 31) 前にも触れたように、党や政府の政治家間の「闘争」で用いられるさまざまな拷問方法はソ連から輸入してきたものであるという証言もある (小長谷 2007: 163-164)。
 - 32) 黒い茶の意、牛乳の入っていないお茶。
 - 33) これは韻を踏む表現であり、モンゴル人にとっては、家畜の脚は脂肪がついていないためか、上等の肉とは見なされないことから、このような言い方が生じた。
 - 34) 民主化の後、国民のツェデンバルに対する反発感情が露わになり、反発の重要な理由の1つはファースト・レディにあるとされる考えは他の聞き取り調査でも確認できる (小長谷 2007: 189; 286; 289-290 など)。
 - 35) 中国の国境町エレレンで開かれている、もっぱら絨毯、水晶の食器類や酒などのモンゴルの製品を扱う市場。
 - 36) ナライハはウランバートル市から南東へ約 34 km 離れている。ここは軍隊駐屯地であった。
 - 37) オポーは丘の上に石を積み上げて塚を作り、そこに供え物をして祈る建築物。
 - 38) トールガとは鉛を指す。つまり今の若者は鉄や鋼のように強くはなく、鉛のように軟らかいとの意味である。
 - 39) ハローンビーシグ (халуун пийшиг)、かまどストーブのこと。
 - 40) カーシ: ロシア語 каша からの借用語。粥を指している。
 - 41) タンガリグは宣誓、誓詞との意味で、ボスは否定を表す。タンガリグ・ボスは直訳すれば誓いなき関係という意味になるが、暴力を指している。
 - 42) ナライハのゴルドクはナライハの小さな町、或いは団地という意味。ゴルドクはロシア語 городок、小さな町という意味。
 - 43) ガルダン・ハーン (1644-1697) はアルタイ山脈西方に拠っていた西モンゴルオイラトのジュンガル・ハーン国の3代目ハーン (在位 1671-1697) であり、ウイグル族の東トルキスタン及びカザフ族の中央アジアの一部も支配下におさめた。1688年、ガルダンは東モンゴルのハルハ部の領地に侵入してハルハ族を大破させた。敗れたハルハは清朝に保護を求める。1690年、清朝軍とウラーン・ブトン (現在の内モンゴル赤峰市に位置する) で衝突し

双方に大きな損害を出し、1696年、清の康熙帝が自ら軍を率いてガルダンと戦い、ゾーンモド（ウランバートルの東約30キロのところ。本文5.3.3を参照）での戦闘でガルダンは破れ、大半の兵士を失い敗走、病没した（宮脇1995）。

文 献

モンゴル語文献

Батжав, Л.

2003 *Цэргийн эрх зүйн үндсэн асуудал*. Улаанбаатар. (バトジャブ, L. 『軍事法学の基本問題』)

БНМАУБХЦТХ

1991 *Монголын цэргийн уламжлал хөгжил*. Улаанбаатар. (モンゴル人民共和国国防庁軍事史研究所編 『モンゴル軍の伝統と発展』)

БХЭШХ

2000 *Зэвсэглэл техникийн шинэчлэл- XXI зуун, ЭША-ын тайлан*. Улаанбаатар. (モンゴル国防科学院 『武器・技術の革新—21世紀』)

Галын бурхад сонины

1996 *Галын бурхад сонины : хавсралт тусгай дугаар Монгол генерал сонин*. Улаанбаатар. (『ガリーンボルハダ紙特集—モンゴルの将校』 1996.11.25)。

Гомбосүрэн, Д.

1983 *Хувьсгалын ардчилсан шатан дахь БНМАУ-ын эвсэгт хүчний байгуулалтын зарим асуудал*. Улаанбаатар. (ゴムボスレン, D. 『革命民主化時期のモンゴル人民共和国軍隊建設の問題』)

1998 *Монгол улсын зэвсэгт хүчний байгуулалтын түүх*. Тэргүүн дэвтэр. Улаанбаатар. (ゴムボスレン, D. 『モンゴル国防軍建設の歴史』 第1巻)

Дашцэрэн, Б. and Семенов, А.

1975 “*Монгол ард*” эскадриль. Улаанбаатар. (ダシツェレン, B., A. セミノフ編 『“モンゴル人民”号飛行中隊』)

МУБХЭШХ

1996 *Монгол цэргийн түүхийн товчоон*. Улаанбаатар. (モンゴル国防庁科学院 『モンゴル軍事簡史』 (下))

Намсрай, Т.

1985 *МАА-ын Пуужин артиллерийн зэвсэглэлийн албаны түүх 1921–1985 он*. Улаанбаатар. (ナムスライ, Т. 『モンゴル人民アリミーのロケット砲武器装備歴史 (1921–1985年)』)

Паламдорж, Ш.

2001 *Хорьдугаар зууны Монгол цэрэг*. Улаанбаатар. (Паламдолж, Sh. 『20世紀のモンゴル軍隊』)

Сайнаа, Э. and Туяа, О.

1981 *БНМАУ-ын зэвсэгт хүчин*. Улаанбаатар. (Сайнаа, E., O. Таяа監修 『モンゴル人民共和国の防衛軍』)

Соркин, Н. С.

1972 *Анхны эхлэл*. Улаанбаатар. (ソルキン, N.S. 『最初の展開』)

Цэдэвсүрэн, Д.

1981 *Монголе–Зөвлөлтийн Харилцаа (1921–1974). Баримт материал. Хоёрдугаар боть (1941–1974)*. Хоёрдугаар хэсэг. Улаанбаатар. (『モンゴルとソ連の關係 (1921–1974) 史料集, 第2巻 (1941–1974)』)

Шагдар, Д. and П.

1983 *Дагвадорже. Хилийн цэргийн 50 жил*. Улаанбаатар. (シヤグダル, D. ほか 『辺境軍の50年』)

日本語文献

今西錦司

1993 『草原行・遊牧論そのほか』増補版（今西錦司全集 第2巻）東京：講談社。

小長谷有紀

2004 『モンゴルの二十世紀——社会主義を生きた人びとの証言』東京：中央公論新社。

2007 『モンゴル国における20世紀（2）——社会主義を闘った人びとの証言』（国立民族学博物館調査報告71）大阪：国立民族学博物館。

小山内宏

1973 『中ソ戦争——中国の新戦略はなにをめざすか』東京：東京ジャーナルセンター。

サビーネ、フリューシユトウツク

2004 「アヴァンギャルドとしての自衛隊——将来の軍隊における軍事化された男らしさ」『人文学報』（京都大学人文科学研究所）90: 137-151。

白石典之

2006 『チンギス・カン——“蒼き狼”の実像』東京：中央公論新社（中公新書）。

杉山正明

1997 『岩波講座 世界歴史 11 中央ユーラシアの統合』東京：岩波書店。

2008 『興亡の世界史 09 モンゴル帝国と長いその後』東京：講談社。

田中克彦

1990 『草原の革命家たち——モンゴル独立への道』（増補改正版）東京：中央公論社（中公新書 344）。

1992 『モンゴル——民族と自由』東京：岩波書店。

2009 『ノモンハン戦争——モンゴルと満州国』東京：岩波書店（岩波新書）。

田中雅一

1998 『暴力の文化人類学』京都：京都大学学術出版会。

2004a 「軍隊の文化人類学的研究への視角——米軍の人種政策とトランスナショナルな性格をめぐって」『人文学報』（京都大学人文科学研究所）90: 1-21。

2004b 「軍隊と宗教——米軍におけるチャプレン」『人文学報』（京都大学人文科学研究所）90: 153-168。

チョイバルサン ほか

1971 『モンゴル革命史』田中克彦編訳，東京：未来社。

中野敏男・波平恒男・屋嘉比収・李孝徳

2006 『沖縄の占領と日本の復興』東京：青弓社。

中見立夫

1976 「ハイサンとオタイ——ボグド・ハーン政権下における南モンゴル人」『東洋学報』57(1・2): 125-170。

1995 「文書史料にみえるトクトホの“実像”」『アジア・アフリカ言語文化研究』（48・49）: 371-386。

西宮香穂里

2004 「軍隊は彼女の家族なのか？——米軍人妻の実用的、制度的、生活誌的研究をめぐって」『人文学報』（京都大学人文科学研究所）90: 23-77。

萩原 守

1997a 「清朝支配下のモンゴル」小長谷有紀編『暮らしがわかるアジア読本 モンゴル』pp. 87-92，東京：河出書房新社。

1997b 「モンゴルの独立から現代まで」長谷有紀編『暮らしがわかるアジア読本 モンゴル』pp. 93-98，東京：河出書房新社。

Ts. バトバヤル

2002 『モンゴル現代史』芦村京・田中克彦訳，東京：明石書店。

藤目ゆき編

2000 『国連軍の犯罪——民衆・女性から見た朝鮮戦争』東京：不二出版。

二木博史

1984 「ダムバドルジ政権の内モンゴル革命援助」『一橋論叢』92(3): 364-381。

- 1995 「リンチノのモンゴル革命」『東京外国語大学論集』51: 243-259。
1998 「モンゴル人民党第一回大会とブリヤート人革命家たち」『一橋論叢』120(2): 170-186。

宮脇淳子

- 1995 『最後の遊牧帝国—ジュンガル部の興亡』東京：講談社。

モンゴル科学アカデミー歴史研究所

- 1988 『モンゴル史』田中克彦監修・二木博史ほか訳，東京：恒文社。

山内健治

- 2006 「米軍基地化に伴う強制移転村の社会人類学的研究—沖縄県読谷村の事例から」『明治大学社会科学研究所紀要』44(2): 145-160。

ラティモア，オウエン

- 1966 『モンゴル—遊牧民と人民委員』磯野富士子訳，東京：岩波書店。

ロッサビ，モリス

- 2007 『現代モンゴル—迷走するグローバリゼーション』小長谷有紀監訳・小林志歩訳，東京：明石書店。

中国語文献

北京軍区政治部聯絡部編

- 1994 『蒙古国軍隊基本政治情況』（1921-1993）北京：国防大学出版社。

呼倫貝爾盟公安処辺防局編

- 1991 『呼倫貝爾公安辺防志略』呼和浩特：内蒙古自治区新聞出版局出版。

内蒙古自治区人民政府外事弁公室

- 1981 『外事参考』（機密）第17期，呼和浩特。

石広義編

- 1993 『内蒙古中蘇中蒙辺境大事記』（1648-1990）呼和浩特：内蒙古自治区公安庁辺防局。

古文書

Монгол улсын Үндэсний Төв Архив

Ф, А_234. Т1. ХН63. (モンゴル国立中央アルヒーフ)

インターネット

ニュース・ゴーゴー・モンゴル

- 2007 「人間の地獄を身をもって経験したいならば軍隊へ」(<http://news.gogo.mn/t/27855>, 2009年1月28日アクセス)。

モンゴル新聞出版概況

- 2008 「国防軍032部隊の兵士が肺炎にかかった」(<http://Sonin.mn> Монголын сонин хэвлэлийн тойм, 2009年6月17日アクセス)。

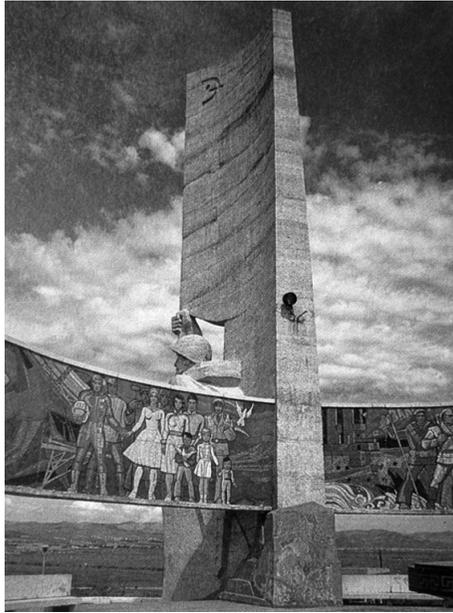


写真1 ザイサン・トルゴイにおけるソ連軍記念碑。2008年9月1日筆者撮影。

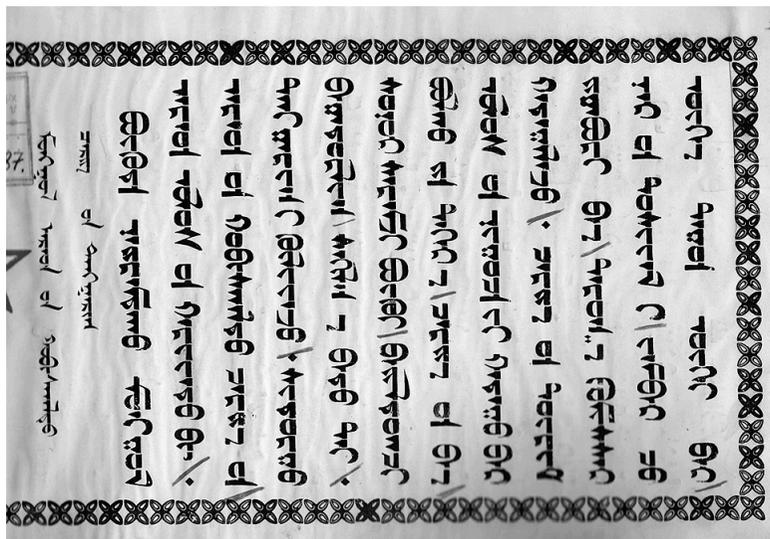


写真2 モンゴル人民革命軍誓詞（1941年）。モンゴル防衛中央文書館所蔵。

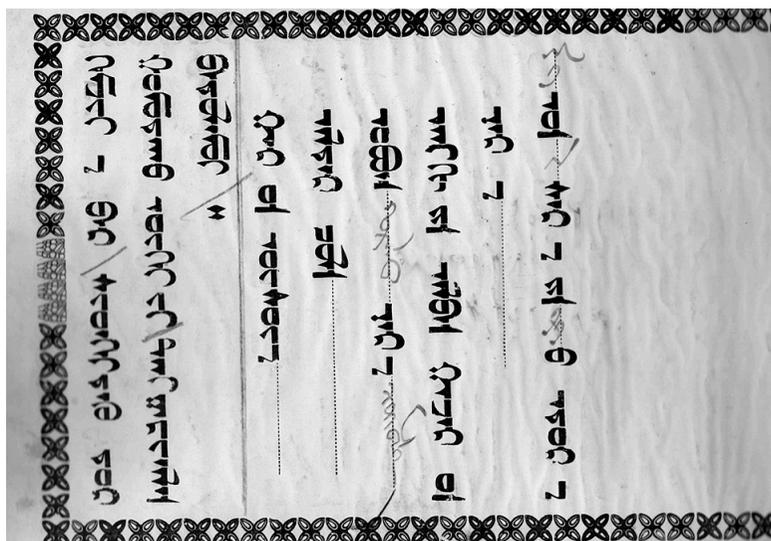


写真5 モンゴル人民革命軍誓詞（1941年）続き3。



写真6 元072部隊。1990年以降は310分隊。守衛兵の監視塔。2008年8月26日筆者撮影。



写真7 元072部隊標識物「072部隊；責任者：ロドン・ニム；使用目的：倉庫；
値段（所用資金）：（不明）トグリグ；使用開始日：1981年8月15日；
番号：05」と書かれている。2008年8月26日筆者撮影。



写真8 元072部隊の給湯処。2008年8月26日筆者撮影。



写真9 元072部隊パン製造所。2008年8月26日筆者撮影。



写真10 元072部隊パン製造所全景。2008年8月26日筆者撮影。



写真 11 元 072 部隊医療所。2008 年 8 月 26 日筆者撮影。



写真 12 元 072 部隊スチーム。2008 年 8 月 26 日筆者撮影。



写真 13 元 072 部隊建物旧跡の礎石。右に「1974 年 4 月 18 日」と書かれている。2008 年 8 月 26 日筆者撮影。



写真 14 元 072 部隊の倉庫。2008 年 8 月 26 日筆者撮影。



写真 15 元 072 部隊兵士宿舎。2008 年 8 月 26 日筆者撮影。



写真 16 元 072 部隊兵士宿舎外壁の標識物。「072 部隊、責任者：D/H. トルバト；目的：事務所；所用資金：164238 トグリグ；使用開始日：1975.7.25；番号：M01」とある。2008 年 8 月 26 日筆者撮影。



写真 17 元 072 部隊兵士宿舎入り口のスローガン。「祖国を守る法律に従い、兵役に服し、自然を守ることはすべての国民の義務と使命である」とある。2008 年 8 月 26 日筆者撮影。



写真 18 元 072 部隊兵士宿舎入り口のスローガン。左は、「モンゴル国の大地、その山水、動植物、自然の資源の状態は人民の権力と政府の保護によるものである」と、右は「モンゴル国の憲法を知り、守れ」とある。2008 年 8 月 26 日筆者撮影。



写真19 元072部隊犯罪兵住居の周囲の石垣と有刺鉄線。2008年8月26日筆者撮影。

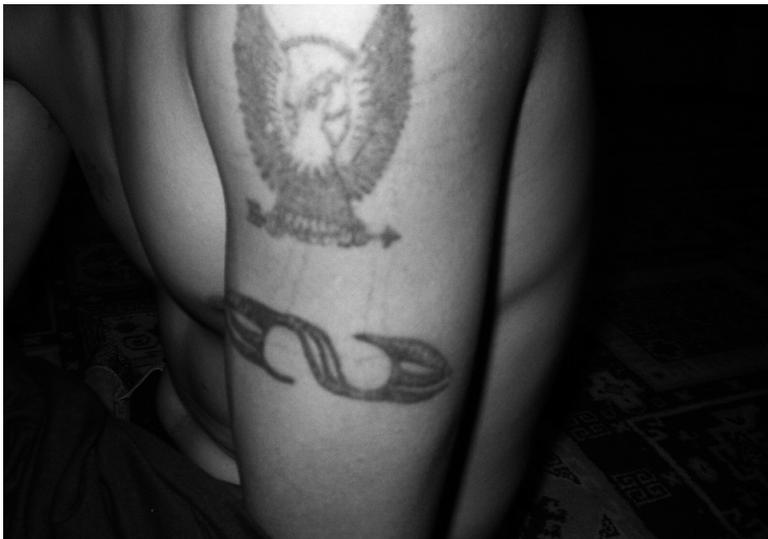


写真20 兵士の刺青。鷹と蛇が描かれている。2008年9月1日筆者撮影。



写真 21 兵士の刺青。腕には剣、それに絡みつく植物と骸骨が、胸には花が彫られている。2008年9月1日筆者撮影。



写真 22 兵士の宣誓。2005～2006年の間に兵役についた。2008年9月1日筆者撮影。



写真 23 ウランバートル近くの016部隊軍官住宅。2008年9月2日筆者撮影。



写真 24 016部隊の標識物。「防衛軍第016部隊」とある。2008年9月3日筆者撮影。



写真 25 016 部隊の建物と走行中の兵士。2008 年 9 月 2 日筆者撮影。



写真 26 ブーンバヤン現駐屯部隊の標識。「武装力量第336部隊」とある。2008 年 8 月 30 日筆者撮影。



写真 27 ズーンバヤン現部隊第336部隊標識物。「將軍D.フバートルの名を以て命名した騎兵師が1932年8月15日、戦功赤旗星第六タムサグブラグにて創立された」と書いている。2008年8月30日筆者撮影。



写真 28 兵士刺青。手の甲の方から、苗字の頭文字、月、太陽、火、退役年代の1990。2008年8月26日筆者撮影。



写真 29 旧ズゥーンバヤン部隊の建物。2008年8月30日筆者撮影。



写真 30 旧ズゥーンバヤン部隊駐屯地における兵士宿舎遠景。ほぼすべての建物は放置され、窓にはガラスが張られていない。2008年8月30日筆者撮影。



写真 31 旧ズーンバヤン部隊軍官用プール。2008年8月30日筆者撮影。



写真 32 旧ズーンバヤン部隊駐屯地に放置されている大砲の薬莖。2008年8月30日筆者撮影。



写真 33 旧ズゥーンバヤン部隊駐屯地における大砲の薬莖で囲まれた建物。2008年8月30日筆者撮影。



写真 34 旧ズゥーンバヤン部隊駐屯地に放置されている戦車。2008年8月30日筆者撮影。



写真 35 ナライハにおける半地下飛行場。円印の下方。2008年9月2日筆者撮影。



写真 36 ナライハにおける元ソ連駐留部隊の兵士宿舎。2008年9月2日筆者撮影。



写真 37 ナライハにおける元モンゴル駐留ソ連軍官住宅前の戦車模型。2008年9月2日筆者撮影。



写真 38 ガルダンが敗戦した場所とされるゾーンモド。2008年9月1日筆者撮影。



資料1 ウランバートル市におけるモンゴル国軍官センター。彫像に「モンゴル国の優れた英雄ロドンネーダングル」と書かれている。2008年9月1日筆者撮影。



資料2 モンゴル国軍官センター正門の守衛兵たち。2008年9月1日筆者撮影。